

一般国道57号中九州横断道路建設事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (2)

岡 遺 跡
穴 井 遺 跡
穴井南遺跡
千仏南遺跡
田原園遺跡

2 0 0 7

大分県教育庁埋蔵文化財センター



一般国道57号中九州横断道路建設予定地遠景（穴井遺跡より西を望む）



穴井遺跡全景



岡遺跡下ノ原地区1区全景（西より）



岡遺跡神ノ木地区全景（北より）

序 文

本書は大分県教育委員会が一般国道57号中九州横断道路の建設工事に伴い、国土交通省九州地方整備局佐伯河川国道事務所の委託を受けて実施した岡遺跡、穴井遺跡、穴井南遺跡、千仏南遺跡、田原園遺跡の発掘調査報告書です。一般国道57号中九州横断道路は大分市から豊後大野市・竹田市を經由して熊本県に至るルートを結ぶ九州中央部における重要な幹線道路として計画されたものです。

今回、報告書に掲載しました5遺跡は豊後大野市の千歳一大野間の工事に伴う発掘調査の報告です。

この区間は、大野川流域の火山性台地上を走り、当初から旧石器時代から古墳時代の遺跡が存在することで注目されていました。

特筆すべき調査成果として、岡遺跡では、縄文・弥生時代の住居跡をはじめ、縄文時代から弥生時代の大量の土器が発見されました。中でも縄文時代の玦状耳飾や弥生時代の小型仿製鏡が出土したことは重要な発見になりました。また、穴井遺跡では縄文時代から古墳時代の遺構群に加え、良好な状態の旧石器時代の石器群が確認できました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また、学術研究資料として広く御活用いただけましたら幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで多くの方々の御理解と御協力をいただきましたことに対し、心から感謝申し上げます。

平成19年3月30日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 小 玉 学 司

例 言

1. 本書は、豊後大野市に所在する岡遺跡、穴井遺跡、穴井南遺跡、千仏南遺跡、田原園遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は一般国道57号中九州横断道路建設事業の実施に伴い、国土交通省九州地方整備局佐伯河川国道事務所の委託を受けて、大分県教育委員会が実施した。
3. 本書に掲載する主要発掘調査区は以下の通りである。

遺 跡 名	担 当 者	調査期間
岡遺跡（下ノ原地区）	原田昭一・井上索裕	平成16年5月～平成17年2月
岡遺跡（神ノ木地区）	栗原 眞・阿比留士朗・安井由加梨	平成14年12月～平成15年1月
穴井遺跡	原田昭一・山崎文子	平成15年8月～平成15年10月
穴井南遺跡	原田昭一・山崎文子	平成16年2月～平成16年3月
千仏南遺跡	村上久和・松本康弘・衛藤麻衣	平成13年1月～平成13年2月
田原園遺跡	原田昭一	平成15年12月

4. 現地での写真撮影・遺構の実測は各調査員が担当した。
5. 遺物実測・トレースなど報告書作成に伴う諸作業については、調査員が担当したほか、大分県教育庁埋蔵文化財センターの整理作業員の多大な協力を得た。千仏南遺跡出土の経石の墨書文字の判読は西哲弘（大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第二課主幹）による。
6. 出土遺物ならびに図面・写真などは、大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市大字中判田ビワノ門1977）において保管している。なお、岡遺跡（神ノ木地区）の出土遺物に関しては、「岡遺跡（六歩一地区）」として保管している。
7. 本書で使用する方位は、いずれも座標北である。座標値については、世界測地系の数値を記している。
8. 本書の執筆は、第1・3・6章を原田昭一、第2・4章を原田昭一・山崎文子、第5章を松本康弘が担当した。
9. 本書の編集は、原田が行った。

目次

第1章 はじめに (原田昭一)	
第1節 調査の経緯	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の経過	1
3. 調査の体制	2
第2節 遺跡の立地と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
第2章 岡遺跡の調査 (原田昭一・山崎文子)	5
第1節 調査の概要	5
第2節 下ノ原地区	5
第3節 神ノ木地区	21
第4節 まとめ	30
第3章 穴井遺跡の調査 (原田昭一)	41
第1節 調査の概要	41
第2節 遺構と遺物	42
第3節 まとめ	64
第4章 穴井南遺跡の調査 (原田昭一・山崎文子)	65
第1節 調査の概要	65
第2節 遺構と遺物	66
第5章 千仏南遺跡の調査 (松本康弘)	71
第1節 調査の概要	71
第2節 遺構と遺物	71
第3節 まとめ	79
第6章 田原園遺跡の調査 (原田昭一)	83
第1節 調査の概要	83
第2節 遺構と遺物	83

図 版 目 次

第1図	中九州横断道(犬飼-大野間)と 発掘調査対象遺跡(1/100,000)……………	1	第22図	岡遺跡下ノ原地区 出土遺物実測図⑦(2/3)……………	20
第2図	遺跡分布図(1/50,000)……………	4	第23図	岡遺跡神ノ木地区 遺構配置図(1/200)……………	21
第3図	岡遺跡調査区位置図(1/3,000)……………	6	第24図	岡遺跡神ノ木地区 1号竪穴実測図(1/80)……………	22
第4図	岡遺跡下ノ原地区Ⅰ区 遺構配置図(1/300)……………	7	第25図	岡遺跡神ノ木地区1号竪穴 出土遺物実測図①(1/3)……………	23
第5図	岡遺跡下ノ原地区Ⅲ区 遺構配置図(1/300)……………	8	第26図	岡遺跡神ノ木地区1号竪穴 出土遺物実測図②(1/3)……………	24
第6図	岡遺跡下ノ原地区 1号竪穴実測図(1/80)……………	9	第27図	岡遺跡神ノ木地区1号竪穴 出土遺物実測図③(1/3)……………	25
第7図	岡遺跡下ノ原地区1号竪穴 出土遺物実測図①(1/4)……………	9	第28図	岡遺跡神ノ木地区1号竪穴 出土遺物実測図④(1/3)……………	26
第8図	岡遺跡下ノ原地区1号竪穴 出土遺物実測図②(1/3)……………	10	第29図	岡遺跡神ノ木地区1号竪穴 出土遺物実測図⑤(1/3)……………	27
第9図	岡遺跡下ノ原地区1号竪穴 出土遺物実測図③(2/3)……………	10	第30図	岡遺跡神ノ木地区1号竪穴 出土遺物実測図⑥(1/3)……………	28
第10図	岡遺跡下ノ原地区 2号竪穴実測図(1/80)……………	11	第31図	岡遺跡神ノ木地区1号竪穴 出土遺物実測図⑦(1/3)……………	29
第11図	岡遺跡下ノ原地区2号竪穴 出土遺物実測図①(1/4)……………	11	第32図	岡遺跡神ノ木地区1号竪穴 出土遺物実測図⑧(1/3)……………	32
第12図	岡遺跡下ノ原地区2号竪穴 出土遺物実測図②(1/3)……………	12	第33図	岡遺跡神ノ木地区 出土遺物実測図(1/1・2/3・1/3)……………	33
第13図	岡遺跡下ノ原地区2号竪穴 出土遺物実測図③(2/3)……………	12	第34図	穴井遺跡調査区位置図(1/2,000)……………	41
第14図	岡遺跡下ノ原地区 3号竪穴実測図(1/80)……………	13	第35図	穴井遺跡調査区北東壁断面図(1/60)……………	42
第15図	岡遺跡下ノ原地区3号竪穴 出土遺物実測図(1/4)……………	13	第36図	穴井遺跡遺構配置図(1/150)……………	43・44
第16図	岡遺跡下ノ原地区 出土遺物実測図①(1/3)……………	15	第37図	穴井遺跡グリッド配置図(1/250)……………	45
第17図	岡遺跡下ノ原地区 出土遺物実測図②(1/3)……………	16	第38図	穴井遺跡石器出土地点分布図(1/50) ……	46
第18図	岡遺跡下ノ原地区 出土遺物実測図③(1/3)……………	17	第39図	穴井遺跡出土石器実測図①(2/3)……………	48
第19図	岡遺跡下ノ原地区 出土遺物実測図④(1/3)……………	18	第40図	穴井遺跡出土石器実測図②(2/3)……………	50
第20図	岡遺跡下ノ原地区 出土遺物実測図⑤(1/4)……………	19	第41図	穴井遺跡出土石器実測図③(2/3)……………	51
第21図	岡遺跡下ノ原地区 出土遺物実測図⑥(1/2)……………	19	第42図	穴井遺跡出土石器実測図④(2/3)……………	52
			第43図	穴井遺跡出土石器実測図⑤(1/3)……………	53
			第44図	穴井遺跡1号竪穴実測図(1/80)……………	53
			第45図	穴井遺跡1号竪穴 出土遺物実測図①(1/4)……………	54
			第46図	穴井遺跡1号竪穴 出土遺物実測図②(1/3)……………	54

第47図	穴井遺跡2号竪穴実測図(1/80)……………	54	第65図	穴井遺跡1号土坑 出土遺物実測図②(1/3)……………	61
第48図	穴井遺跡2号竪穴 出土遺物実測図(1/4・1/3)……………	55	第66図	穴井遺跡2号土坑実測図(1/20)……………	62
第49図	穴井遺跡3号竪穴実測図(1/80)……………	55	第67図	穴井遺跡2号土坑 出土遺物実測図(1/3)……………	62
第50図	穴井遺跡3号竪穴 出土遺物実測図(1/4)……………	56	第68図	穴井遺跡出土遺物実測図①(1/3)……………	62
第51図	穴井遺跡5号竪穴実測図(1/80)……………	56	第69図	穴井遺跡出土遺物実測図②(1/3)……………	63
第52図	穴井遺跡5号竪穴 出土遺物実測図①(1/4)……………	57	第70図	穴井南遺跡調査区位置図(1/2,000)……………	65
第53図	穴井遺跡5号竪穴 出土遺物実測図②(1/3)……………	57	第71図	穴井南遺跡遺構配置図(1/200)……………	66
第54図	穴井遺跡6号竪穴実測図(1/80)……………	57	第72図	穴井南遺跡1号竪穴実測図(1/80)……………	67
第55図	穴井遺跡7号竪穴実測図(1/80)……………	57	第73図	穴井南遺跡1号竪穴 出土遺物実測図①(1/4)……………	67
第56図	穴井遺跡7号竪穴 出土遺物実測図①(1/4)……………	58	第74図	穴井南遺跡1号竪穴 出土遺物実測図②(1/3)……………	68
第57図	穴井遺跡7号竪穴 出土遺物実測図②(1/3)……………	58	第75図	穴井南遺跡1号竪穴 出土遺物実測図③(1/1)……………	68
第58図	穴井遺跡8号竪穴実測図(1/80)……………	58	第76図	穴井南遺跡出土遺物実測図(1/3)……………	69
第59図	穴井遺跡8号竪穴 出土遺物実測図①(1/4)……………	59	第77図	千仏南遺跡調査区位置図(1/3,000)……………	71
第60図	穴井遺跡8号竪穴 出土遺物実測図②(1/3)……………	59	第78図	千仏南遺跡遺構配置図(1/50)……………	72
第61図	穴井遺跡9号竪穴実測図(1/80)……………	59	第79図	千仏南遺跡石造物実測図(1/50)……………	73
第62図	穴井遺跡9号竪穴 出土遺物実測図(1/4・1/3)……………	60	第80図	千仏南遺跡1・5号土坑実測図(1/30)……………	74
第63図	穴井遺跡1号土坑実測図(1/20)……………	60	第81図	千仏南遺跡2・6号土坑実測図(1/30)……………	75
第64図	穴井遺跡1号土坑 出土遺物実測図①(1/3)……………	61	第82図	千仏南遺跡3号土坑実測図(1/40)……………	76
			第83図	千仏南遺跡石造物実測図①(1/15)……………	77
			第84図	千仏南遺跡石造物実測図②(1/15)……………	78
			第85図	千仏南遺跡石造物実測図③(1/15)……………	79
			第86図	田原園遺跡調査区位置図(1/4,000)……………	83
			第87図	田原園遺跡出土遺物実測図(1/4)……………	83

表 目 次

表1	岡遺跡神ノ木地区 1号竪穴出土土器観察表(1)……………	30	表6	穴井遺跡旧石器ブロック石器データー……………	48
表2	岡遺跡神ノ木地区 1号竪穴出土土器観察表(2)……………	31	表7	穴井遺跡包含層出土石器一覧……………	49
表3	岡遺跡神ノ木地区 1号竪穴出土土器観察表(3)……………	32	表8	千仏南遺跡1号土坑出土経石一覧……………	80
表4	穴井遺跡遺構一覧表……………	42	表9	千仏南遺跡2号土坑出土経石一覧……………	80
表5	穴井遺跡旧石器ブロック石器一覧表……………	47	表10	千仏南遺跡3号土坑出土経石一覧……………	81
			表11	千仏南遺跡4号土坑出土経石一覧……………	81
			表12	千仏南遺跡出土経石一覧(1)……………	81
			表13	千仏南遺跡出土経石一覧(2)……………	82

写真図版目次

巻頭カラー

一般国道57号中九州横断道路建設予定地遠景(穴井遺跡より西を望む)・穴井遺跡全景・岡遺跡下ノ原地区1区全景(西より)・岡遺跡神ノ木地区全景(北より)

写真図版1(岡遺跡)

下ノ原地区1号竪穴
下ノ原地区1号竪穴床硬化面周辺
下ノ原地区2号竪穴遺物出土状態
下ノ原地区2号竪穴完掘状態
下ノ原地区3号竪穴遺物出土状態
下ノ原地区3号竪穴完掘状態
下ノ原地区4号竪穴完掘状態
下ノ原地区Ⅲ区全景(東から)…………… 87

写真図版2(岡遺跡)

神ノ木地区1号竪穴遺物出土状態
神ノ木地区1号竪穴完掘状態
下ノ原地区1号竪穴出土遺物(第7～9図参照)…………… 88

写真図版3(岡遺跡)

下ノ原地区2号竪穴出土遺物(第11～13図参照)
下ノ原地区3号竪穴出土遺物(第15図参照)
下ノ原地区出土遺物(第16～17図参照)…………… 89

写真図版4(岡遺跡)

下ノ原地区出土遺物(第17～21図参照)…………… 90

写真図版5(穴井遺跡)

旧石器出土状態(1)・旧石器出土状態(2)
旧石器出土状態(3)・旧石器出土状態(4)
1号竪穴・2号竪穴・3号竪穴・5号竪穴…………… 91

写真図版6(穴井遺跡)

5号竪穴遺物出土状態(1)
5号竪穴遺物出土状態(2)
6号竪穴・7号竪穴・8号竪穴・9号竪穴
1号土坑・3号土坑…………… 92

写真図版7(穴井遺跡)

石器(第39～42図参照)…………… 93

写真図版8(穴井遺跡)

1号竪穴出土遺物(第45～46図参照)
3号竪穴出土遺物(第50図参照)
5号竪穴出土遺物(第52～53図参照)
8号竪穴出土遺物(第59～60図参照)…………… 94

写真図版9(穴井遺跡)

9号竪穴出土遺物(第62図参照)
1号土坑出土遺物(第64・65図参照)
1号土坑出土遺物(第67図参照)
穴井遺跡出土遺物(第69図参照)…………… 95

写真図版10(穴井南遺跡)

1号竪穴遺物出土状態(北から)
1号竪穴完掘状態(北から)
1号竪穴側壁柱穴完掘状態
1号竪穴遺物出土状態(1)
1号竪穴遺物出土状態(2)
1号竪穴鏡片出土状態
1号竪穴出土遺物(第73～75図参照)…………… 96

写真図版11(千仏南遺跡)

調査区全景(北から)・調査区全景(南から)
調査区全景(東から)…………… 97

写真図版12(千仏南遺跡)

1号石塔・2号石塔・3号石塔・4号石塔…………… 98

写真図版13(千仏南遺跡)

5号石塔・7号石塔
調査区全景(石塔除去後)・調査区前方部…………… 99

写真図版14(千仏南遺跡)

3号土坑半裁状態・3号土坑経石検出状態
3号土坑完掘状態・4号土坑上部石組検出状態
4号土坑上部石組基部検出状態
4号土坑経石出土状態
2・6号土坑完掘状態
調査区完掘状態…………… 100

写真図版15(千仏南遺跡)

1号土坑出土経石
2号土坑出土経石
3号土坑出土経石
4号土坑出土経石…………… 101

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

1 調査に至る経過

一般国道57号中九州横断道路は、大分市と熊本市を結ぶ延長120kmの地域高規格道路であり、このうち豊後大野市犬飼町から千歳町の「犬飼千歳道路」（4.3km）が平成7年度に、豊後大野市千歳町から大野町の「千歳大野道路」（8.7km）が平成8年度に事業化されている。一般国道57号中九州横断道路は大分集積圏と熊本集積圏とを連結し、また、九州縦貫自動車道と東九州自動車道とを連絡することによって地域間交流を促す重要な役割をはたすとともに、豊肥地域の地域経済の活性化のために大いに期待されるものであった。

平成12年から大分県教育委員会では国土交通省九州地方整備局佐伯河川国道事務所の委託を受けて、事業対象地域の埋蔵文化財に対して発掘調査を行ってきた。

2 調査の経過

発掘調査は「犬飼千歳道路」と「千歳大野道路」とを並行して、事業対象地域の買収が行われた遺跡から取りかかった。「千歳大野道路」に関しては、平成12年度にまず、千仏南遺跡の調査を行った。平成13～15年度には「犬飼千歳道路」を主体に発掘調査を実施し、「千歳大野道路」に関しては、平成14年度に岡遺跡のうち、工事用道路建設で緊急を要した神ノ木地区の発掘調査を行ったのみである。平成15・16年度には、本格的に「千歳大野道路」の発掘調査に取りかかり、穴井遺跡・穴井南遺跡・田原園遺跡をはじめ、岡遺跡のうち残された下ノ原地区の発掘調査を行った。



【犬飼千歳道路】

1 下ノ原遺跡 2 高添遺跡 3 新殿岡遺跡 4 古城・五郎丸遺跡 5 庵の平遺跡

【千歳大野道路】

6 田原園遺跡 7 岡遺跡 8 穴井遺跡 9 穴井南遺跡 10 千仏南遺跡

第1図 中九州横断道路（犬飼-大野間）と発掘調査対象遺跡（1/100,000）

2 調査の体制

【平成12年度】

調査主体 大分県教育委員会

大分県教育委員会

教 育 長 田中恒治

文 化 課 課 長 山本芳直

参事兼課長補佐 伊藤正行

参事兼課長補佐 清水宗昭

調 査 員 栗田勝弘（主幹兼埋蔵文化財第二係長）

村上久和（埋蔵文化財第二係副主幹、千仏南遺跡調査）

松本康弘（埋蔵文化財第二係主査、千仏南遺跡調査）

衛藤麻衣（埋蔵文化財第二係嘱託、千仏南遺跡調査）

【平成14年度】

調査主体 大分県教育委員会

大分県教育委員会

教 育 長 石川公一

文 化 課 課 長 岩尾康晴

参事兼課長補佐 麻生祐治

参事兼課長補佐 清水宗昭

調 査 員 坂本嘉弘（発掘調査受託事業担当主幹）

栗原 眞（発掘調査受託事業担当副主幹、岡遺跡神ノ木地区調査）

阿比留史朗（発掘調査大型事業担当嘱託、岡遺跡神ノ木地区調査）

安井由加梨（ 同上 、 同上 ）

【平成15年度】

調査主体 大分県教育委員会

大分県教育委員会

教 育 長 深田秀生

文 化 課 課 長 今永一成

参事兼課長補佐 麻生祐治

参事兼課長補佐 清水宗昭

調 査 員 坂本嘉弘（発掘調査受託事業担当主幹）

原田昭一（調査第二課受託事業担当副主幹、穴井・穴井南・田原園遺跡調査）

山崎文子（調査第二課受託事業担当嘱託、穴井・穴井南遺跡調査）

【平成16年度】

調査主体 大分県教育委員会

大分県教育委員会

教 育 長 深田秀生

埋蔵文化財センター所長 岩尾康晴

次 長 兼 総 務 課 長 益永孝則

調 査 員 坂本嘉弘（調査第二課課長）

原田昭一（調査第二課受託事業担当副主幹、岡遺跡下ノ原地区調査）

井上索裕（調査第二課受託事業担当嘱託、岡遺跡下ノ原地区調査）

第2節 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

本書で報告する遺跡群は旧大野郡大野町をはじめ、一部、千歳村に位置する。平成13年3月、この大野町・千歳村をはじめとして三重町・犬飼町・朝地町・緒方町・清川村の旧大野郡に属する7町村が合併し、豊後大野市となったが、豊後大野市は大分県南部の大半を流域面積とする大野川の中流域に広がる地域である。

大野川は九州中央部の山稜地帯に源を発し、阿蘇溶結凝灰岩を基盤とする火山性台地を浸食して流れており、そのため、標高100～300mの広大な台地と大野川流域の谷底平野に地形が大きく分かれる特徴をもつ。今回、調査が行われた旧大野郡大野町は、南を大野川本流、東を代三五山、王子山、田口山、北を雲ヶ背岳、御座ヶ岳、西を神角寺に囲まれた茜川流域の谷状平野及びその周辺を取り囲む台地が広がる地形をもつ。中には100万㎡にも及ぶ広大な台地も広がり、これらの台地上は良好な畑地として多くの農産物を生んでいる。

気候は大分平野と久住山・祖母山の山稜部との中間の様相をもち、四季を通じて温暖であり、平坦地の平均気温が15～16℃ときわめて農耕に適しており、広大な火山性台地の存在とともに古くから農業が基幹産業となりえる条件に恵まれていたことがわかる。

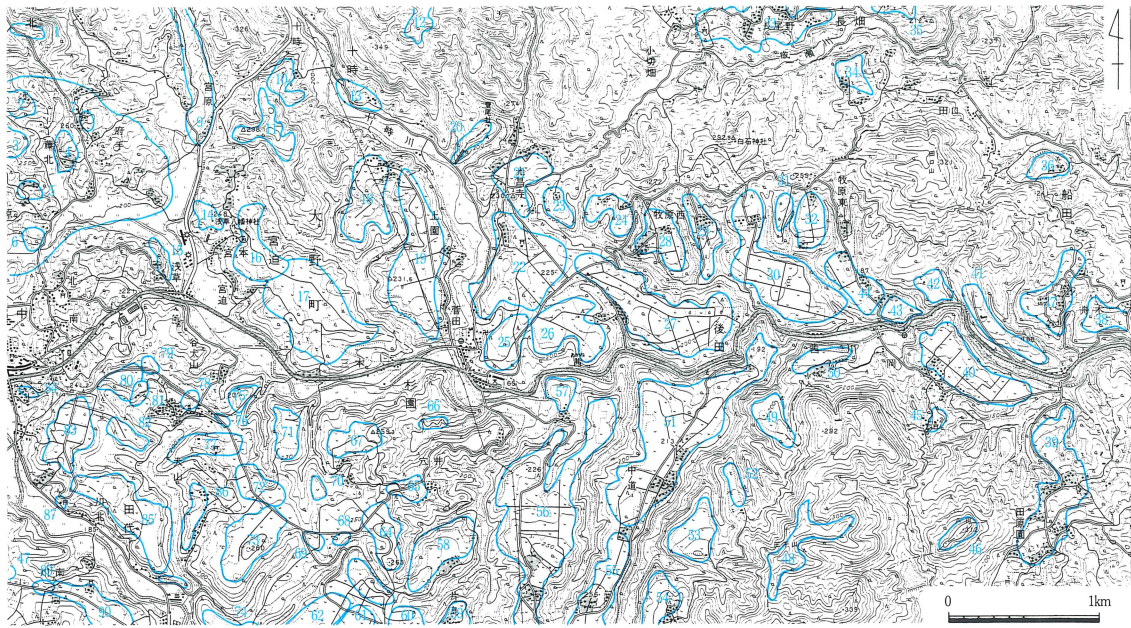
2 歴史的環境

『豊後国風土記』に「此郡所部悉皆原野也 因斯名曰大野郡」とある。大野郡の地名の由来を記した件であるが、広大な原野が広がる土地であることから、地名が生まれたように、広大な原野が広がるのが、この地域を最も特徴づけるものである。この広大な原野は火山性台地からなる肥沃な土地であるため、太古から様々な自然の恵みをもたらしている。そのため、現在に至っても県下を代表する畑作地帯として受け継がれている。

旧石器時代、この大野原台地上には多くの遺跡が確認されている。台地上に堆積した火山灰をみると始良Tn火山灰層が約21,000年前のものであり、その下層である黒色帯(B.B)から石器が断片的に出土するため、約21,000年以前に人類の足跡が確認できることがわかる。駒方遺跡・大塚遺跡では比較的古いナイフ形石器が出土しており、やや新しい時期のナイフ形石器が製紙工場前遺跡・松木遺跡から出土しているが、この時期には槍先形尖頭器や台形状の石器が伴っている。また、旧石器時代の最終末である13,000～10,000年前には、細石刃・細石核が出現し、宮地前遺跡や小牧遺跡などで確認されている。

縄文時代に至ると、宝福寺遺跡、郡山遺跡、夏足原遺跡F地区などをはじめとして押型文土器が確認されている。これ以降、縄文時代前期・中期・後期前半の遺跡は乏しく、後期後半になり、ふたたび遺跡が増加する。夏足原遺跡F地区、駒方遺跡C地区、宮地前遺跡などをはじめとした遺跡群が確認でき、特に、駒方遺跡では、土偶や注口土器など特筆すべき遺物も出土している。晩期に至ると、精製の黒色磨研土器や粗製土器が出土する松ノ木遺跡、宮地前遺跡、片島遺跡などがみられる。なかでも駒方遺跡B地区では10基の粗製甕を利用した甕棺がみられ、大野川流域における墓制を考えるうえで重要な情報を提示してくれる。

弥生時代では、前期から中期前半にかけての遺跡はひじょうに乏しい。中期後半～後期前半になると近中遺跡、二本木遺跡、松木遺跡などの遺跡が存在するが、その数は未だ少ない。後期後半になると大野郡全域において共通するが、集落遺跡の爆発的な増大がみられる。原遺跡、夏足原遺跡、二本木遺跡、松木遺跡などをはじめとしてその集落規模も大きい。この傾向は古墳時代前期まで続き、弥生時代後期後半に出現した集落遺跡はこの時期まで存続するものが多い。しかし、これに続く集落遺跡はほとんど確認できず、台地上から忽然とムラが消える様相をもつ。これは、台地上を捨て、大野川流域の谷部に生活の拠点を移していったとも考えられようが、谷部においても当該期の集落遺跡が確認できているわけではない。



- 1 高畑砦跡 2 常忠寺遺跡 3 藤北館跡 4 東阿弥陀堂跡 5 西阿弥陀堂跡 6 泊寺跡 7 府手の馬場 8 藤北遺跡群 9 宮原遺跡 10 十時上畑遺跡 11 浅草山寨 12 光昌寺城 13 高山遺跡 14 浅草八幡神社 15 浅草横穴古墳群 16 宮迫遺跡 17 宮本原遺跡 18 上園西遺跡群 19 上園遺跡群 20 豊尾社 21 光昌寺遺跡 22 大久保遺跡群 23 南原遺跡 24 萩尾遺跡 25 茜遺跡 26 小茜北遺跡 27 長迫東遺跡群 28 西分一遺跡 29 城小野遺跡 30 安面遺跡群 31 寺遺跡 32 大工川遺跡 33 長小野遺跡群 34 高無礼遺跡 35 牛頭遺跡 36 横脇遺跡 37 原遺跡 38 米山・南遺跡 39 田原園遺跡 40 岡遺跡 41 長小野原遺跡 42 いっせなん遺跡 43 小牧A遺跡 44 小牧B遺跡 45 岡キリシタン墓 46 八山遺跡 47 神原遺跡 48 王子山遺跡 49 中道川北遺跡 50 下鶴遺跡 51 中道・萩田尾遺跡 52 中道川遺跡 53 鏡北遺跡 54 鏡遺跡 55 広戸・ウソノ遺跡群 56 相が迫遺跡 57 栗木遺跡 58 井野遺跡 59 田尾遺跡 60 下田尾遺跡 61 片島向原東遺跡 62 片島向原西遺跡 63 片島道下遺跡 64 穴井遺跡 65 穴井北遺跡 66 松ヶ迫岩陰遺跡 67 萩迫遺跡 68 今峠東遺跡 69 今峠遺跡 70 穴井南遺跡 71 天道南遺跡 72 えのきどくぼ遺跡 73 大塚遺跡 74 松の木遺跡 75 天道北遺跡 76 トラゴゼン遺跡 77 岡山遺跡 78 カジヤ遺跡 79 花立遺跡 80 赤鳥居遺跡 81 鶴原城遺跡 82 千仏東遺跡 83 千仏南遺跡 84 観音堂遺跡 85 川北遺跡 86 植木寺屋敷遺跡 87 杵築社 88 川北横穴 89 石仏遺跡 90 杉園遺跡

第2図 遺跡分布図 (1/50,000)

第2章 岡遺跡の調査

第1節 調査の概要

岡遺跡は大分県豊後大野市大野町後田（旧 大野郡千歳村大字後田）に所在する。大野川中流域の台地上に存在する丘陵頂部付近の緩斜面に位置するが、旧来の地形が残る場所は本調査区を含むごく一部のみであり、周辺には広大な畑地が広がる。これらの畑地は昭和40年代に開墾されているが、その際に数多くの土器片が出土したと伝えられている。

台地上の最高所に集落がみられ、集落からやや降りた緩斜面や平坦地に畑地を営んでいる。発掘調査は神ノ木地区と下ノ原地区に分けて行われた。神ノ木地区は集落内の一般道路を工事用車両が通行するため拡幅作業が行われるのに先立って平成14年12月から平成15年1月にかけて行われている。また、本線部分にあたる下ノ原地区は天地返し等によって遺跡が破壊されていた場所もみられたが、平成16年5月から平成17年2月にかけて発掘調査を行った。

第2節 下ノ原地区

下ノ原地区はⅠ～Ⅲ区に分けて発掘調査を行った。Ⅰ区には竪穴住居2基と土坑・ピットが数基検出できたほか、クロボク層から縄文土器が出土する良好な包含層が確認できた。Ⅱ区は天地返し等により、ほとんど遺構が破壊されていた。しかし、攪乱土中からは土器をはじめとした遺物出土しており、できるかぎり、遺物の採取を行った。Ⅲ区も部分的に天地返し等により、遺構が破壊されていた箇所がみられたが、竪穴住居2基や土坑をはじめクロボク層から縄文土器が出土する良好な包含層が確認できた。

1号竪穴（第6図）

Ⅰ区の調査区の中央部より、やや西側において確認された円形竪穴住居である。残存する深さは40cm程度であり、径8.2mを測る。中央に径1.2～1.4m、深さ10cm程度の浅い円形土坑がみられ炉跡であったものと考えられる。この円形土坑の肩部に25×30cmの大きさを測る扁平な礫がみられ、台石として利用していたことがわかる。中央土坑の周囲にはそれを取り囲むように14基のピットが不規則にみられ、柱穴であったことが考えられる。中央土坑からピットが分布する範囲の床面は硬化しており、当時のヒトがこの範囲を生活の空間として利用していたことがわかる。出土遺物は少ないが、特に磨製石鏃及びその未製品が多く出土したことが特徴的である。この竪穴では磨製石鏃及び、その未製品だけでなく、剥片や碎片も出土しているため、製作跡として認識できよう。

出土遺物は第7～9図に示した。第7図1～3は壺である。1は鋤先口縁をもつものであり、外面にタテハケ、内面にヨコハケが施されている。2・3の頸部には断面三角形の突帯が巡らされており、2には2条確認できる。4は壺の底部であろうか。平底をもち、縦方向のミガキが施されている。5・6は甕であり、まっすぐ上方のばす口縁の端部を平らに仕上げ、外面にキザミ目をもつ断面三角突帯を貼り付けている。第8図はいずれも川原石を利用したもので、1は砂岩製磨石、2は粘板岩製砥石である。

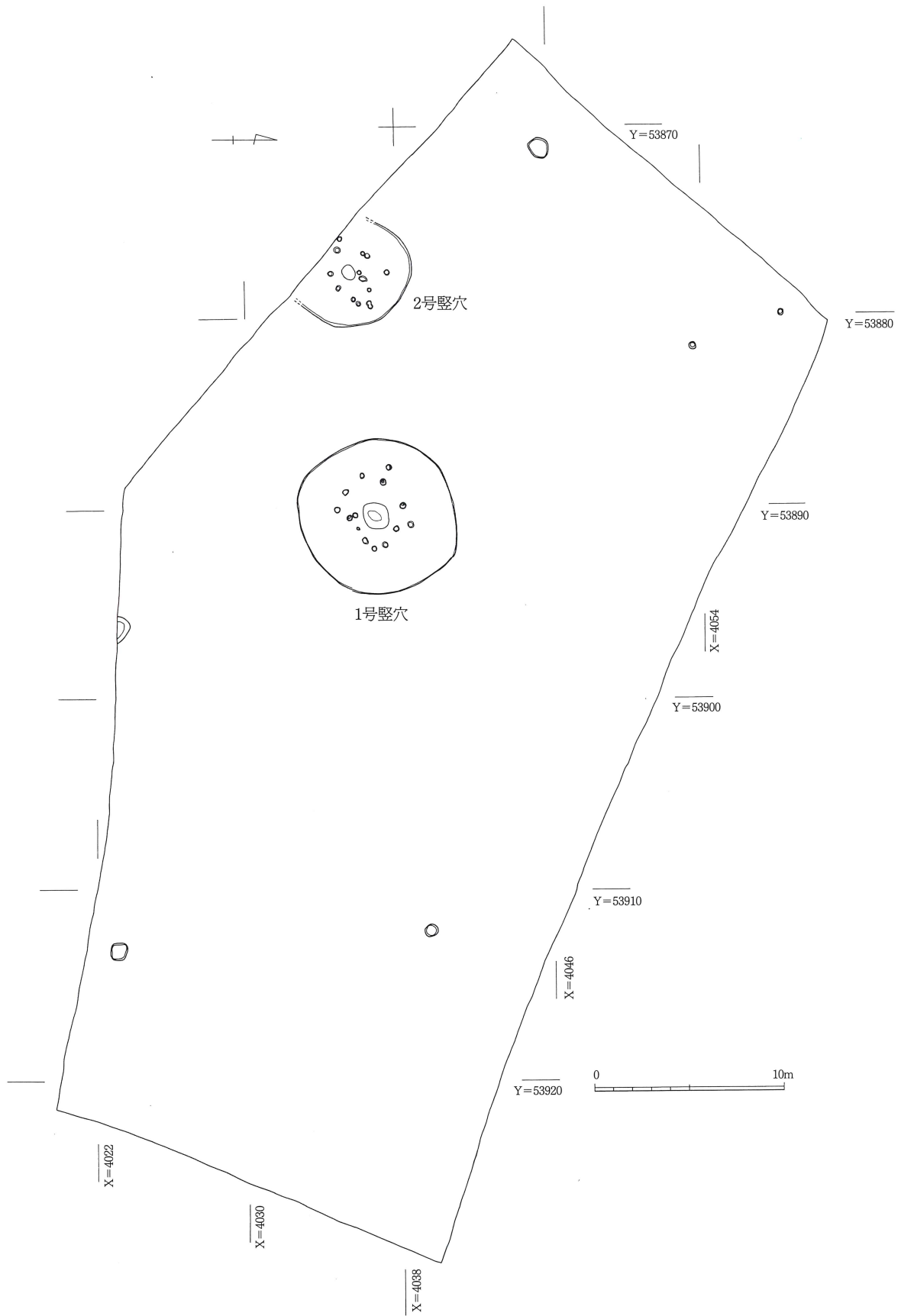
第9図は磨製石鏃及びその未製品である。図化できるものだけ示したが、このほかにも未製品は多い。4・5・14は結晶片岩、1・2・3・6・7・8・9・10・11・12・13・15・16は粘板岩であり、1:4の割合で粘板岩が多い。

2号竪穴（第10図）

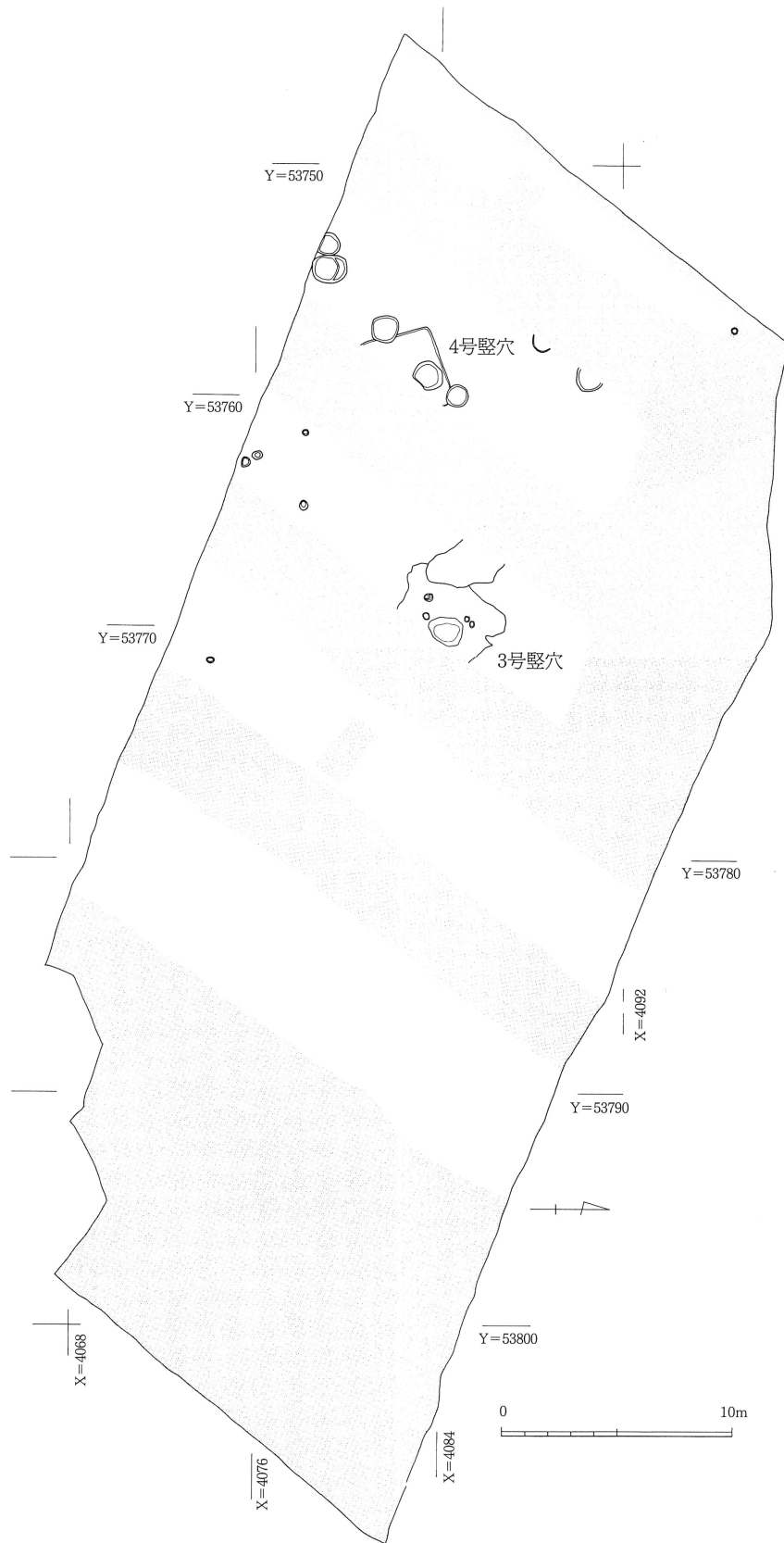
Ⅰ区の調査区の南西側において確認された円形竪穴住居であるが、南側部分は削平されて失われている。残存する深さは40cm程度であり、径6mを測る。中央に径0.6～0.8m、深さ10cm程度の浅い円形土坑がみられ炉跡であったものと考えられる。この円形土坑の北側に25×50cmの大きさを測る扁平な川原石がみられ台石として利用していたことがわかる。中央土坑の周囲にはそれを取り囲むように13基のピットが不規則にみられ、柱穴であったことが考えられる。中央土坑から周辺の径2.5mの範囲の床面は硬化しており、当時のヒトがこの範囲を生活の空間として利用していたことがわかる。出土遺物は少ないのは1号竪穴と共通するが、1号竪穴と比較して、磨製石鏃及びその未製品が少なく、この竪穴では磨製石鏃の製作は行われていなかったものと認識できよう。



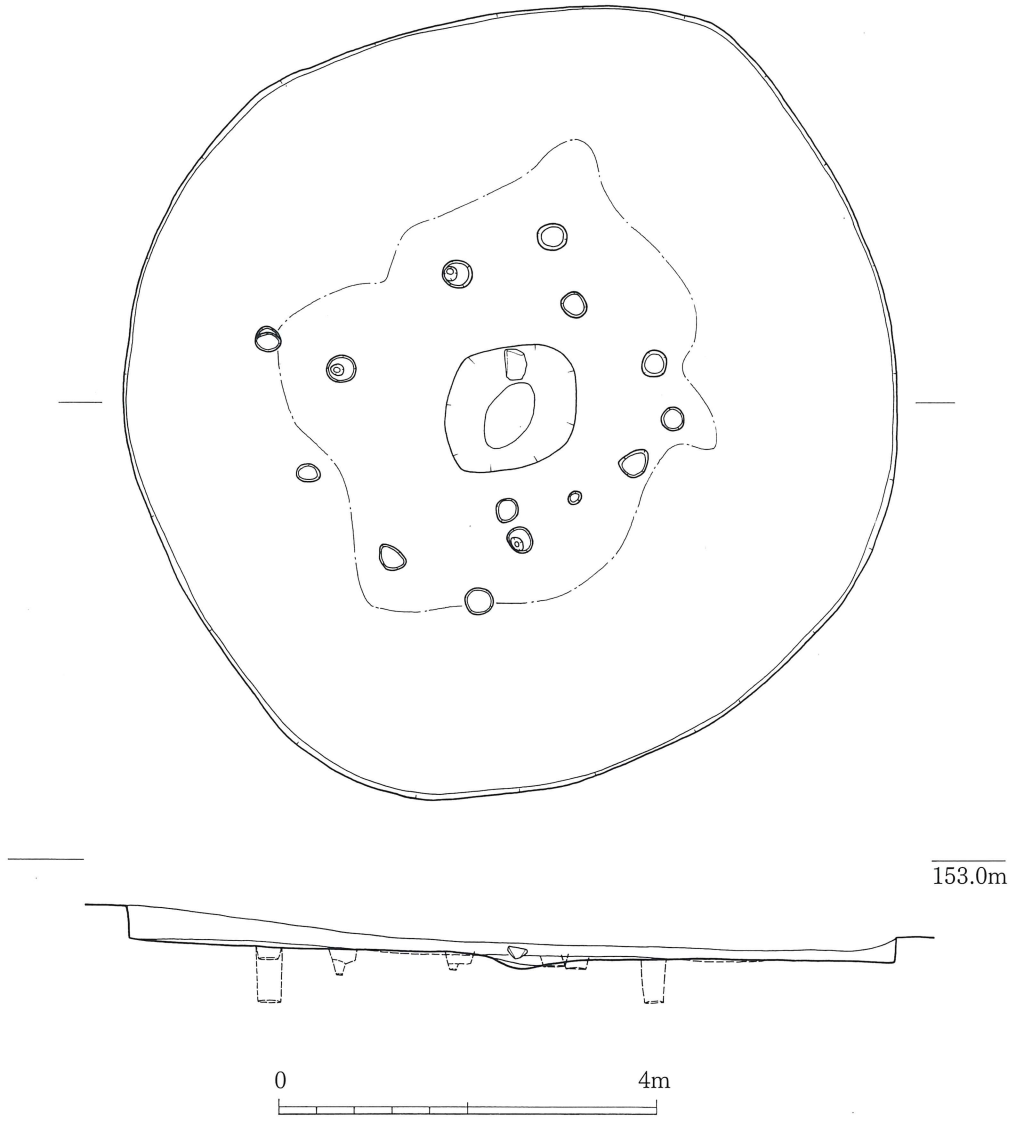
第3図 岡遺跡調査区位置図 (1/3,000)



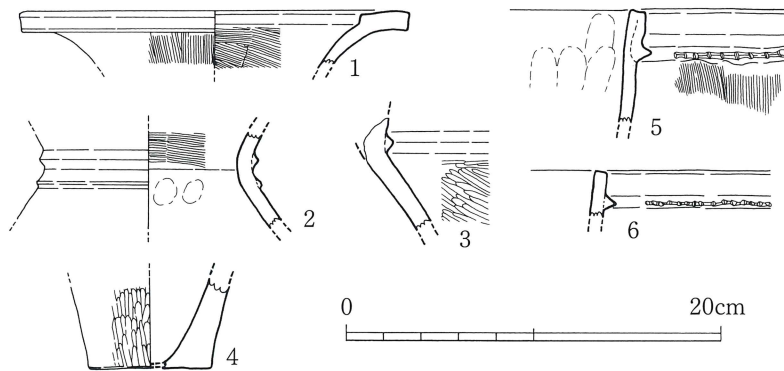
第4図 岡遺跡下ノ原地区I区遺構配置図 (1/300)



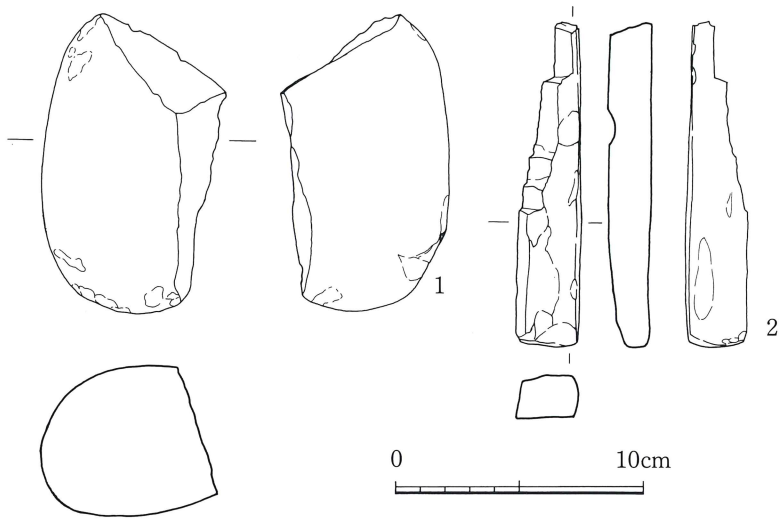
第5図 岡遺跡下ノ原地区Ⅲ区遺構配置図 (1/300)



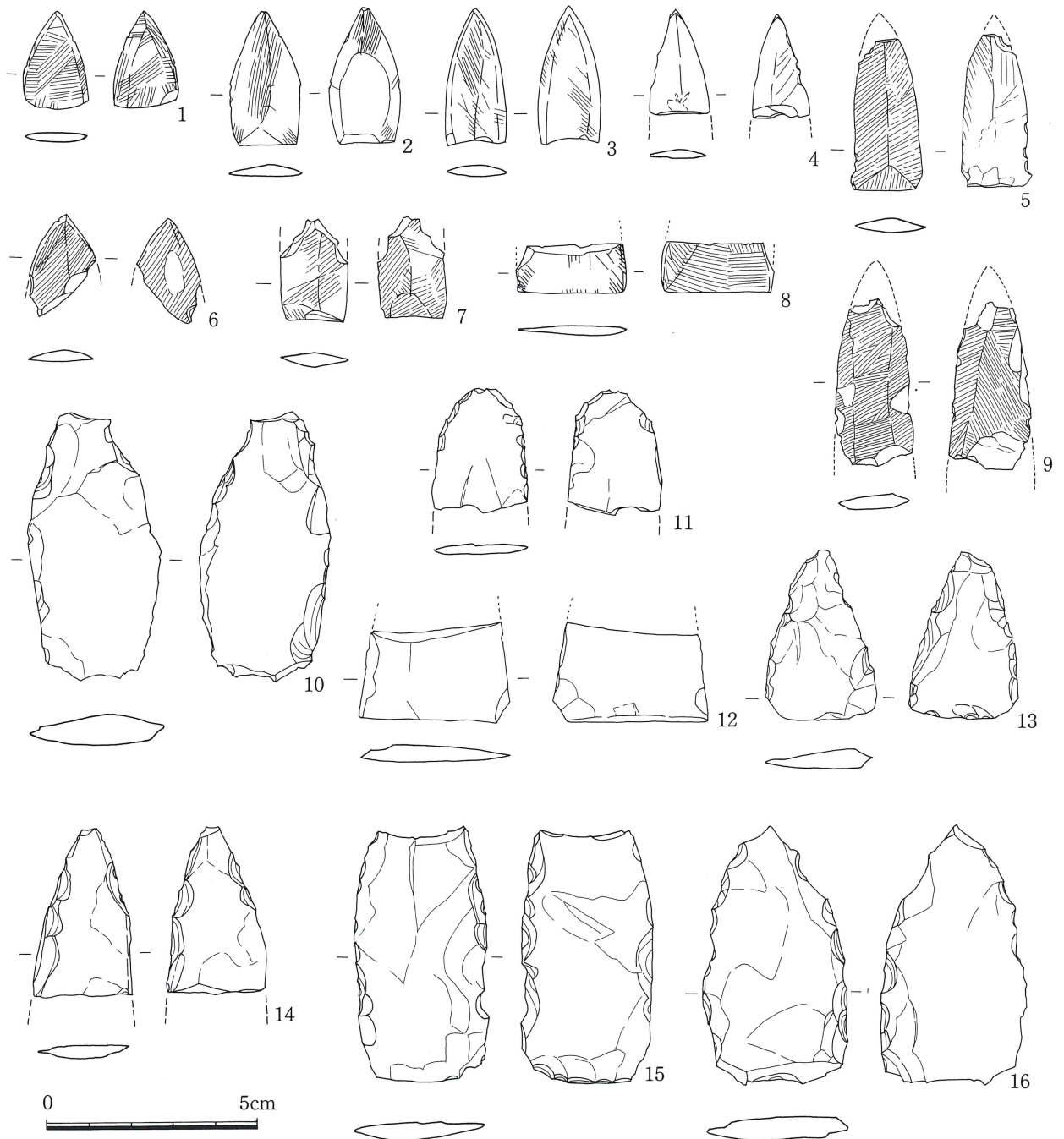
第6図 岡遺跡下ノ原地区1号竖穴実測図 (1/80)



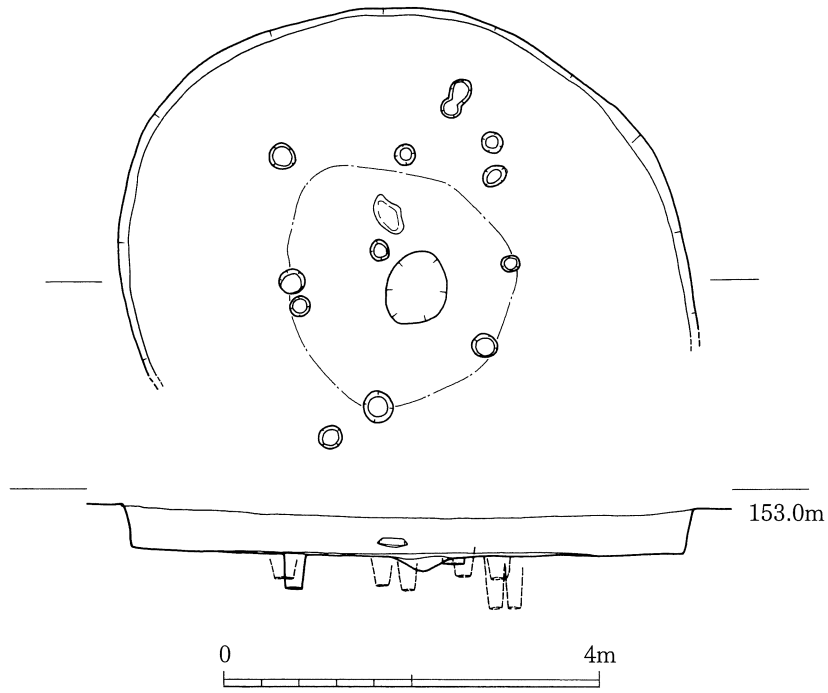
第7図 岡遺跡下ノ原地区1号竖穴出土遺物実測① (1/4)



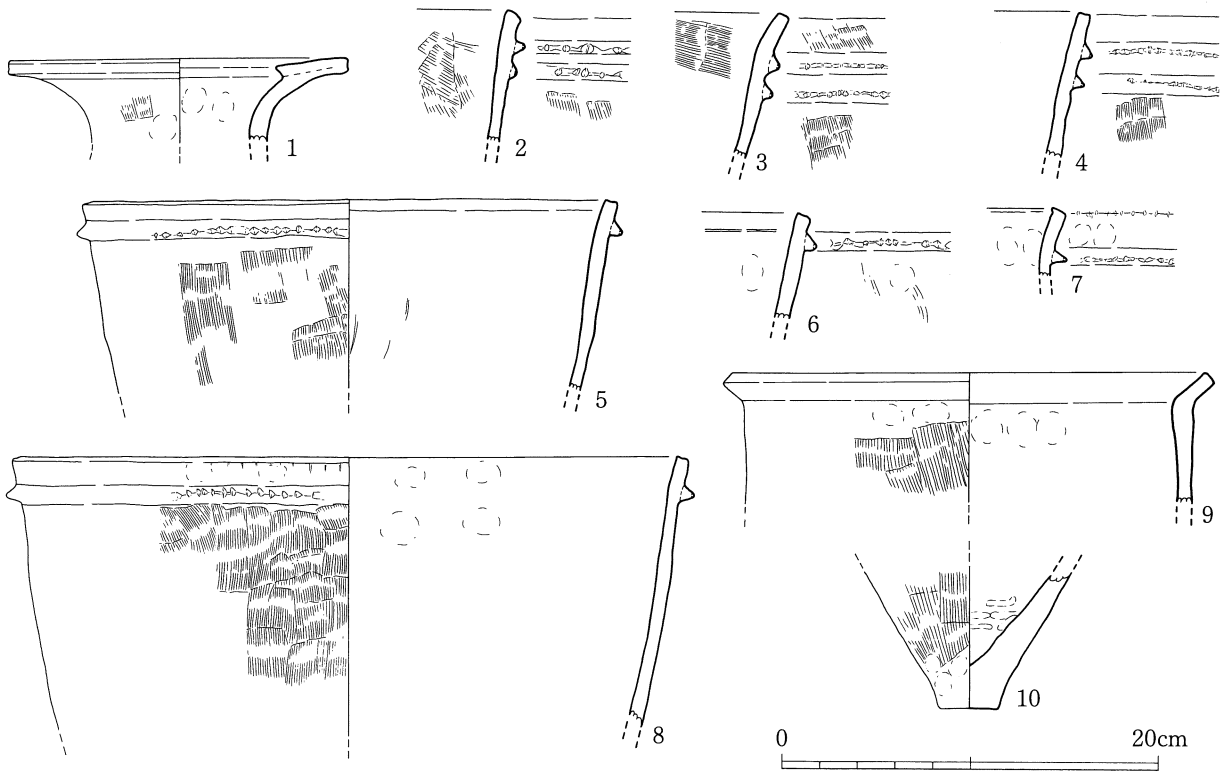
第8図 岡遺跡下ノ原地区1号竖穴出土遺物実測図② (1/3)



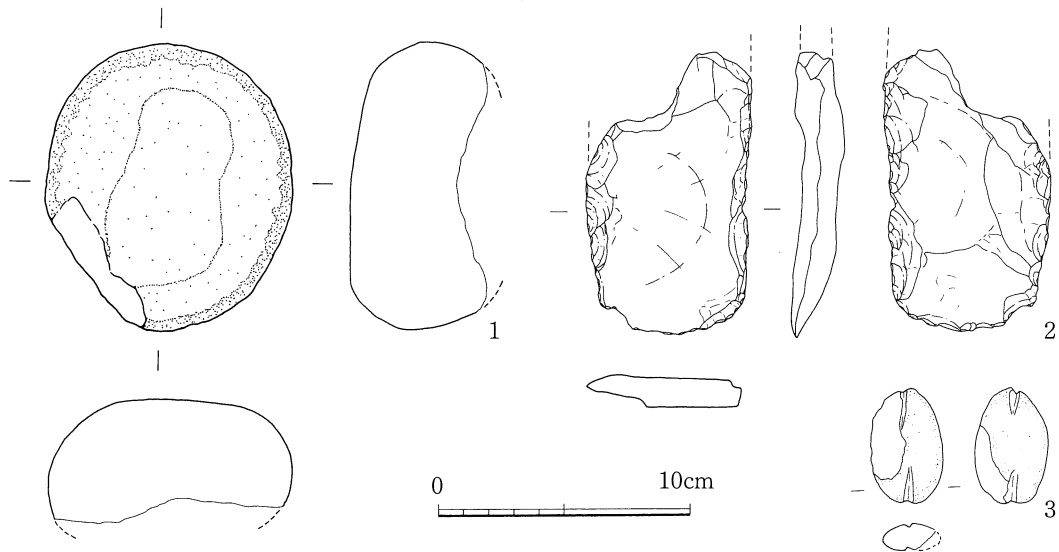
第9図 岡遺跡下ノ原地区1号竖穴出土遺物実測図③ (2/3)



第10図 岡遺跡下ノ原地区2号竪穴実測図 (1/80)



第11図 岡遺跡下ノ原地区2号竪穴出土遺物実測図① (1/4)

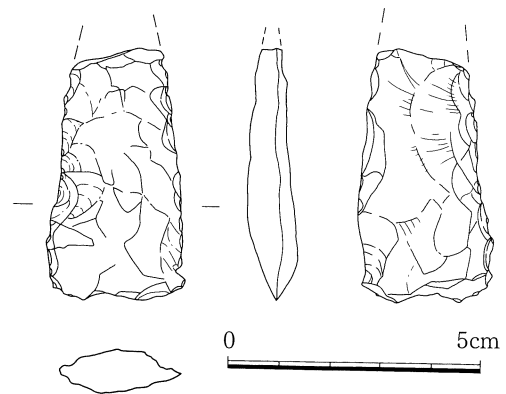


第12図 岡遺跡下ノ原地区2号竪穴出土遺物実測図② (1/3)

出土遺物は11～13図に示した。

第11図1は壺であり、鋤先口縁をもつ。2～10は甕である。2～8はやや広がりながら口縁にいたり、2～4は2条の、5～8は1条のキザミ目をもつ断面三角突帯を貼り付けている。7・8は口唇部の外角に細かなキザミ目が施されている。9は上方に延びる体部からくの字状に折れ曲がり口縁に至る器形をもつ。10は甕の底部であり、小さいながら平底をもつ。

第12図1はデイサイトを石材とした敲石である。2は変質安山岩を利用した扁平打製石器である。3は粘板岩製切目石錘である。第13図は粘板岩製の磨製石鏃の未製品であるが先端が折損している。

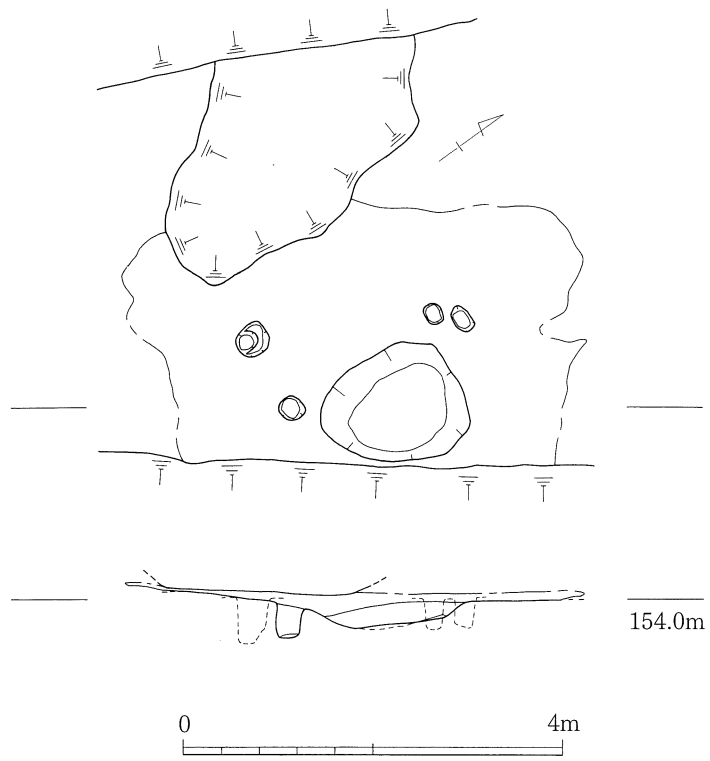


第13図 岡遺跡下ノ原地区2号竪穴
出土遺物実測図③ (2/3)

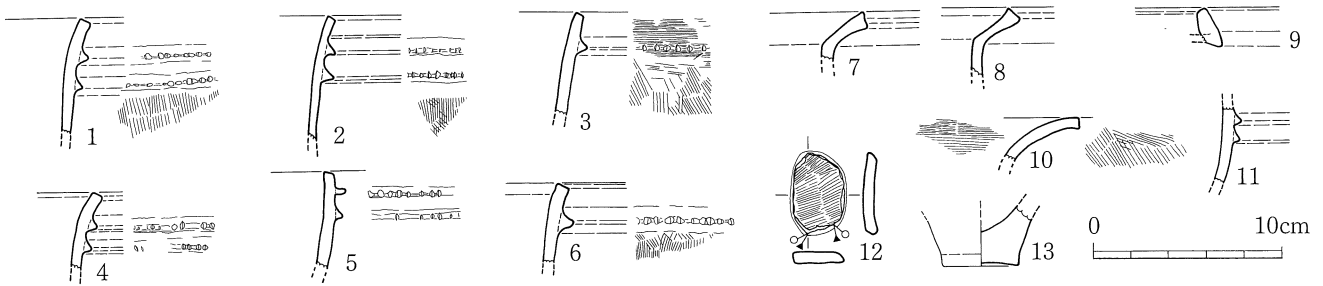
3号竪穴 (第14図)

Ⅲ区の調査区の南西側において確認された竪穴住居であるが、南東側部分は削平されて失われている。調査の過程で壁の立ち上がり確認できず、クロボク中から土器片が集中して出土していたのを、1点ずつ採り上げ、掘り下げたが、硬化した床面が確認できたため、住居跡であると判断した。硬化面の広がり4m以上あり、中央に径1.6～1.2m、深さ25cm程度の浅い楕円形土坑がみられ、炉跡であったものと考えられる。この円形土坑の周囲には、それを取り囲むように4基のピットが不規則にみられ、柱穴であったことが考えられる。中央土坑から周辺の径1.0～2.5mの範囲の床面は硬化しており、当時のヒトがこの範囲を生活の空間として利用していたことがわかる。出土遺物が少ないのは1・2号竪穴と共通するが、1号竪穴と比較して、磨製石鏃及びその未製品が少なく、この竪穴では磨製石鏃の製作は行われていなかったものと認識できよう。

出土遺物は第15図に示した。第15図1～6はは甕であり、やや外反しながら上方にのびる口縁とやや内反しながら上方にのびる口縁の端部を平らに仕上げ、外面にキザミ目をもつ断面三角突帯を貼り付けている。突帯は1条のものと2条のものに分けられる。7・8も甕であるが、強いヨコナデにより、くの字状に外反する口縁をもち口縁端部を上方に突出させている。10は広口壺の口縁であろう。9は複合口縁壺の口縁端部の破片であろう。11は精製の壺の破片であり、胴部最大径付近に2条の三角突帯を巡らせている。本資料には赤色顔料を塗布している。12は半月形の土器片加工品である。



第14図 岡遺跡下ノ原地区3号竖穴実測図 (1/80)



第15図 岡遺跡下ノ原地区3号竖穴出土遺物実測図 (1/4)

包含層出土遺物

包含層から出土した遺物は第16～22図に示した。第16～19図は縄文土器であり、第20図は弥生土器である。

第16図1～6は縄文時代早期の無文・条痕文土器である。1には口縁付近に幅のない突帯がつけられている。2には口縁付近に穿孔が認められる。2・3・5には条痕が確認できる。7・8は西和田式土器であり、7の口唇部には太いきざみ目がみられ、7・8とも口縁付近に幅広凹線の文様が施されている。11・12は中津式土器深鉢であり、口唇部を大きな波状にしている。9の口唇部には太いきざみ目がみられ、その下に「く」の字状の細かいきざみ目と大きな列点文が施されている。10は福田K II式土器である。口唇部を内面に肥厚させ、外面には磨消縄文がみられる。

第17図はいずれも内外面に研磨が施されている縄文土器である。器壁は薄く、頸部は外傾して長く延び、11・13・16～19は大きく波状の口縁をもつ。4は球状の体部をもつ。1・2・4・7・9・10のように口唇部内面を肥厚させ、面をもつ口唇端部に細い沈線を施すものや、11・13～17のように「く」の字状に口縁を内湾させるものがみられる。また、3・5・6のように外反しながら延びる頸部に直立する口縁部をつけ、6のように、その外面に沈線および縄文を施すものもみられる。このほかにも、8・12のように口縁端部外面に断面三角形の粘土を貼り付け、その上方に沈線を施すものもみられる。施文は4・16・19のように胴部上半に細かな沈線および縄文を施している。

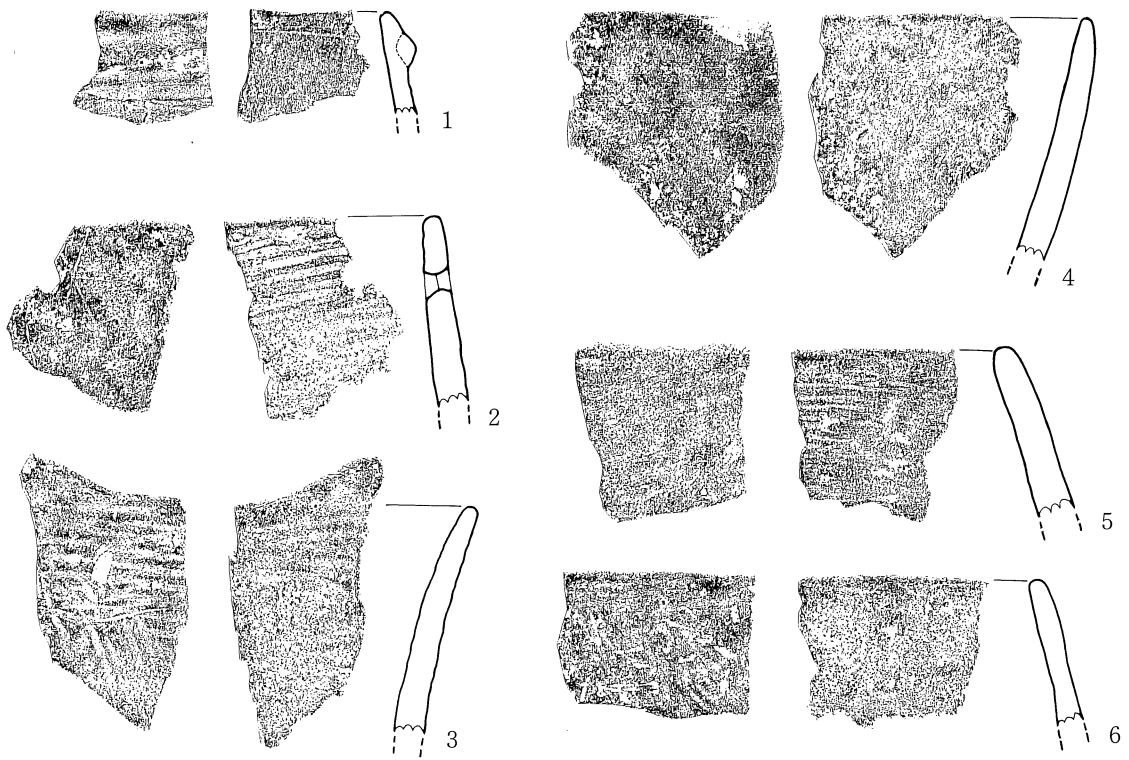
第18図もいずれの内外面に研磨が施されている。器壁は薄く、頸部は外傾して長く延び、1～5は大きく波状の口縁をもつ。1～4は「く」の字状に口縁を内湾させ、口縁外面に細かな沈線および縄文を施している。11には頸部に小さな円孔がみられる。

第19図1～7は鉢の胴部片であり、頸部との屈曲部から胴部上半に細かな沈線および縄文の施文が施されている。8～21は縄文土器底部片である。22・23は中津式土器であり、いずれも内傾して丸く仕上げる口縁をもち内外面に丁寧な研磨が施されている。外面には磨消縄文がみられ、一部に赤色顔料が残る。24・25は縄文時代晩期の鉢であり、口縁外面に突帯が付く。

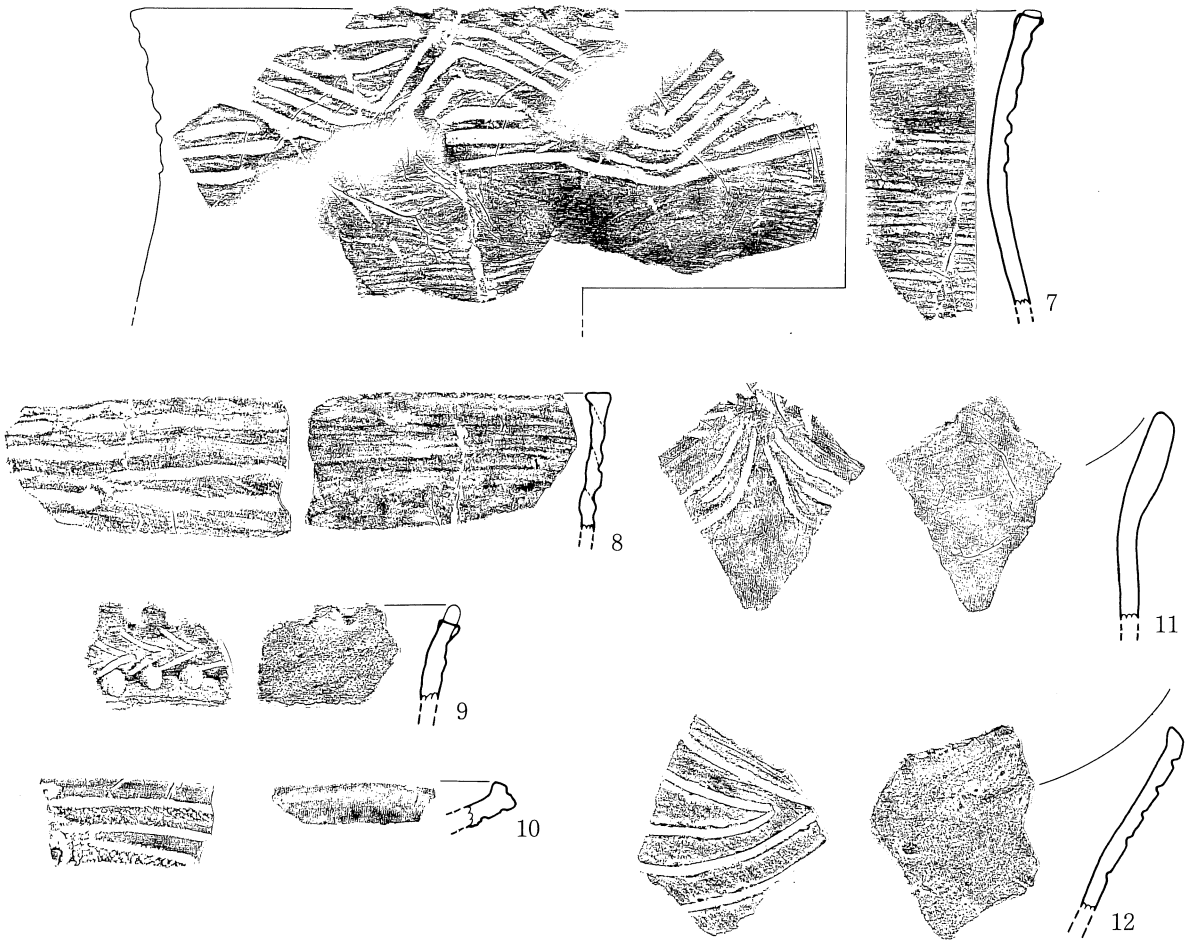
第20図1～7は甕片であり、1・3・5・6のように口縁が外反するものと、2・4・7のように直立あるいはやや内湾するものがみられる。口縁の突帯もきざみ目がみられる2条のものと1条のものがみられる。6には口唇部外面にも突帯と同様なきざみ目が施されている。8は口縁が「く」の字状に外反する甕であり、口唇部は上方に突出させている。9は壺の胴部片であり、胴部最大径よりやや上方に3条の断面三角形の突帯が付く。10・11・13～21は弥生土器壺甕類の底部片である。12は高坏脚部である。

第21図1は径7.8cmを測る小型仿製鏡である。紐の周辺の圏線と浮き彫りの内行花文との間の文様は不鮮明であり、内行花文の外側には圏線を界してナナメ櫛歯文がみられる。同様の文様は福岡県福岡市飯氏馬場遺跡出土鏡に確認できる（柳田康雄編『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第2集』福岡県教育委員会 1971年）。2は玦状耳飾の破片であり、厚さ4mm、復元径3.4cmを測る。表面には細かい研磨痕が多く認められ、淡灰緑色を呈する軟質の緑色変質岩を石材として利用している。

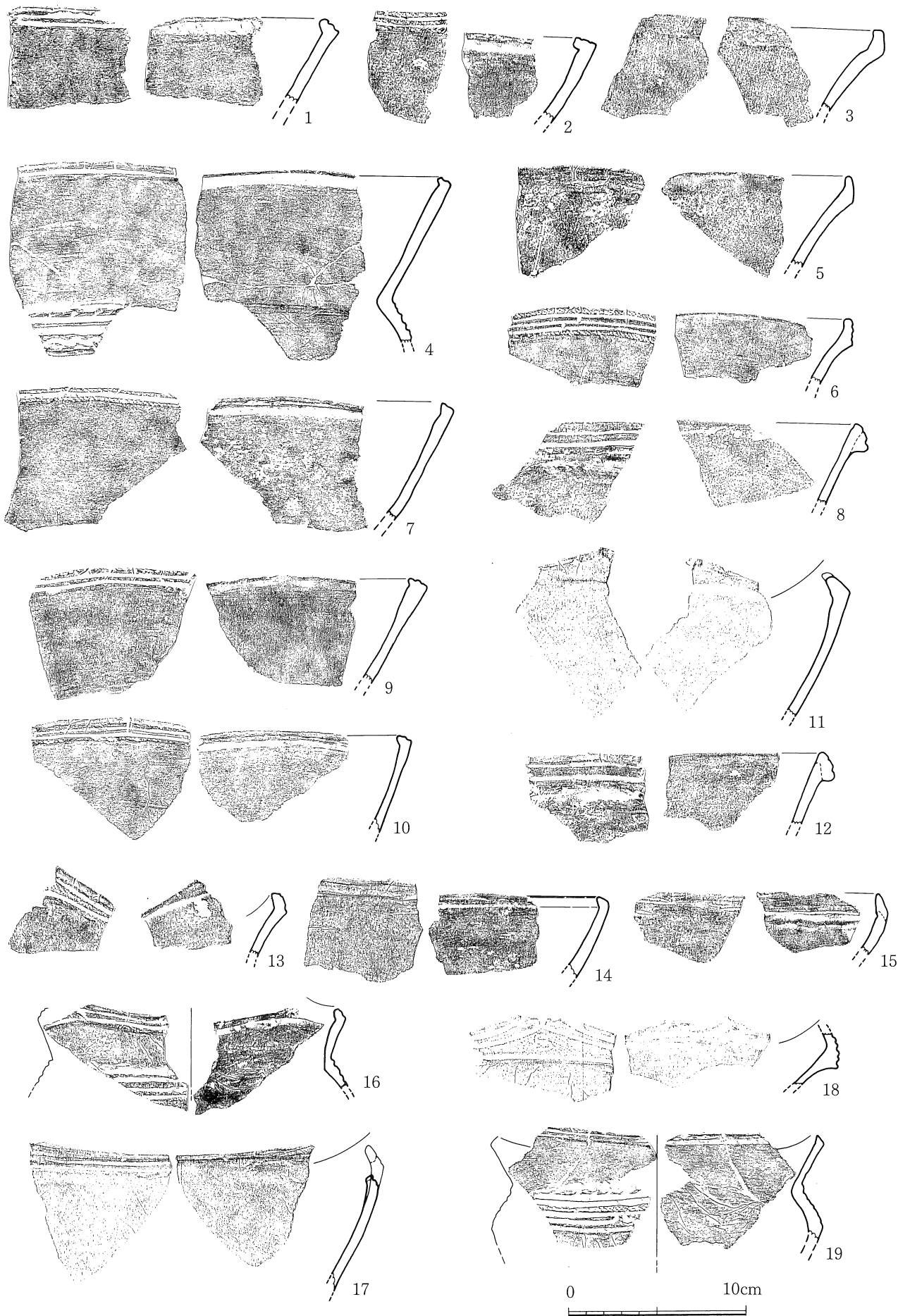
第22図は石器である。1～13は石鏃であり、1・3・5・6・7・8は姫島産黒曜石、2・4・9・10は金山産サヌカイト、11・12はチャートである。13・22は粘板岩製磨製石鏃未製品、14は珪質頁岩製三稜尖頭器、15は姫島産黒曜石製ドリル、16・17はチャート製尖頭石器、18は金山産サヌカイト製石錐、19はチャート製剥片、20は姫島産黒曜石製石鏃未製品、21はチャート製彫器、23は珪質頁岩製縦長剥片、24は安山岩製礫器である。



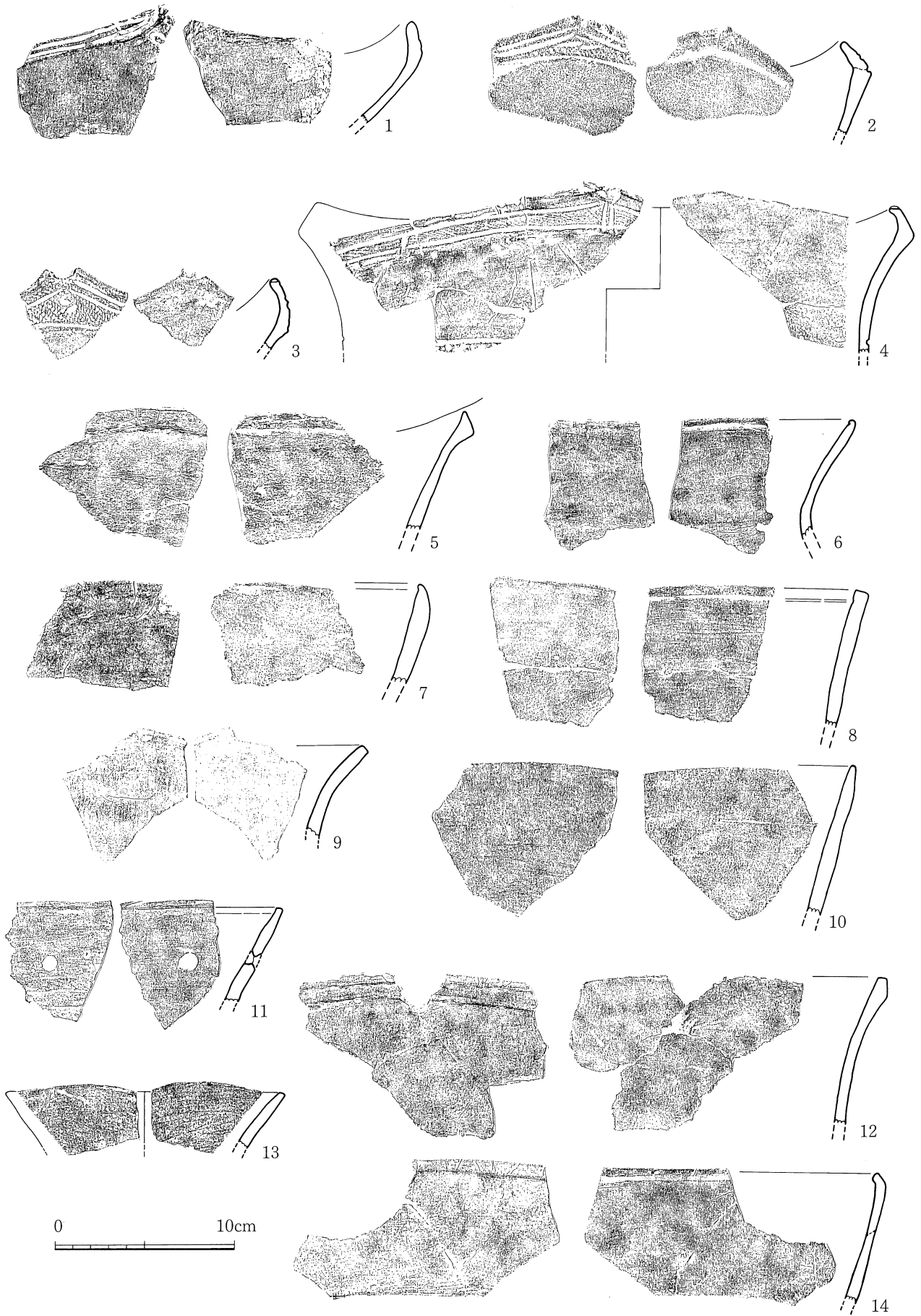
0 10cm



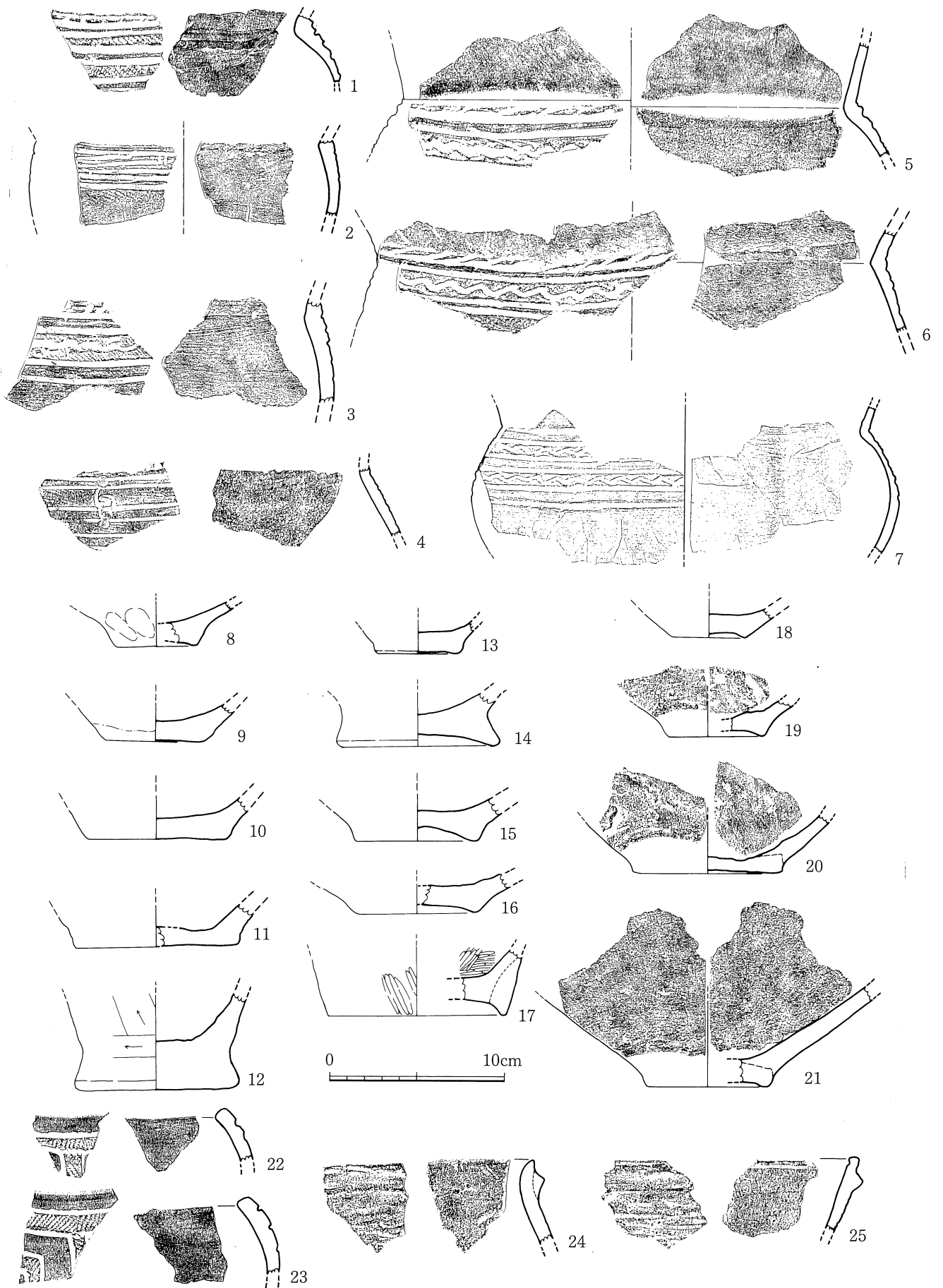
第16図 岡遺跡下ノ原地区出土遺物実測図① (1/3)



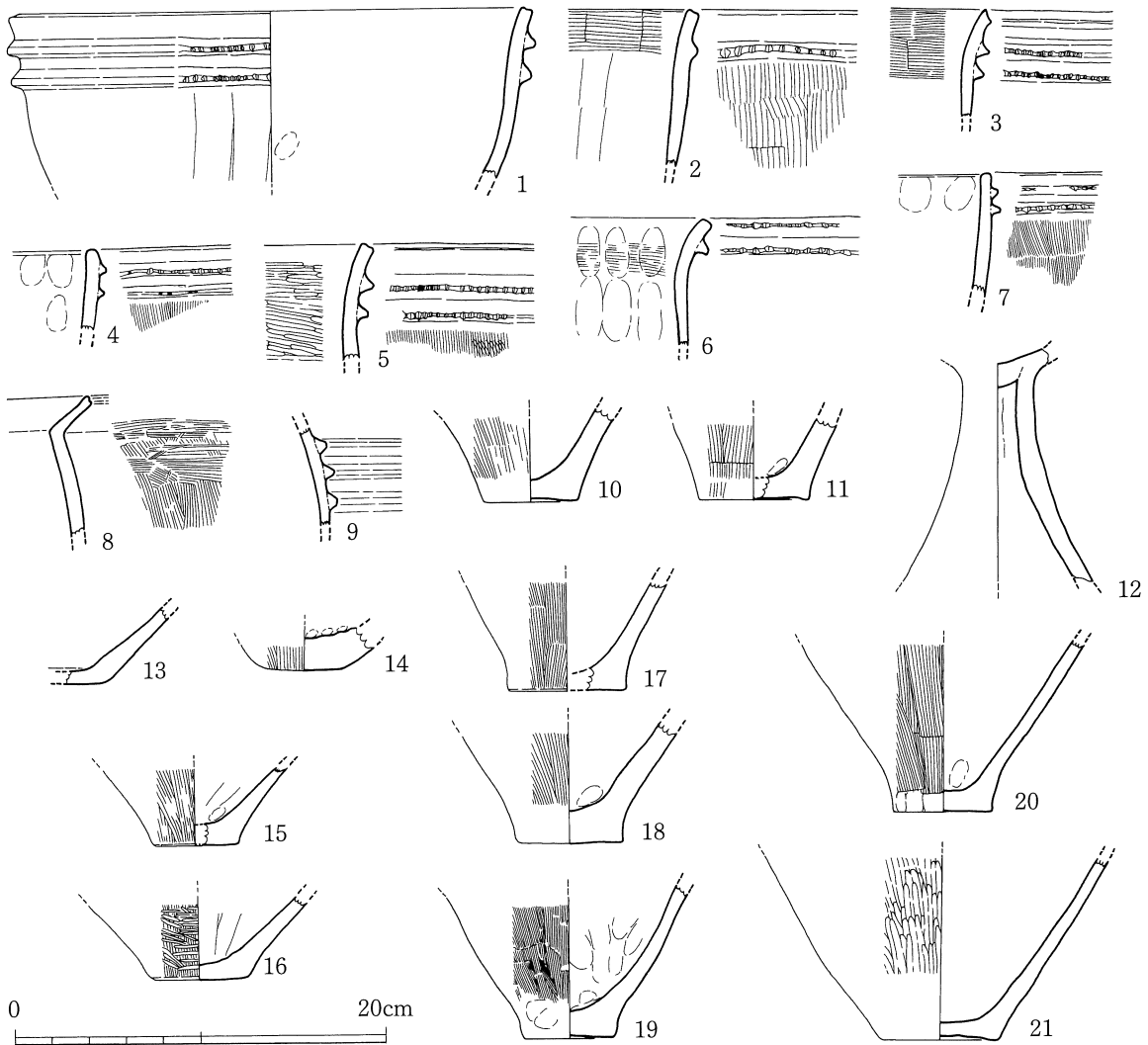
第17図 岡遺跡下ノ原地区出土遺物実測図② (1/3)



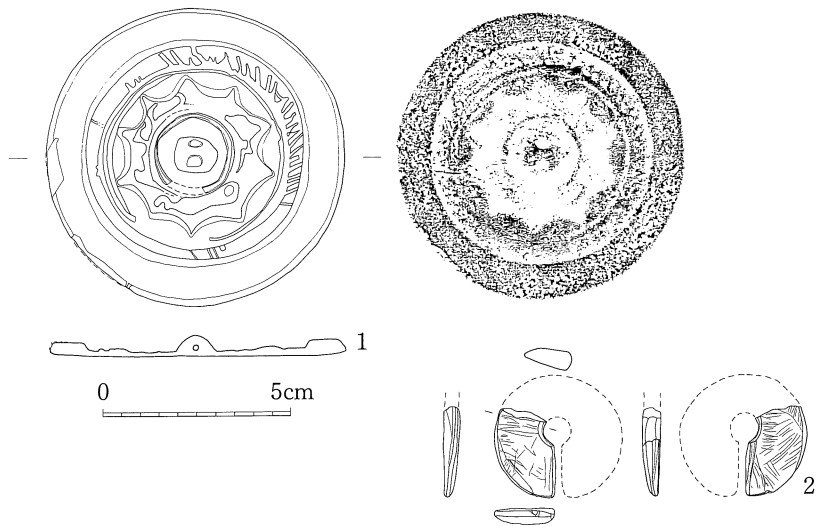
第18図 岡遺跡下ノ原地区出土遺物実測図③ (1/3)



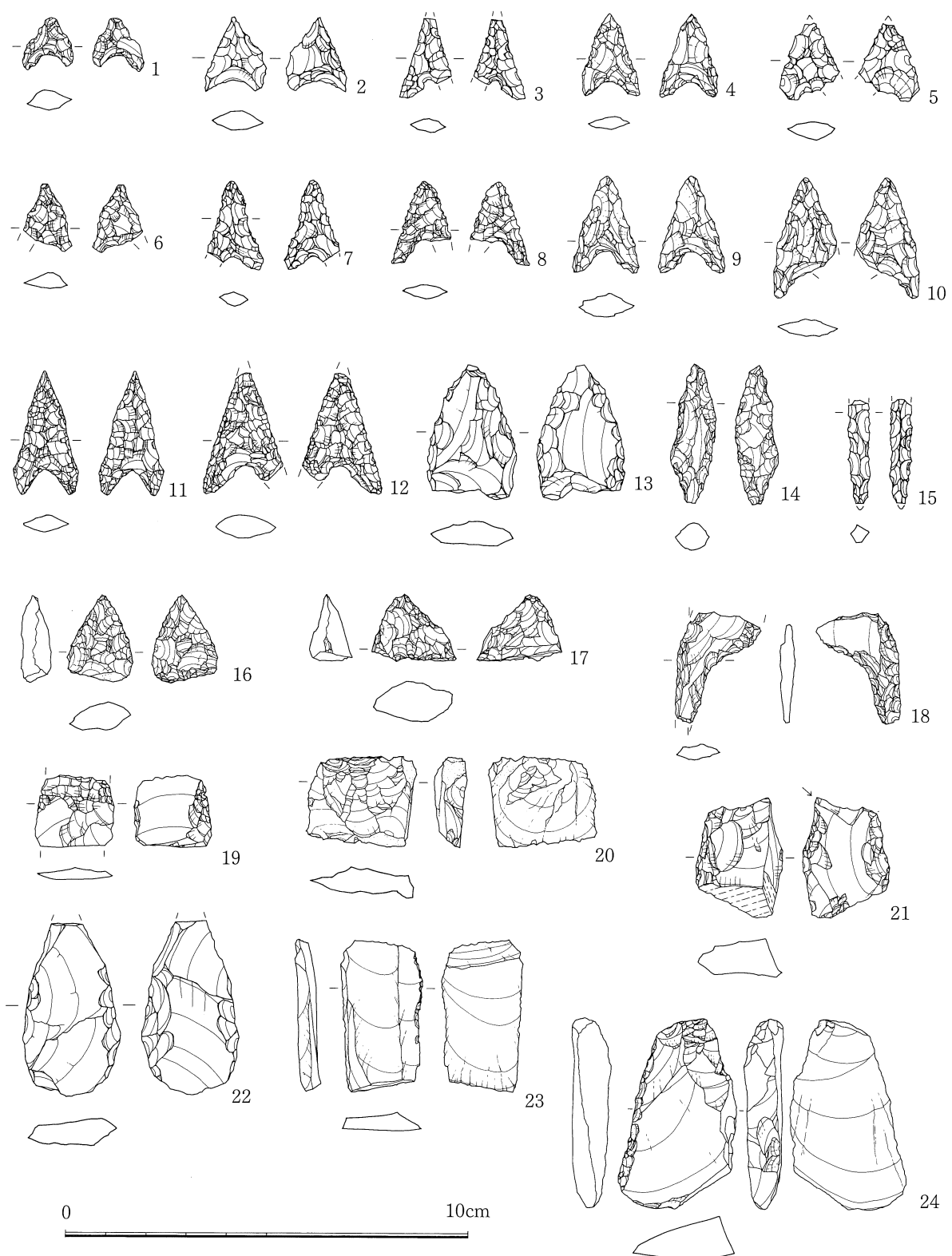
第19図 岡遺跡下ノ原地区出土遺物実測図④ (1/3)



第20図 岡遺跡下ノ原地区出土遺物実測図⑤ (1/4)



第21図 岡遺跡下ノ原地区出土遺物実測図⑥ (1/2)



第22図 岡遺跡下ノ原地区出土遺物実測図⑦ (2/3)

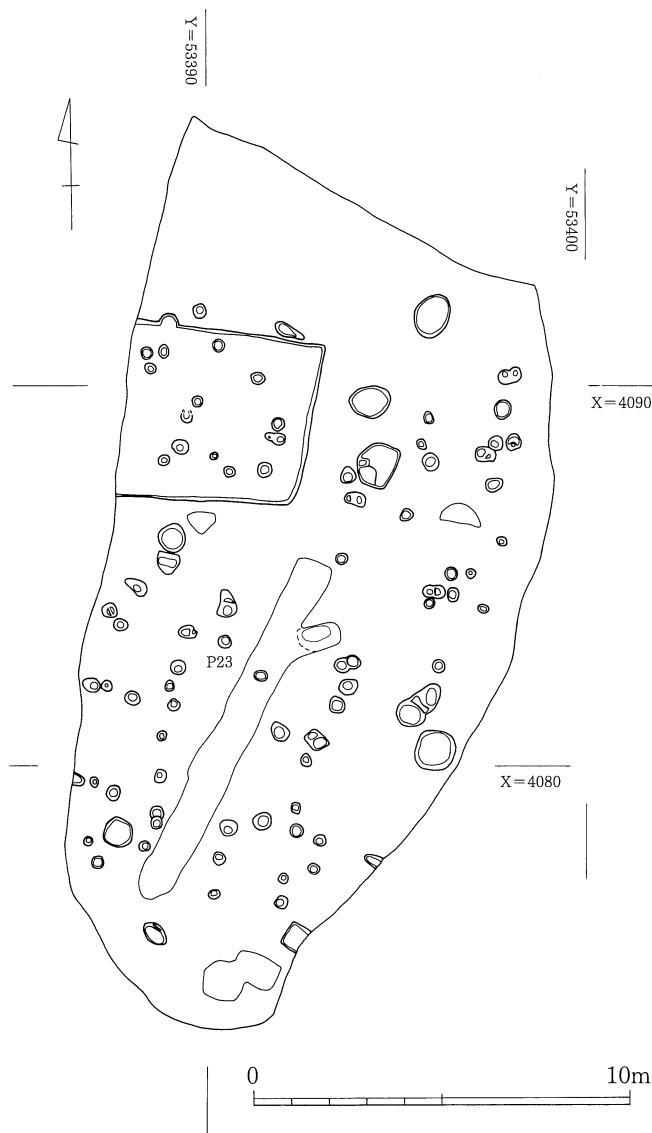
第3節 神ノ木地区

神ノ木地区は、台地上の最高所に広がる岡集落の縁辺にあたる。比較的多くの遺構が確認でき、方形竪穴住居1基をはじめとして、土坑やピットが多数検出できた。出土遺物は縄文土器がほとんどであり、中には14世紀や弥生時代中期～後期の土器がみられるため、これにあたる遺構も存在することがわかる。縄文土器や弥生土器は下ノ原地区から出土するものと時期を同じくするため、同時期の遺構が広い範囲に及んでいたことがうかがえるが、14世紀の遺物は神ノ木地区のみから出土しており、現在の岡集落が14世紀以降に形成された可能性が高いことがうかがえる。

1号竪穴（第24図）

調査区の北西側において確認された方形竪穴住居である。残存する深さは50cm程度であり、遺構の西側部分が調査区外に延びており、南北4.5m、東西5.0m以上の方形竪穴住居であることがわかる。床面上には柱穴と考えられるピットが9基確認できているが、特に、規則性は読み取れない。なお、床面に焼土のまとまりがみられる箇所が3箇所確認できている。

埋土中から大量の縄文土器が出土しており、図化できるものを第25～31図に示した。なお、縄文土器の報告は「第4節 まとめ 1) 神ノ木地区1号竪穴出土縄文土器の検討」にかえたい。



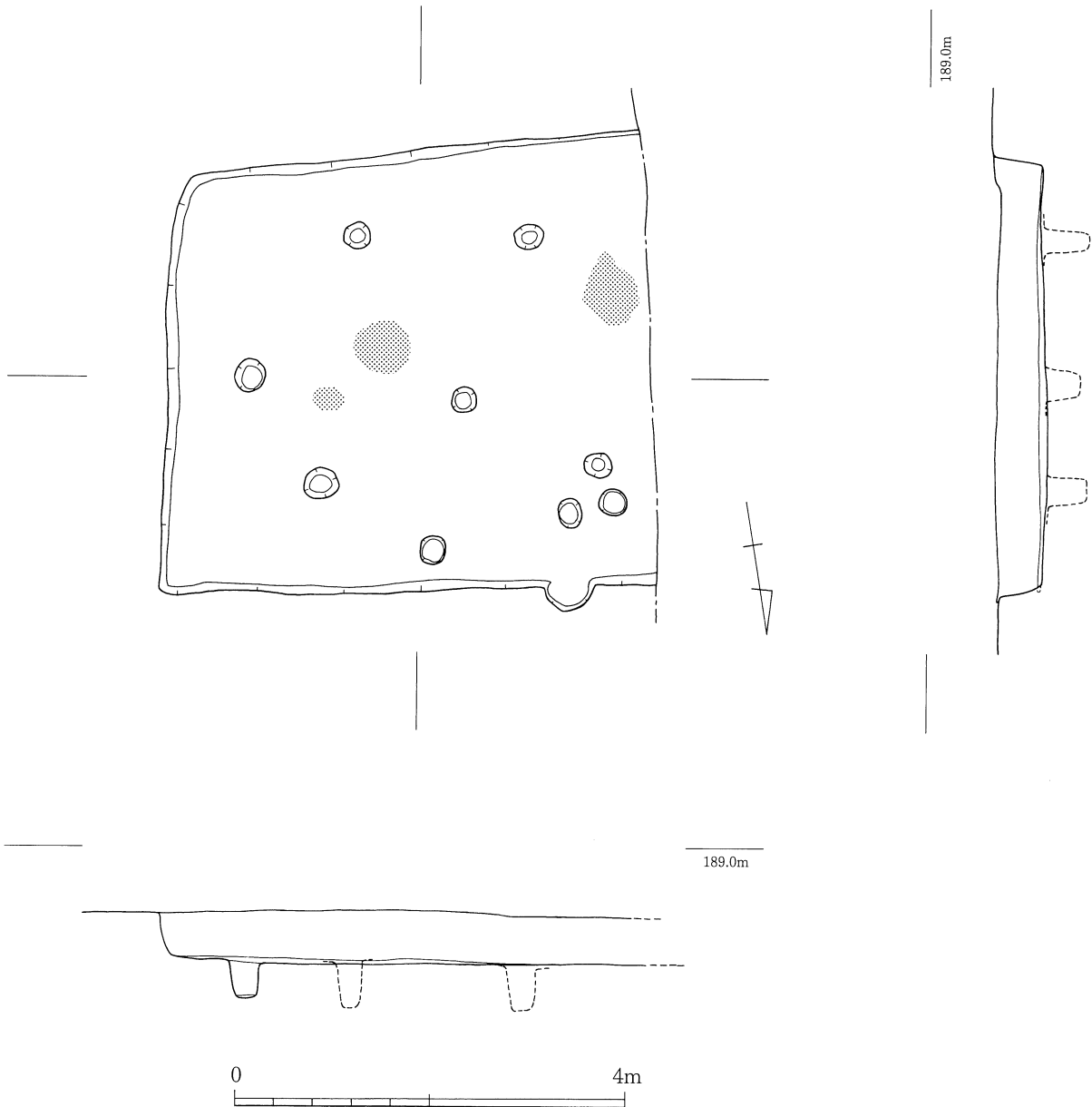
第23図 岡遺跡神ノ木地区遺構配置図 (1/200)

第32図は扁平打製石器である。1・4・5は結晶片岩製、2は凝灰岩製、3は安山岩製である。

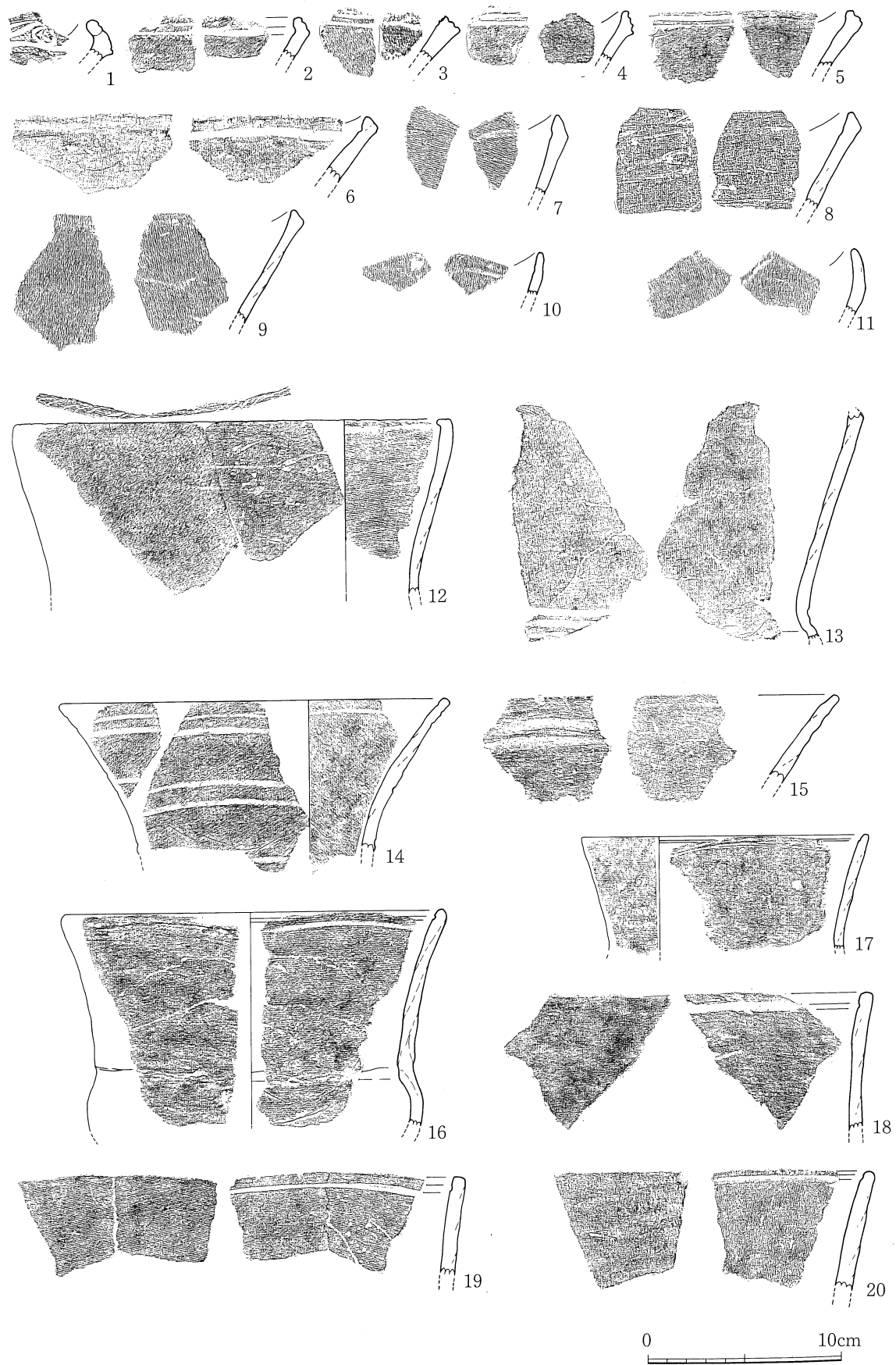
ピット (第23図)

調査区全域において数多くのピットが検出されている。そのほとんどは、時期が明らかでなく、また、建物としての並びが確認できたものもない。出土遺物から縄文時代後期～近世に至るあらゆる時代のピットが混在するものであろうが、中には、出土遺物からその遺構の上限の時期がわかるものもみられる。

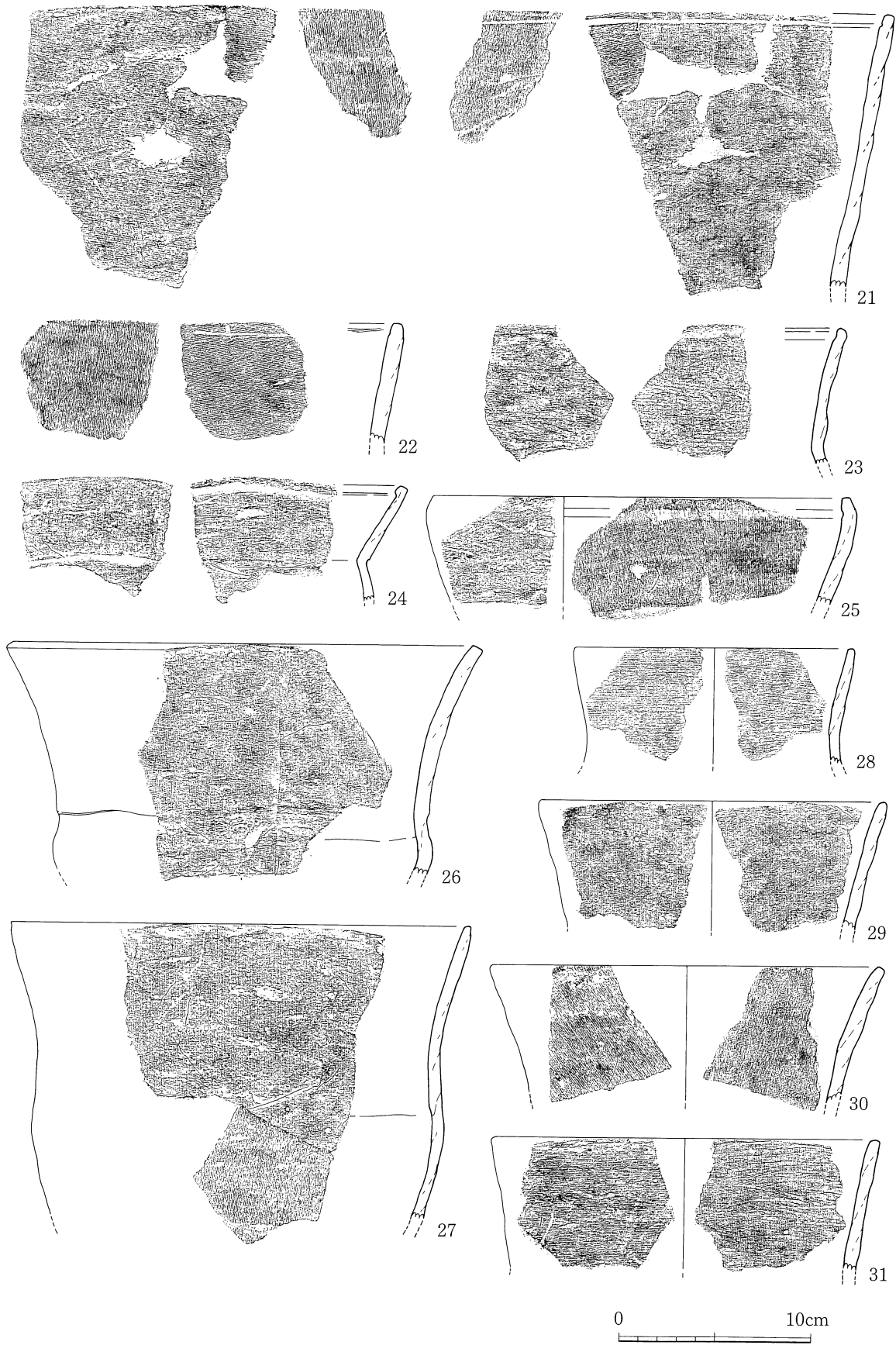
第33図6・7は23号ピットより出土した青磁片である。6は龍泉窯系青磁碗であり、外面に鎬蓮弁文がみえる。7は龍泉窯系青磁碗の底部片であり、高台および高台内は露胎のままである。高台に沿って円盤状に整形している再加工品である。



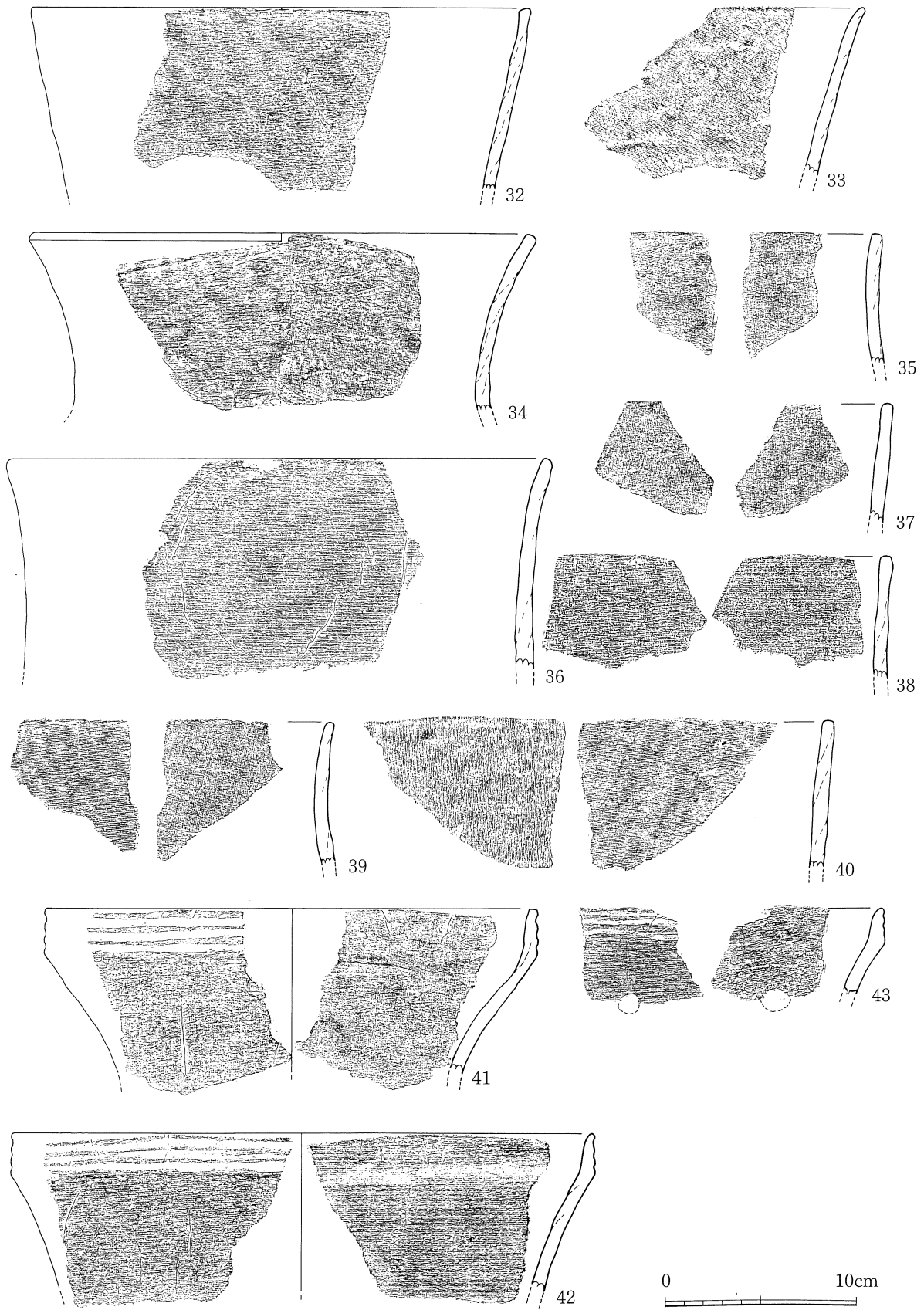
第24図 岡遺跡神ノ木地区1号竪穴実測図 (1/80)



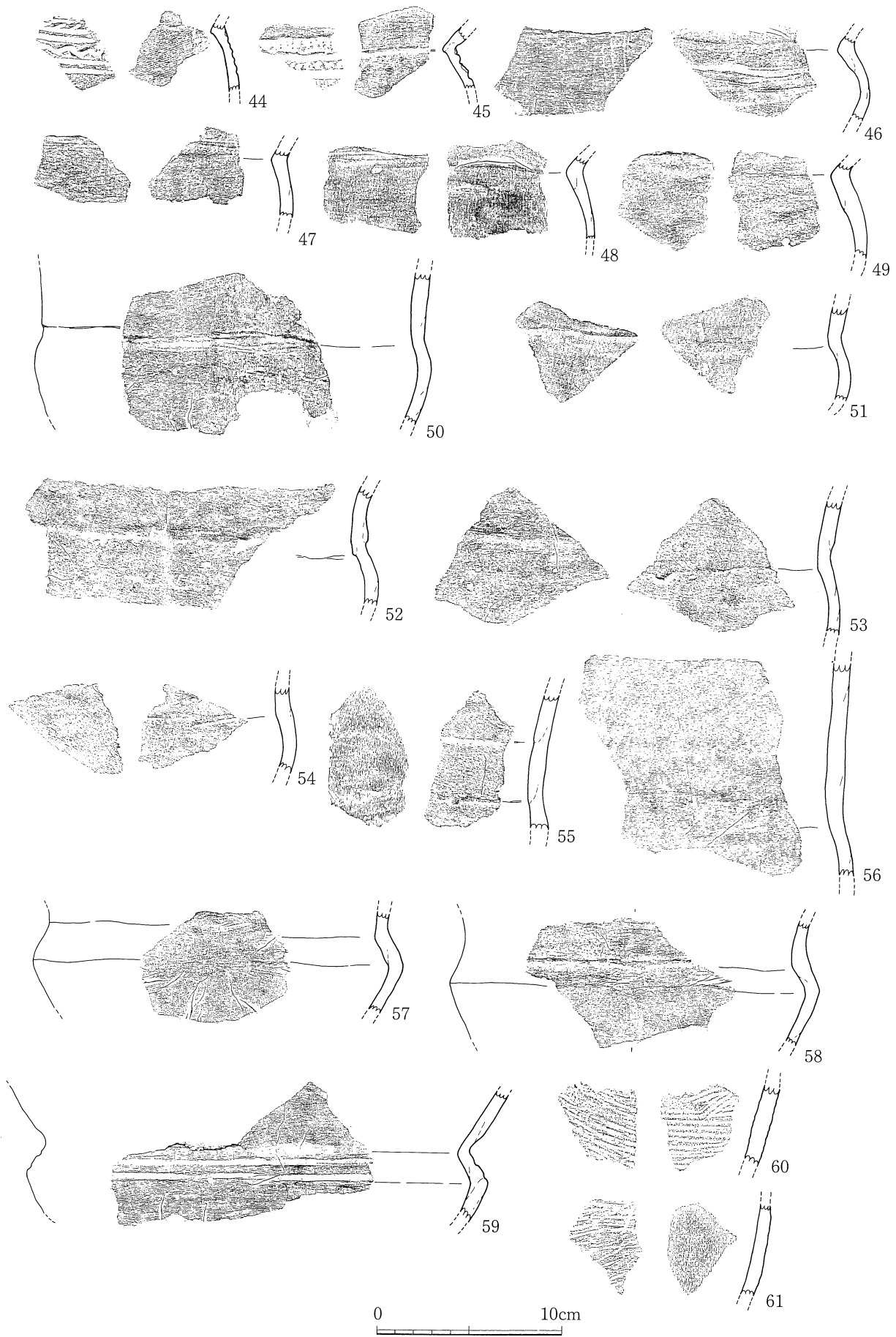
第25図 岡遺跡神ノ木地区1号竪穴出土遺物実測図① (1/3)



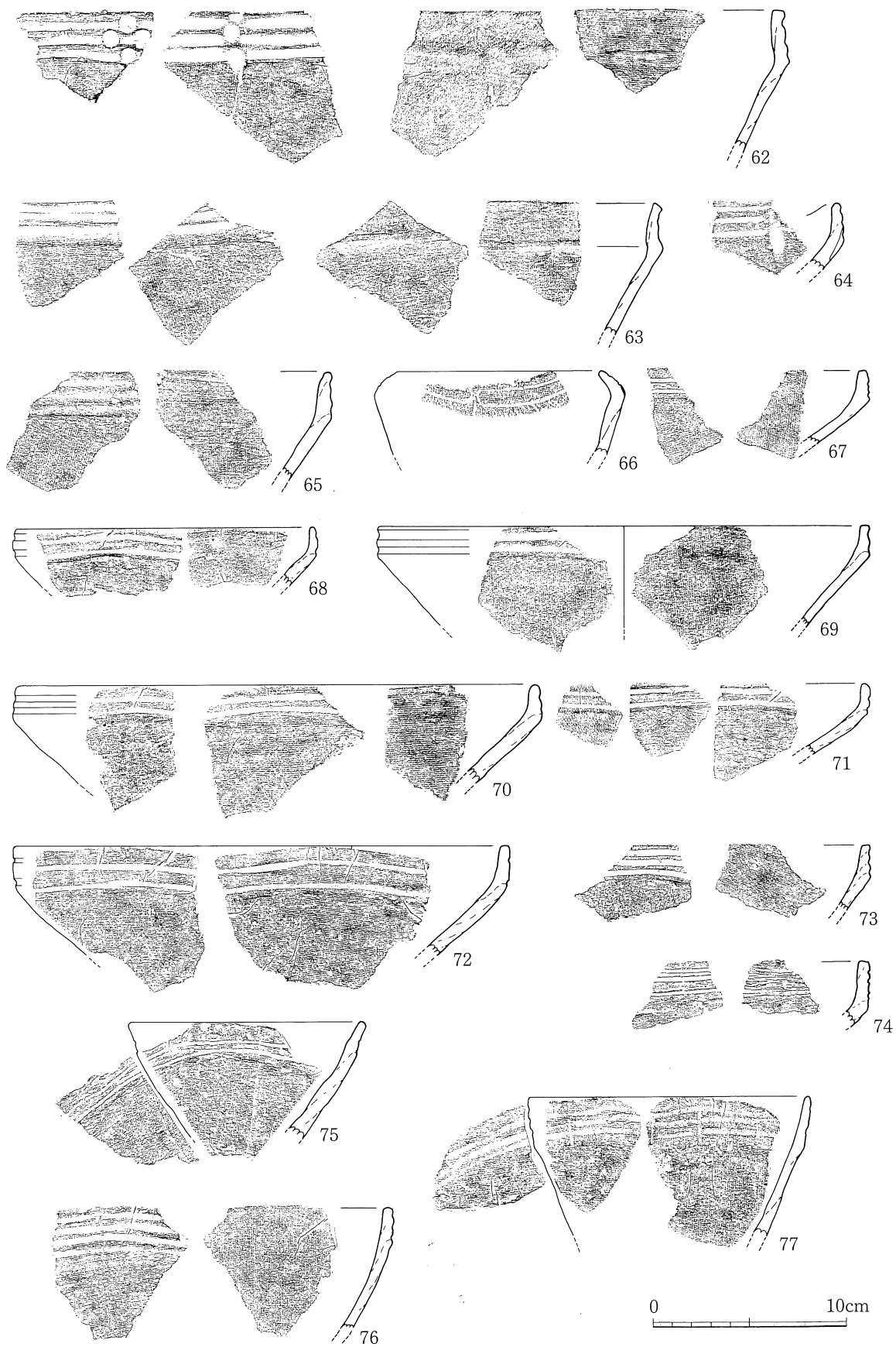
第26図 岡遺跡神ノ木地区1号竪穴出土遺物実測図② (1/3)



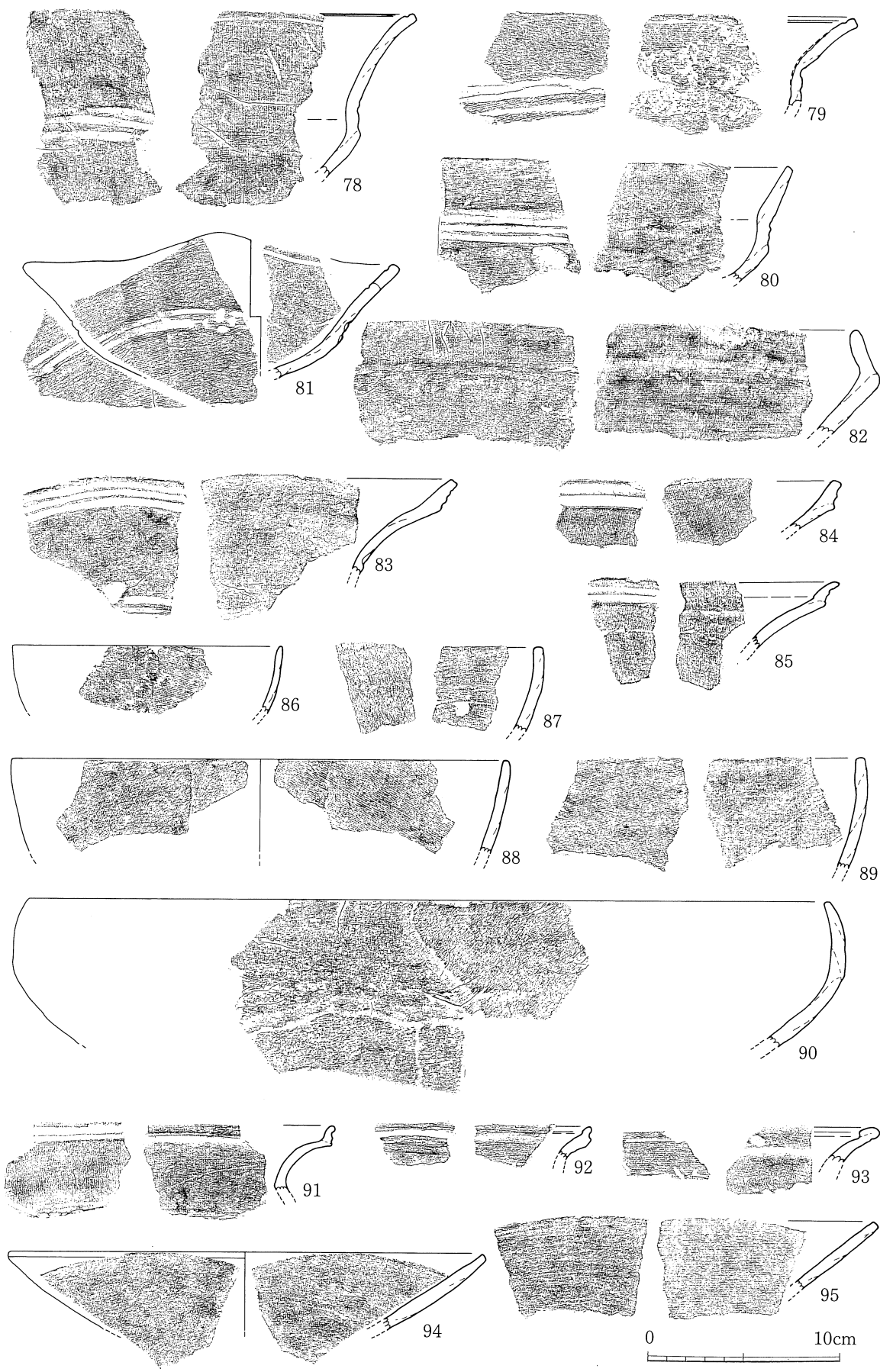
第27図 岡遺跡神ノ木地区1号竪穴出土遺物実測図③ (1/3)



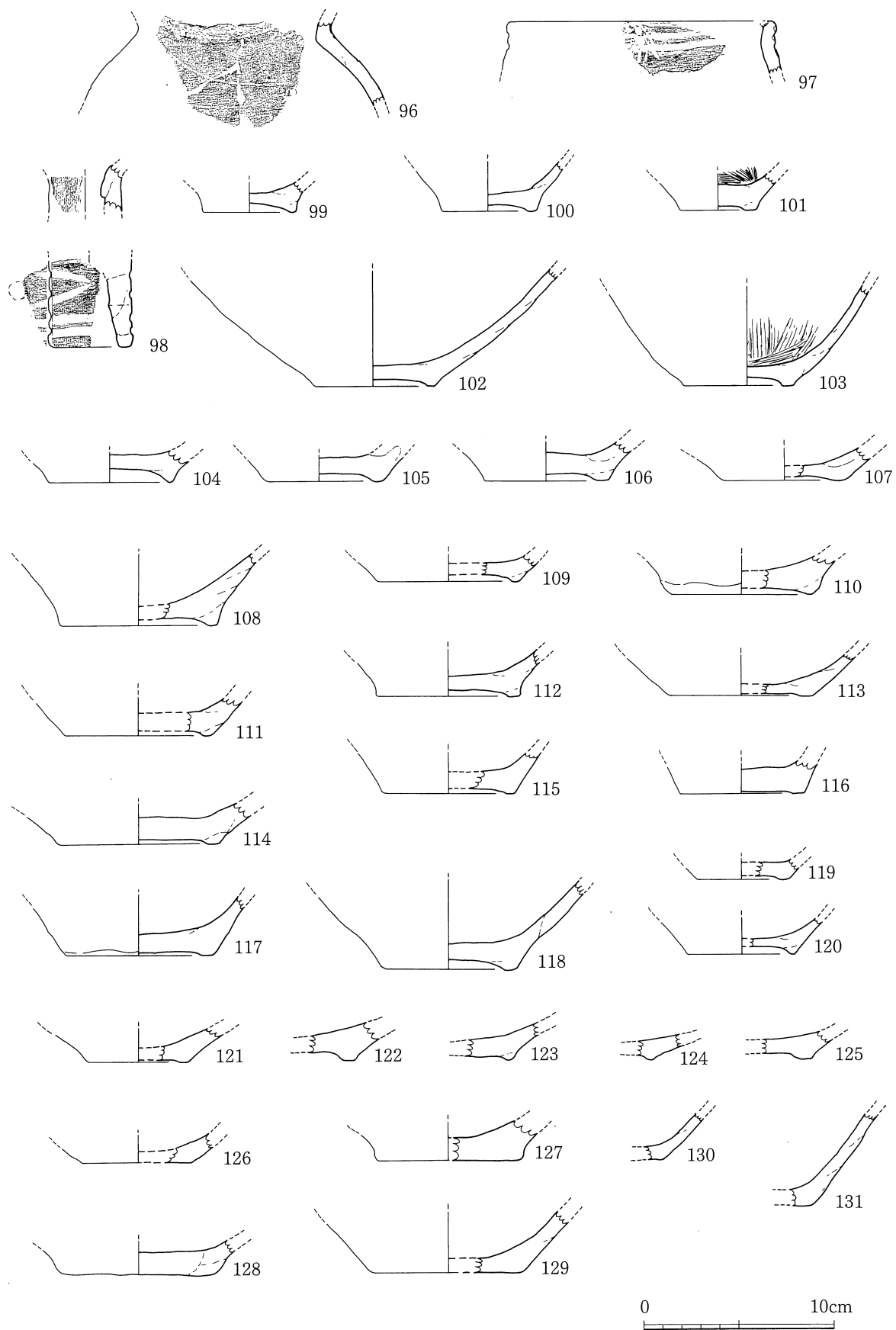
第28図 岡遺跡神ノ木地区1号竖穴出土遺物実測図④ (1/3)



第29図 岡遺跡神ノ木地区1号竖穴出土遺物実測図⑤ (1/3)



第30図 岡遺跡神ノ木地区1号竪穴出土遺物実測図⑥ (1/3)



第31図 岡遺跡神ノ木地区1号竖穴出土遺物実測図⑦ (1/3)

表1 岡遺跡神ノ木地区1号堅穴出土土器観察表(1)

胎土：(長)長石/(石)石英/(角)角閃石/(金)金雲母/(赤)赤色粒

挿図	番号	器種(部位)	胎土	調整(外面/内面)	焼成	色調(外面/内面)	施文等
第25図	1	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	におい黒褐色/におい黒褐色	沈線間RL縄文
	2	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	におい黄橙色/におい黄橙色	2条沈線間RL縄文
	3	深鉢	長・石・角	ナデ/ナデ	良好	赤褐色/赤褐色	外面2条・内面1条沈線
	4	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	におい黒褐色/におい黒褐色	3条沈線間RL縄文
	5	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	におい橙色/におい橙色	2条沈線
	6	深鉢	長・石・角	研磨/ナデ	良好	におい黄橙色/におい黄橙色	内面1条沈線
	7	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	におい褐色/におい褐色	内面1条沈線
	8	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	におい茶褐色/におい茶褐色	内面1条沈線
	9	深鉢	長・石・角	研磨/ナデ	良好	におい黄橙色/におい黄橙色	
	10	深鉢	長・石・角・赤	研磨/研磨	堅緻	におい黒褐色/灰褐色	内面1条沈線
	11	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	におい黄橙色/におい黄橙色	
	12	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	におい赤褐色/におい褐色	細線文
	13	深鉢	長・石・角・金	研磨/研磨	堅緻	におい赤褐色/黒褐色	細線文・凹線文
	14	深鉢?	長・石・角・赤	ナデ/丁寧なナデ	軟質	黒褐色/におい橙色	2条1単位の沈線・内面1条沈線
	15	深鉢?	長・石・角・赤	丁寧なナデ/ナデ	軟質	明橙色/におい黄橙色	2条1単位の沈線
	16	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	暗茶褐色/におい茶褐色	内面1条沈線
	17	深鉢	長・石・角・赤	研磨/ナデ	良好	におい赤褐色/におい橙色	内面1条沈線
	18	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	におい橙色/におい橙色	内面1条沈線
	19	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	におい橙色/におい橙色	内面1条沈線
	20	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	明橙色/明橙色	内面1条沈線
第26図	21	深鉢	長・石・角	粗研磨/粗研磨	良好	黒褐色/黒褐色	内面1条沈線
	22	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	暗茶褐色/暗茶褐色	内面1条沈線
	23	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	暗茶褐色/灰褐色	内面1条沈線
	24	深鉢	長・石・角・赤	ナデ/ナデ	良好	におい褐色/におい褐色	内面1条沈線
	25	深鉢	長・石・角・金	粗研磨/ナデ	軟質	におい褐色/におい褐色	内面1条沈線・外面煤付着
	26	深鉢	長・石・角	研磨/ナデ	良好	暗茶褐色/におい黄橙色	外面煤付着
	27	深鉢	長・石・角・赤	研磨/研磨	堅緻	におい褐色/におい黄橙色	
	28	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	暗茶褐色/暗茶褐色	
	29	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	暗褐色/におい橙色	
	30	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	黒褐色/暗褐色	
	31	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	明橙色/明橙色	
第27図	32	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	暗茶褐色/におい茶褐色	
	33	深鉢	長・石・角	研磨/ナデ	軟質	黒褐色/におい褐色	
	34	深鉢	長・石・角	粗研磨/粗研磨	良好	暗茶褐色/におい茶褐色	
	35	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	暗茶褐色/におい茶褐色	
	36	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	におい橙色/におい橙色	
	37	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	黒褐色/におい褐色	
	38	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	暗茶褐色/暗茶褐色	
	39	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	暗茶褐色/におい褐色	
	40	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	暗茶褐色/におい褐色	
	41	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	黒褐色/におい橙色	口縁部3条凹線
	42	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	暗褐色/におい橙色	口縁部3条凹線
	43	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	におい茶褐色/におい茶褐色	口縁部3条凹線
第28図	44	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	暗褐色/暗茶褐色	沈線間RL縄文・刻目
	45	深鉢	長・石・角・赤	ナデ/研磨	良好	におい褐色/におい橙色	沈線間RL縄文・刻目
	46	深鉢	長・石・角	研磨/ナデ	良好	におい黄橙色/におい黄橙色	
	47	深鉢	長・石・角	研磨/ナデ	良好	におい黄橙色/におい黄橙色	
	48	深鉢	長・石・角	研磨/ナデ	良好	黒褐色/におい黄橙色	
	49	深鉢	長・石・角・金	研磨/ナデ	良好	におい黒褐色/におい橙色	
	50	深鉢	長・石・角	研磨/ナデ	良好	暗褐色/暗褐色	外面煤付着
	51	深鉢	長・石・角	研磨/ナデ	良好	におい褐色/におい褐色	
	52	深鉢	長・石・角・赤	研磨/研磨	良好	におい黄橙色/におい黄橙色	
	53	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	におい茶褐色/におい茶褐色	
	54	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	暗褐色/暗褐色	

表2 岡遺跡神ノ木地区1号竪穴出土土器観察表(2)

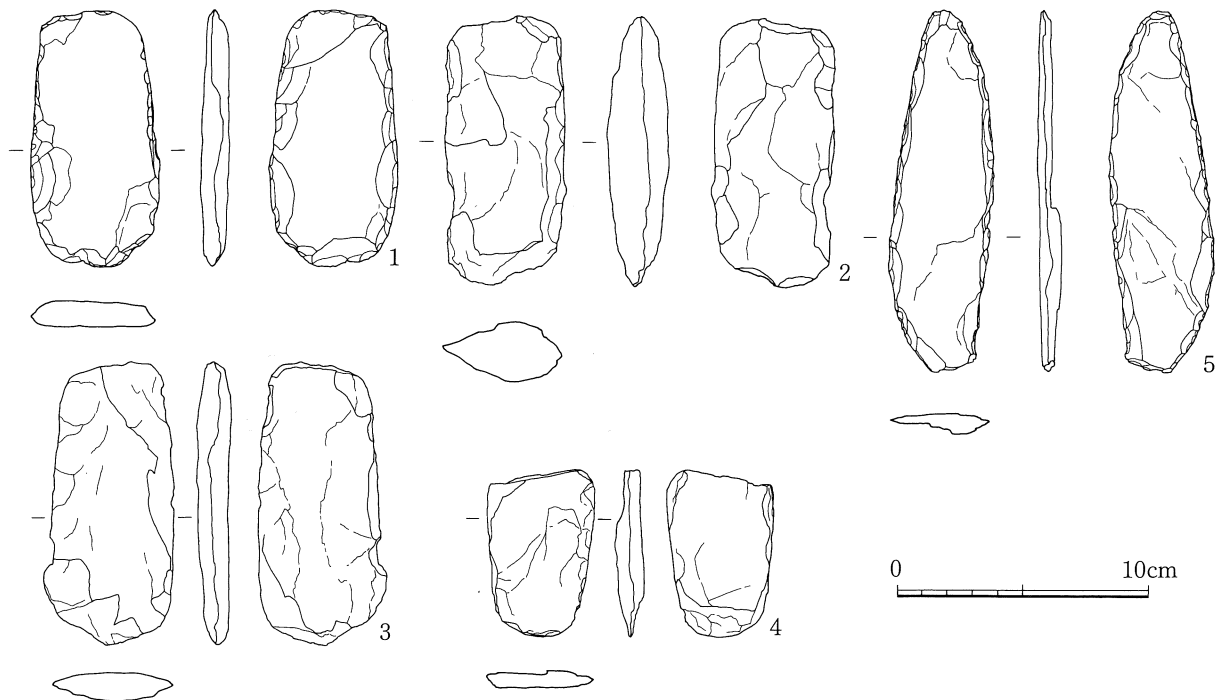
胎土:(長)長石/(石)石英/(角)角閃石/(金)金雲母/(赤)赤色粒

挿図	番号	器種(部位)	胎土	調整(外面/内面)	焼成	色調(外面/内面)	施文等
	55	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	黒褐色/暗茶褐色	
	56	深鉢	長・石・角	研磨/ナデ	軟質	暗茶褐色/暗茶褐色	
	57	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	におい茶褐色/黒褐色	
	58	深鉢	長・石・角	研磨/ナデ	良好	黒褐色/茶褐色	
	59	深鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	黒褐色/におい橙色	肩部2条凹線
	60	深鉢	長・石・角・金	内外面巻貝条痕	良好	暗茶褐色/黒褐色	
第29図	61	深鉢	長・石・角	巻貝条痕/ナデ	良好	におい茶褐色/におい茶褐色	
	62	鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	暗茶褐色/におい橙色	口縁部3条凹線・凹文
	63	鉢	長・石・角・金	研磨/研磨	堅緻	暗茶褐色/暗茶褐色	口縁部3条凹線
	64	鉢?	長・石・角	研磨/研磨	良好	橙色/橙色	口縁部3条沈線・楕円文
	65	鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	黒褐色/暗茶褐色	口縁部3条凹線
	66	浅鉢	長・石・角	ナデ/粗研磨	軟質	におい黄褐色/におい灰褐色	沈線方形区画文・細線文
	67	浅鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	におい黄褐色/灰褐色	口縁部2条沈線・RL縄文
	68	浅鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	黒褐色/暗茶褐色	口縁部2条沈線
	69	浅鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	におい褐色/黒褐色	口縁部2条凹線
	70	浅鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	におい褐色/暗褐色	口縁部2条凹線・外面煤付着
	71	浅鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	におい橙色/におい橙色	口縁部2条沈線
	72	浅鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	暗茶褐色/暗茶褐色	口縁部2条沈線
	73	浅鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	におい茶褐色/におい茶褐色	口縁部3条沈線
	74	浅鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	におい橙色/におい橙色	口縁部3条沈線
	75	浅鉢	長・石・角	研磨/粗研磨	良好	赤褐色～黒褐色/赤褐色	口縁部2条沈線
	76	浅鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	におい褐色/暗茶褐色	口縁部4条凹線
	77	浅鉢	長・石・角・赤	ナデ/ナデ	軟質	におい黄褐色/におい黄褐色	口縁部3条沈線
第30図	78	浅鉢	長・石・角	ナデ/研磨	良好	におい褐色/暗褐色	肩部3条凹線・内面1条沈線
	79	浅鉢	長・石・角・金	研磨/研磨	良好	明褐色/明褐色	肩部2条+ α 凹線・内面1条沈線
	80	浅鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	暗茶褐色/におい橙色	肩部3条凹線
	81	浅鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	黒褐色/におい赤褐色	肩部2条沈線+凹文 内面1条沈線
	82	浅鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	黒褐色/におい茶褐色	
	83	浅鉢	長・石・角・金	研磨/研磨	堅緻	におい茶褐色/におい茶褐色	口縁部3条凹線 頸部2条凹線+扇状圧痕
	84	浅鉢	長・石・角・赤	研磨/研磨	堅緻	におい褐色/におい褐色	口縁部2条凹線
	85	浅鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	黒褐色/黒褐色	口縁部2条凹線
	86	浅鉢	長・石・角	ナデ/ナデ	軟質	褐色/におい黄褐色	
	87	浅鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	におい茶褐色/におい茶褐色	
	88	浅鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	暗茶褐色/におい橙色	
	89	浅鉢	長・石・角・赤	研磨/研磨	堅緻	暗褐色/におい橙色	
	90	浅鉢	長・石・角・赤	研磨/研磨	良好	におい黄褐色/におい橙色	外面煤付着
	91	浅鉢	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	灰褐色/黒褐色	口縁部2条沈線
	92	浅鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	黒褐色/黒褐色	口縁部1条沈線
	93	浅鉢	長・石・角	研磨/研磨	良好	黒褐色/黒褐色	口縁部・頸部1条沈線
	94	皿	長・石・角	研磨/研磨	良好	におい褐色/におい褐色	
	95	皿	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	暗茶褐色/におい茶褐色	
第31図	96	注口土器	長・石・角・金	研磨/研磨	良好	におい黒褐色/におい黒褐色	沈線・巻貝擬似縄文 棒状刺突
	97	注口土器	長・石・角	研磨/研磨	堅緻	におい茶褐色/におい茶褐色	2条凹線・刺突・刻目
	98	脚台付土器	長・石・角	研磨/ナデ	堅緻	におい茶褐色/におい茶褐色	凹線文・2箇所穿孔
	99	(底部)	長・石・角	研磨/ナデ	良好	におい橙色/におい橙色	
	100	(底部)	長・石・角	ナデ/ナデ	良好	におい橙色/におい褐色	
	101	(底部)	長・石・角	ナデ/板ナデ	良好	におい黄褐色/橙色	
	102	(底部)	長・石・角	研磨/ナデ	良好	明褐色/暗褐色	
	103	(底部)	長・石・角	研磨/板ナデ	良好	におい褐色/黒褐色	
	104	(底部)	長・石・角	ナデ/ナデ	軟質	浅黄褐色/浅黄褐色	
	105	(底部)	長・石・角	ナデ/ナデ	軟質	褐色/黒褐色	
	106	(底部)	長・石・角	ナデ/ナデ	良好	におい褐色/暗茶褐色	

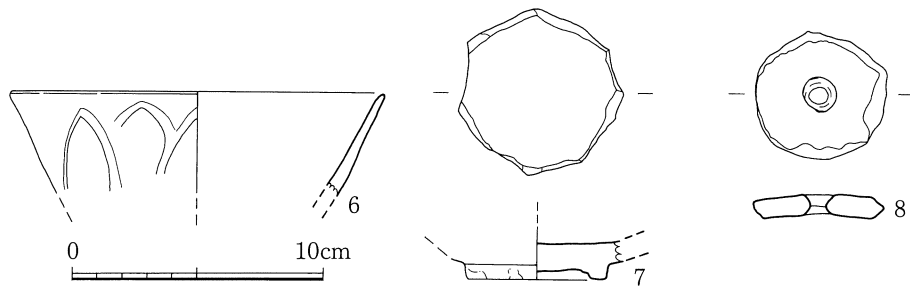
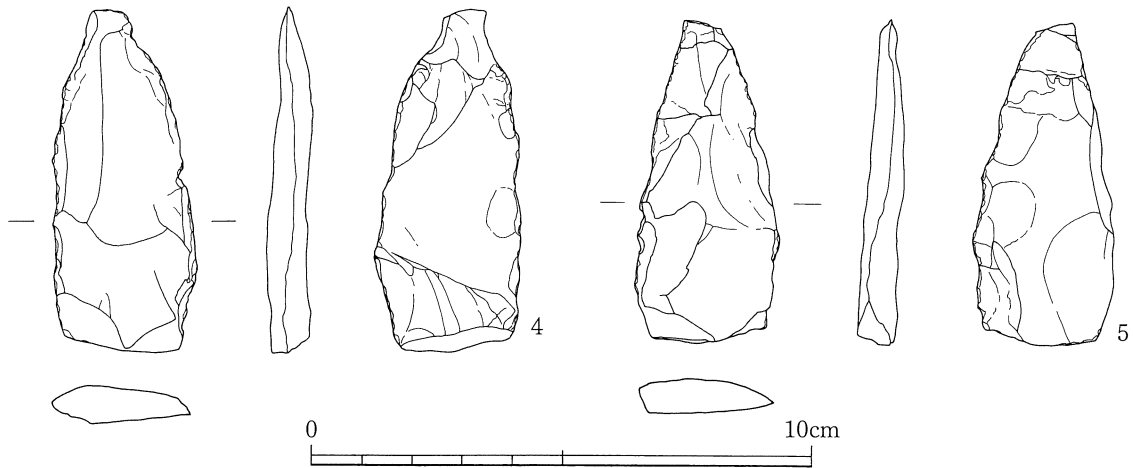
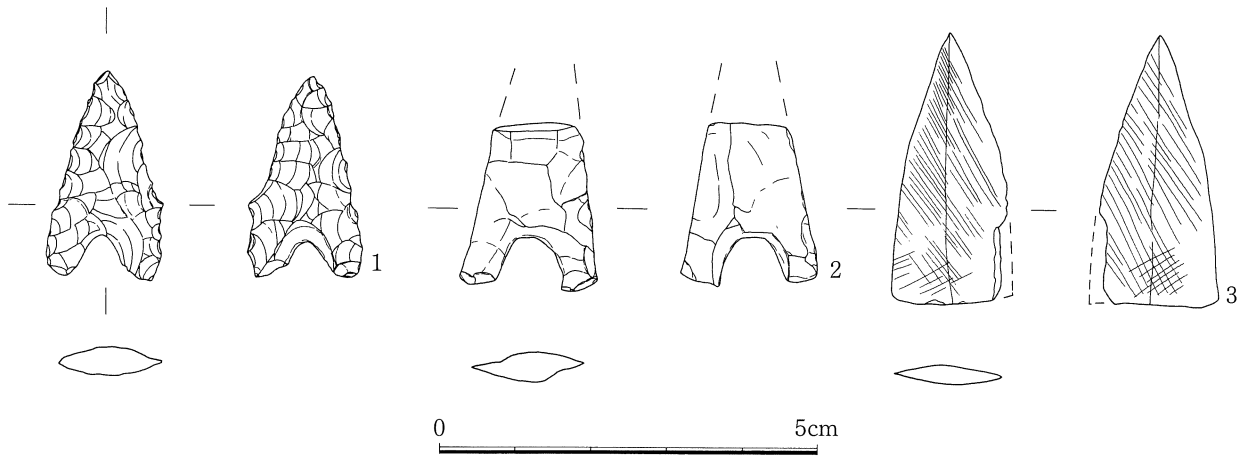
表3 岡遺跡神ノ木地区1号竖穴出土土器観察表(3)

胎土：(長)長石/(石)石英/(角)角閃石/(金)金雲母/(赤)赤色粒

挿図	番号	器種(部位)	胎土	調整(外面/内面)	焼成	色調(外面/内面)	施文等
	107	(底部)	長・石・角・金	研磨/ナデ	良好	にぶい橙色/灰褐色	
	108	(底部)	長・石・角・赤	ナデ/ナデ	良好	橙色/黄橙色	
	109	(底部)	長・石・角・赤	ナデ/ナデ	軟質	暗茶褐色・暗茶褐色	
	110	(底部)	長・石・角・金	研磨/ナデ	良好	浅橙色/浅橙色	
	111	(底部)	長・石・角	ナデ/ナデ	良好	にぶい茶褐色/黒褐色	
	112	(底部)	長・石・角	ナデ/ナデ	軟質	にぶい黄橙色/にぶい赤橙色	
	113	(底部)	長・石・角・金	研磨/ナデ	良好	浅橙色/灰褐色	
	114	(底部)	長・石・角	研磨/ナデ	良好	浅黄橙色/浅黄橙色	
	115	(底部)	長・石・角	研磨/ナデ	良好	にぶい茶褐色/にぶい黒褐色	
	116	(底部)	長・石・角	研磨/ナデ	堅緻	暗茶褐色/黒褐色	
	117	(底部)	長・石・角	研磨/研磨	良好	にぶい茶褐色/にぶい褐色	
	118	(底部)	長・石・角	研磨/研磨	軟質	にぶい橙色/黒褐色	内面煤付着
	119	(底部)	長・石・角	研磨/研磨	良好	黒褐色/黒褐色	
	120	(底部)	長・石・角	研磨/研磨	良好	にぶい茶褐色/にぶい茶褐色	
	121	(底部)	長・石・角	研磨/研磨	良好	にぶい橙色/にぶい橙色	
	122	(底部)	長・石・角	ナデ/研磨	良好	にぶい黒褐色/にぶい黒褐色	
	123	(底部)	長・石・角	研磨/研磨	良好	にぶい黄橙色/にぶい黒褐色	
	124	(底部)	長・石・角	研磨/研磨	良好	にぶい橙色/黒褐色	
	125	(底部)	長・石・角	研磨/研磨	良好	にぶい黄橙色/黒褐色	
	126	(底部)	長・石・角	ナデ/ナデ	良好	暗褐色/黒褐色	
	127	(底部)	長・石・角	ナデ/ナデ	良好	にぶい橙色/にぶい橙色	
	128	(底部)	長・石・角	ナデ/ナデ	良好	にぶい橙色/にぶい橙色	
	129	(底部)	長・石・角	ナデ/ナデ	良好	にぶい橙色/黒褐色	
	130	(底部)	長・石・角	研磨/研磨	良好	にぶい橙色/にぶい橙色	
	131	(底部)	長・石・角	研磨/ナデ	良好	にぶい橙色/にぶい褐色	



第32図 岡遺跡神ノ木地区1号竖穴出土遺物実測図⑧(1/3)



第33図 岡遺跡神ノ木地区出土遺物実測図 (1/1・2/3・1/3)

包含層出土遺物

包含層中からも多くの遺物が出土しているが、主要なもののみ第33図に図化した。1・2は石鏃であるが、1は姫島産黒曜石製である。3は粘板岩製磨製石鏃である。4・5は粘板岩製磨製石鏃の未製品である。8は弥生土器の壺片を利用して再加工した紡錘車であろう。

第4節 まとめ

1) 神ノ木地区1号竪穴出土縄文土器の検討

1号竪穴埋土中からは、小破片を含め約2,500点の土器が出土している。内2,000点余りは胴部の小破片であり形態の判別は困難である。土器は住居跡廃絶後一括投棄されたものと考えられるが、下位レベルでは比較的残りの良い土器が出土している。時期は縄文時代後期後半～晩期初頭のものがみられるが、主体的に出土したのは三万田Ⅱ～Ⅲ式⁽¹⁾ 併行期のものである。器種は、深鉢・鉢・浅鉢・皿・注口土器・脚台付土器がある。

—型式分類—

(深鉢)

[口縁部]

I類— (第25図1～9) ゆるやかに外反する頸部から口縁部が短く逆「く」字状に屈曲するもの。波状口縁になるものと平縁のものがある。調整は研磨またはナデによるが、研磨するものは焼成が堅緻なものが多い。

I a (1～5) : 口縁部外面に2～3条の沈線をめぐらせ、沈線間に縄文を施す。2・3は内面にも1条沈線がめぐる。1は波頂部の破片で、頂部を押圧により凹ませる。太郎迫式併行期の深鉢口縁部である。

I b (6～9) : 口縁部外面が無文で内面に沈線がめぐるもの。9は内面も無文である。駒方C遺跡に出土例の多い、外面無文の深鉢口縁部である。

II類— (第25図10・11) 口縁部が内湾しながら立ち上がるもの。波状口縁を呈する。10は内面に1条沈線がめぐる。外面は無文である。調整は研磨による。焼成は堅緻である。

III類— (第25図12・13) わずかに外反しながら長くのびる頸部から、口縁部が短く屈曲して立ち上がるもの。13にわずかに残る胴部上半の形態は、内面に稜をもち外面は丸みをもつものと考えられる。口縁端部は面をなし、そこに12は左下がりが、13は右下がりの細線文が施されている。細線文の長さは約7～11mm、幅は約1mmである。13の胴部上半には3条(+a)の凹線がめぐる。器面は内外面とも光沢がでるほど入念に研磨され、凹線内も丁寧に磨かれている。焼成は堅緻である。

IV類— (第25図14・15) ゆるやかに外反しながら長くのびる頸部は逆「ハ」字状に開き、口縁部にいたる。口縁端部は面をなす。胴部の形態は不明である。口縁部から頸部外面に2条1単位の沈線を施す。14は、口縁部内面にも1条沈線をめぐらせる。15は浅くナデ凹ませることによって文様効果をあげており、14に比べれば若干退化する傾向にある。調整は内外面ともナデにより、焼成はやや軟質である。類例に乏しく、浅鉢形の可能性も考えておきたい。

V類— (第25図16～20・第26図21～26・28～31・第27図32～40) 丸みのある胴部から一旦内傾し、直立またはやや外反しながら頸部が長くのびて口縁部にいたるもの。口縁端部は面取りするものと丸くおさめるものがある。頸部・胴部の境は明瞭で、内面に強い稜が入るものが多い。外面頸部下端は、粘土貼付または頸部・胴部の境を研磨あるいは強くなでることによって意識的に段が形成される。胴部最大径を口径が上回るかほぼ同じ位で、頸部のすぼまりが弱い寸胴な印象をうける。調整は研磨によるものも多く、焼成は堅緻または比較的良好である。

V a (16～25) : 口縁部内面に1条沈線を施すもの。

V b⁽²⁾ (26・28～40) : 内外面無文のもの。

VI類— (第26図27) 胴部の張りが弱く、ゆるやかなS字状のカーブを描いて口縁部にいたるもの。内外面無文である。口縁端部は面取りする。口径が胴部最大径を上回る。頸部と胴部の境は曖昧である。調整は内外面とも研磨による。

VII類— (第27図41～43) 長く外反してのびる頸部から、直立気味に口縁部が屈曲して長く立ち上がるもの。胴部形態は不明である。口縁部外面は幅広く、そこに3条の凹線をめぐらせる。口縁端部は面取りするものと丸くおさめるものがある。43は頸部に穿孔する。内外面とも研磨調整され、凹線内も磨かれている。

焼成は堅緻である。

[胴部]

- I 類－（第28図44～49）丸みのある胴部から一旦内傾し、「く」字状に屈曲して頸部が外反するもの。頸部と胴部の境は明瞭で内外面とも強い稜線がはいる。口縁部 I・II 類の胴部である。
- I a（44・45）：胴部上半外面に文様を施すもの。施文は幅の狭い沈線文・刺突文・縄文などからなる。調整は内外面研磨による。
- I b（46～49）：無文のもの。調整は外面が研磨、内面はナデによるものが多い。
- II 類－（第28図50～54）丸みのある胴部から一旦内傾し、直立気味またはわずかに外反して頸部がのびるもの。頸部・胴部の境は明瞭で、内面に強い稜線がはいるものが多い。外面頸部下端は、粘土貼付または頸部・胴部の境を研磨あるいは強くなでることによって、意識的に段を形成する。口縁部 V 類の胴部である。
- III 類－（第28図55・56）頸部・胴部の境が曖昧で、緩やかな「S」字状のカーブを描いて底部にいたるもの。胴部の張りが弱い。口縁部 VI 類の胴部である。
- IV 類－（第28図57～59）肩部が逆「く」字状に強く張るもので、一旦内傾し、直立気味またはやや外反気味に頸部がのびるもの。内外面とも屈曲が強く明瞭な稜線がはいる。59は肩部に平行凹線文を施す。
- V 類－（第28図60・61）全体形は不明であるが、最終調整が条痕のもの。内外面条痕のものと内面はナデ調整のものがある。小破片のため他時期の混入である可能性もある。

(鉢)

（第29図62～65）底部から直線的に外反して胴部が立ち上がり、直立気味に屈曲して口縁部にいたるもの。口縁部外面に3条の凹線文と円形の凹文を施す。口縁部は面取りするものと丸くおさめるものがある。内外面とも丁寧に研磨され、光沢がある。62・63・65は色調が黒褐色を呈する。64のみ波状口縁になると考えられる。焼成は堅緻である。

(浅鉢)

- I 類－（第29図66）底部から直線的に外反して胴部が立ち上がり、口縁部は逆「く」字状に屈曲するもの。口縁部は丸くおさめる。口縁部外面に幅2mmの細い沈線による区画文と細線文を施す。調整は外面が丁寧なナデ、内面は口縁部がナデ、胴部は研磨による。焼成は軟質である。口径10.5cmの小形品である。
- II 類－（第29図67～74）底部からゆるやかに開きながら立ち上がり、口縁部が直立気味に屈曲して立ち上がるもの。口縁部外面に施文する。平口縁で器高に対して口径が大きいものである。調整は内外面とも研磨による。法量は大小がある。
- II a（67）：文様が平行沈線と縄文からなるもの。口唇部にも縄文を施している。
- II b（68～74）：2～3条の平行沈線または凹線を施すもの。
- III 類－（第29図75～77）底部から内湾気味に立ち上がり、そのまま口縁部にいたるもの。II 類よりやや器高の深いもの。平口縁である。口縁部外面に2～4条の沈線または凹線をめぐらせる。75・76は研磨調整により焼成も堅緻であるが、77はナデ調整で焼成は軟質である。
- IV 類－（第30図78～80）肩部が屈曲して張り出し、頸部が長くのびるもの。平口縁である。肩部径より口径が大きくなる。外面肩部に平行凹線、内面口縁部に1条沈線を施す。調整は78の外面のみナデ、他は内外面研磨による。
- V 類－（第30図81）肩部の屈曲はIV 類ほど強くなく、頸部が長くのびるもの。波状口縁を呈する。肩部外面に凹線、内面に沈線を施し、外面には円形の凹文も加える。内外面とも入念に研磨される。外面黒褐色を呈し、焼成は堅緻である。
- VI 類－（第30図82）口縁部が逆「く」字状に屈曲するもの。器壁が厚く、大形品である。内外面とも入念に研磨

される。

- VII類－（第30図83～85）ゆるやかに外反する頸部から、やや外反気味に口縁部が立ち上がるもの。内外面とも入念に研磨され光沢がある。口縁部外面に2～3条の凹線文を施す。凹線は凸部の幅が非常に狭く、凹部が近接している。凹線内部も研磨される。口縁端部は面取りするものと先細りにおわるものがある。頸部下端に扇状圧痕を施す。焼成は堅緻である。
- VIII類－（第30図86～90）胴部が内湾気味に立ち上がるもので椀形を呈する。法量の大小がある。平口縁である。調整は内外面とも研磨による。90は大形品で、胴部下半はナデによる。焼成は堅緻であるものが多い。
- IX類－（第30図91・92）2点出土している。頸部下端で強く屈曲し、ゆるやかに外反して頸部がのび、直立気味に口縁部が立ち上がるもの。口縁部外面に2条の沈線をめぐらせる。口縁端部は丸くおさめる。内外面とも丁寧に研磨される。後続する夏土原段階（御領式併行）に盛行する型式である。
- X類－（第30図93）1点出土している。頸部が外反してそのまま口縁部にいたるもの。口縁部内面に粘土を貼付して肥厚させる。口縁部外面に1条沈線がめぐる。晩期の浅鉢である。

（Ⅲ）

（第30図94・95）底部から直線的に外反し、口縁部にいたる。平縁を呈する。口縁端部は95が面取りされる。内外面とも丁寧な研磨調整である。焼成は堅緻である。

（注口土器）

- I類－（第31図96）丸みのある胴部から一旦内傾し屈曲して立ちあがるもの。頸部屈曲部外面に斜刻目と棒状刺突で施文する。胴部外面は沈線で文様を描き、巻貝擬似縄文を充填する。調整は研磨による。焼成は堅緻である。形態的特徴から北久根山式併行期の所産である可能性が高い。
- II類－（第31図97）口縁部のみの破片で全体形は不明である。平口縁を呈する。口縁部外面に2条凹線をめぐらせ、棒状刺突と刻目を施す。調整は研磨による。焼成は堅緻である。

（脚台付土器）

（第31図98）脚部片である。図示したものは現状では接合しないが、同一個体である可能性が高い。接地面は平坦である。ほぼ直立気味に立ち上がる中空の脚部である。凹線文と穿孔を2箇所施す。外面は丁寧に研磨され光沢がある。内面は、粘土接合痕が残っている。焼成は堅緻である。

（底部）

（第31図99～131）形態不明の破片を含め、51点出土している。形態は、小型高台底⁽³⁾と平底がある。底径は4～8.6cmで6～7cm台のものが多い。

小型高台底（99～125）：底部外面に隆帯を貼付し、低い高台とする。接地面は平たい面またはゆるい面をもつ。

101・103は内面に底部と胴部の接合部分を板状の工具でなでた痕跡が残る。115・116・117は他の高台底に比べて極端に高台が低いものである。平底に近いが、高台のやや内側をなでることによってわずかに段を形成し高台状にする意図が窺える。調整は、外面は研磨あるいはナデにより、内面はナデである。

平底（126～131）：高台のつかないもの。内外面ナデ調整のものが多い。

－小結－

1号竪穴から出土した土器のうち、時期・器種を判別できるものは以上のものであった。時期的に前後し、出土状況からも混入の可能性が高い小破片を除くと、形態を判別できる大形片が多く、下位レベルでは比較的残り

の良い土器が出土している。時期は既存型式（様式）の三万田Ⅱ～Ⅲ式に限定される。大分県内の後期後葉は、国東半島東岸地域と大野川中流域で研究が深化している。岡遺跡の立地する大野川中流域における該期の土器編年は、1980年代に坂本嘉弘氏・後藤一重氏によってその大綱が作られたが、以後、良好な出土状況のまとまった資料は報告されていない〔坂本1984・後藤(一)1985〕。同じ頃、国東半島の東貝塚で採集された土器を整理・報告した宮内克己氏は、大野川中流域での研究成果を加味し、東九州地域における後期後葉の編年を組み立てるとともに、国東半島と大野川中流域という地域差にも注意を喚起している〔宮内1985〕。以後、国東町陽弓遺跡・森本遺跡、宇佐市尾畑遺跡など国東半島では該期の良好な一括資料が増加し、より具体的な型式内容が明らかになってきている。近年、後藤晃一氏は東北部九州（周防灘西岸～国東半島東岸）における後期後半の遺跡を概括し、有文深鉢と浅鉢について編年を試みている〔後藤(晃)2002〕。また別稿では九州地方の注口土器について編年案の提示を行っている〔後藤(晃)2002〕。今回の調査により、1980年代以降まとまった資料の報告がなかった大野川中流域の土器編年を補足する良好な資料を得ることができた。以下その内容をまとめておきたい。

1号竪穴では、深鉢(136点)・鉢(4点)・浅鉢(32点)・皿(3点)・注口土器(1点)・脚台付土器(1点)が出土している⁽⁴⁾。比較的大形の破片が多く出土しているが、完形に復元できた資料はない。最も個体数が多いのは深鉢で、浅鉢がそれに次ぐ。鉢・皿・注口土器・脚台付土器の構成比は小さいが、他遺跡の例からも、元々少数器種であることが明らかである。

主体的に出土する土器は、深鉢Ⅴ類である。後藤分類⁽⁵⁾の内河野Ⅱb・Ⅲb類に相当する。外面無文で内面口縁部に1条沈線を施すものと、内外面無文のものがある。同一個体片を含む可能性もあるが、口縁部片は前者が49点、後者が80点であり、後者のほうが多くなっている。後藤氏は、内河野段階においても内面沈線を施すものから内外無文のものへのシフトが看取されることを指摘しており、やや時期の下る岡遺跡においてもその傾向が続くことがわかる。胴部片では、形態を判別できるもの110点のうち、胴部が丸く張り出すものが101点と圧倒的多数を占める⁽⁶⁾。内外面に稜線がはいるもの(Ⅳ類)は4点、頸胴部の境が明瞭でないくびれの弱いもの(Ⅲ類)は5点にとどまる。深鉢の形態は、平口縁で頸・胴部の境が明瞭であり、胴部に丸みを残すものが依然主体的であるといえるだろう。また口縁部内面に1条沈線を施すものが減少し、内外面無文のものが増加する傾向にある。浅鉢はⅡb類が最も多く、同一の文様構成をとるⅢ類も含めると主体を占める。後藤分類のⅠb類に相当する。内河野段階に比べると、口縁部の立ち上がりが全て直立気味になり、内彎するものは出土していない。また口縁部外面の施文は沈線によるものと凹線によるものが混在する。底部は、形態を判別できるもの50点の内、平底7点、小型高台底43点で後者が多い。大野川中流域の地域性の指標として、後期後葉以降も低い高台底と凹底が主体を占めることが幸泉満夫氏によって指摘されており〔幸泉2002b〕、岡遺跡から出土した底部も前段階からの伝統を踏襲しているようである。底径のピークが6～7cm台にある点も前段階と共通する。深鉢Ⅴ類と浅鉢Ⅱb類のセットが出土土器の主体であるということは、前段階の駒方・内河野期でも同様の傾向であり、これらが継続して作り続けられた主要器種型式であることを示している。時期が下るにつれて、波状口縁深鉢の減少や浅鉢口縁部の立ち上がりなどに変化がおこるが、基本的な形態や組成比は維持されている。大野川中流域では、これら基本器種型式に伴う土器が時期によって変化していくことが後藤一重氏によって明らかにされている。

岡遺跡では、深鉢に細線文・凹線文を施すものが少量伴い、浅鉢では前段階からの系譜を追うことができるⅣ類の他に、Ⅶ類のような形態の土器が出現する。有文深鉢Ⅲ・Ⅶ類は従来編年の指標となってきた細線文・凹線文を施す土器である。Ⅲ類は細線文土器に分類できるが、内河野遺跡で出土した土器とは相違点がある。口縁部内面に1条沈線を伴って細線文が施される内河野遺跡例は口縁部の破片であるが、その特徴から深鉢Ⅴa類に細線文が加えられたものと推定される。口縁部外面に細線文を施す岡遺跡例は、その施文部位だけでなく形態・調整・焼成ともⅤa類とは異なった土器である。Ⅶ類は屈曲する口縁部外面に凹線文を施す土器である。その形態の特徴は駒方段階からみられるが、この段階においても主体となる程の量は出土していない。ただし口縁部外面の施文は、沈線であったものが完全に凹線文化している。無文深鉢は、胴部片の形態から3種類の器形が想定できる。しかし胴部Ⅳ類は他遺跡の出土例から三万田Ⅲ式以降主体となることが明らかであり、Ⅱ類からの形態変

化はスムーズであることから同一の組列上に並ぶものであると考えられる。したがって、少なくとも頸部・胴部の境が明瞭なⅡ→Ⅳ類と、くびれの弱いⅢ類の2つの型式が併存していたと考えられる。福岡県四箇遺跡などで出土例のあるくびれない砲弾形の深鉢は、内河野遺跡2号住居で1点みられるが、岡遺跡では確認できなかった⁽⁷⁾。

浅鉢は、形態のバリエーションが豊富である。主体は前述のⅡb類であるが、頸部を有するⅣ類も出土している。これは後藤分類のⅡbまたはⅢ類から系譜をたどれるものであるが、内河野段階に比べると頸部がより長く外方にのびており、胴部最大径を口径が上まわる。文様は凹線によるものが多いが、口縁部内面に1条沈線を施すという特徴は前段階から継承している。波状口縁を呈するⅤ類は、福岡県黒山遺跡・四箇東遺跡などに出土例がある。頸部を有する浅鉢は県内では平口縁のものが多いが、四箇遺跡L-11c地点では、三万田Ⅱ式の段階から平縁と波状口縁の2型式が併存することが知られる。Ⅶ類は復元すれば国東町陽弓遺跡の浅鉢B類と同様の器形になると考えられ、福岡・熊本両県でも凹線文期に出現する型式であることが知られている。後続する夏足原段階（御領式併行）の浅鉢の器形に影響を与えたものと考えられる。1条の幅が広く、凹部が近接して凸部が稜線状を呈する独特の凹線はⅦ類のみにみられる特徴である。岡遺跡でも出土したことで、大野川中流域においてもこの時期に存在することが明らかとなった。Ⅰ類は、上記諸型式とは異質なもので本例1点のみ出土している。このタイプの浅鉢は、類例を求めるなら四箇遺跡J-10i地点に出土例がある。形態的にも文様的にも上記の一群より若干古い要素をもった土器である。

鉢は、内河野遺跡2号住居から類似形態の土器が出土している。報告書では注口土器として分類されているが、該期のそれとは著しく異なることから、鉢形になると考えられる⁽⁸⁾。器形は踏襲されているが、内河野段階の施文が凹線+巻貝凹文+細線文であるのに対し、岡遺跡では凹線と凹文の組み合わせであり、細線文が用いられることはない。

脚台付土器は県内では出土例が少なく、岡遺跡とほぼ同時期と考えられる国東町森本遺跡で脚部が1点出土している。文様モチーフや器面調整に共通点はあるものの、色調・焼成・施文方法などの違いによりその仕上がりは著しく異なるものとなっている。

後藤編年における土器の形態変化のおおまかな流れを首肯するならば、後期後葉の変遷は以下のように理解できる。まず器形においては、深鉢・浅鉢とも時期が下るにつれて変換点の屈曲が強調されてくるのが分かる。口縁部を屈曲させ外面に文様帯を設ける深鉢Ⅶ類・鉢・浅鉢Ⅱb・Ⅶ類の口縁部下端と深鉢胴部Ⅳ類・浅鉢Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ類の胴部最大径（肩部）がそれである。この動きは、「口縁部／頸部／胴部を屈曲によって区別する独特の形態パターン」として中九州を中心に盛行するいわゆる黒色磨研土器に共通する変化の動態であることが知られている〔松本2002〕。岡遺跡の深鉢ではなお屈曲の強い形態は主流を占める程ではないが、後続する夏足原段階や熊本県鳥井原遺跡などでは、無文深鉢においても肩部が強く張り出す形態が主体を占めるようになる。

一方文様における変化の大きなものは、主要器種である深鉢Ⅴ類の無文化と浅鉢の凹線文化である。深鉢Ⅴ類の内面沈線を施すものと無文のもの組成比は、内河野段階では7：2であったものが岡遺跡では4：6と無文土器が逆転し、夏足原段階でも全体の60%を無文土器が占めているとされる。深鉢では、口縁部が屈曲して立ち上がるⅦ類に施文が限定されるようになり、その文様は平行沈線であったものが凹線文へと変化する。一方浅鉢においては器形の変化と連動し、凹線文を施すものの割合が増加する。駒方C遺跡・内河野遺跡2号住居では巻貝圧痕による凹文を施す例が少数あるが、岡遺跡では凹文に巻貝を用いるものはない。また陽弓遺跡で報告されているような巻貝による凹線もなく、凹線内は全て丁寧に研磨されている。細線文はそれ単独では用いられず、沈線または凹線との組み合わせで器面に施されるが、岡遺跡では若干古い形態をとどめる浅鉢Ⅰ類に沈線を伴って施されるほか、浅鉢に細線文が施されているものはない。

無文深鉢が土器組成の多くを占め、精製土器の文様には凹線文が盛行するという後期後葉の変遷は、大野川中流域のみに限られるものではなく、国東半島東岸、さらには北部九州・中九州など広い地域で一般的であることが知られている。一方、凹線文という文様属性や新出器種を受容するものの、土器の底部・焼成・調整など土器

製作の基本的な技術・主要な器種は伝統的なものを踏襲しているようである⁽⁹⁾。例えば器面調整の点では、東北部九州沿岸部と大野川中流域内陸部の差異として条痕調整の有無が先行研究により指摘されてきたが、「ミガキ(研磨)」と表記される精製土器の仕上げ方にも意識の違いが窺われる。東貝塚の資料を報告した宮内氏は、精製土器について「入念に磨いたものは少なく…(中略)…その仕上げは総じてあまりよくない」と述べている。一方、大野川中流域はこの時期調整技法において研磨が卓越することは知られている。その傾向は全ての器種におよび、無文土器でも粗密はあるが研磨あるいは丁寧なナデ調整が施されている。また研磨調整するものは、堅く焼き締まった堅緻なものか比較的焼成の良好なものが多く、その仕上がりは精緻である。器形や文様の変化といった広域に共通する枠組みに連動する中でなお堅持されている地域性も、土器様式を評価する一視点であろう。後期後葉の土器編年は精製有文土器に基づいて組み立てられてきたが、ある程度の成果を得た今日、土器組成の多くを占める無文深鉢や上記のような地域性が発現される諸属性も比較検討対象として有効であると考えられる。

岡遺跡出土の一括資料は、資料的制約からその型式内容が具体的に明らかになっていない、大野川中流域における三万田Ⅱ～Ⅲ式に併行する土器群である。後藤一重氏の編年によれば、生野～池在の段階に相当すると考えられる。両遺跡では概略的な報告に止まったため、その全体像を知ることができなかったが、今回出土した土器はある程度実相を明らかにするものとなるであろう。

(山崎文子)

註

- 1 宮内克己(1981)「三万田式土器の研究」における分類に準じる。
- 2 深鉢口縁部V b類とVI類は小破片の場合峻別は困難である。
- 3 従来凹底・上げ底として一括されてきたものの中で、底部外縁に接地面をもつものを高台底とする。大野川中流域ではこのタイプの底部が盛行することを幸泉満夫氏が指摘している(幸泉2002b)。岡遺跡では、凹底よりも明らかに接地面を持つ高台底の方が多い傾向にある。
- 4 深鉢・鉢・浅鉢・皿は口縁部の個体数を集計。混入と考えられる深鉢I・II類、浅鉢IX・X類、注口土器I類は含まない。
- 5 後藤一重(1985)『内河野遺跡』における「大野川中流域縄文後期後半土器編年表」に準じる。
- 6 残存状況によっては峻別が困難なため胴部I類も含む。
- 7 全体形を復元できた個体が少ないため、砲弾形の存在する可能性は否定できない。
- 8 九州地方における注口土器を整理・検討した後藤晃一氏の分類によれば、現在出土している大野川中流域や近隣地域の該期注口土器の形態は、やや扁平な胴部から頸部が直線的または内傾気味に立ち上がって口縁部にいたるもので、内河野遺跡2号住居出土例は注口土器として扱われていない(後藤2002)。
- 9 土器の底部に反映される小地域差については幸泉満夫氏が指摘している(幸泉2002ab)。

参考文献

- 岡田憲一2000「西日本縄文後期後葉土器編年序論－向出遺跡出土土器の研究－」『向出遺跡』財団法人大阪府文化財調査研究センター
- 金田信子・永松みゆき・今留康雄(編)1996『横手遺跡群 陽弓遺跡』国東町教育委員会
- 栗田勝弘1982「生野遺跡」『野津川流域の遺跡Ⅲ』大分県野津地区土地改良事業関係遺跡群調査概報 野津町教育委員会
- 幸泉満夫2002a「縄文時代後期土器の非視覚的領域」『論集 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会
- 幸泉満夫2002b「土器底部形態にみる縄文時代後期社会の小地域性－四国西北部地域とその周縁－」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論文集刊行会
- 後藤一重(編)1985『野津川流域の遺跡Ⅵ 内河野遺跡』野津町教育委員会
- 後藤一重1985「池在遺跡」『朝地地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ』朝地町教育委員会

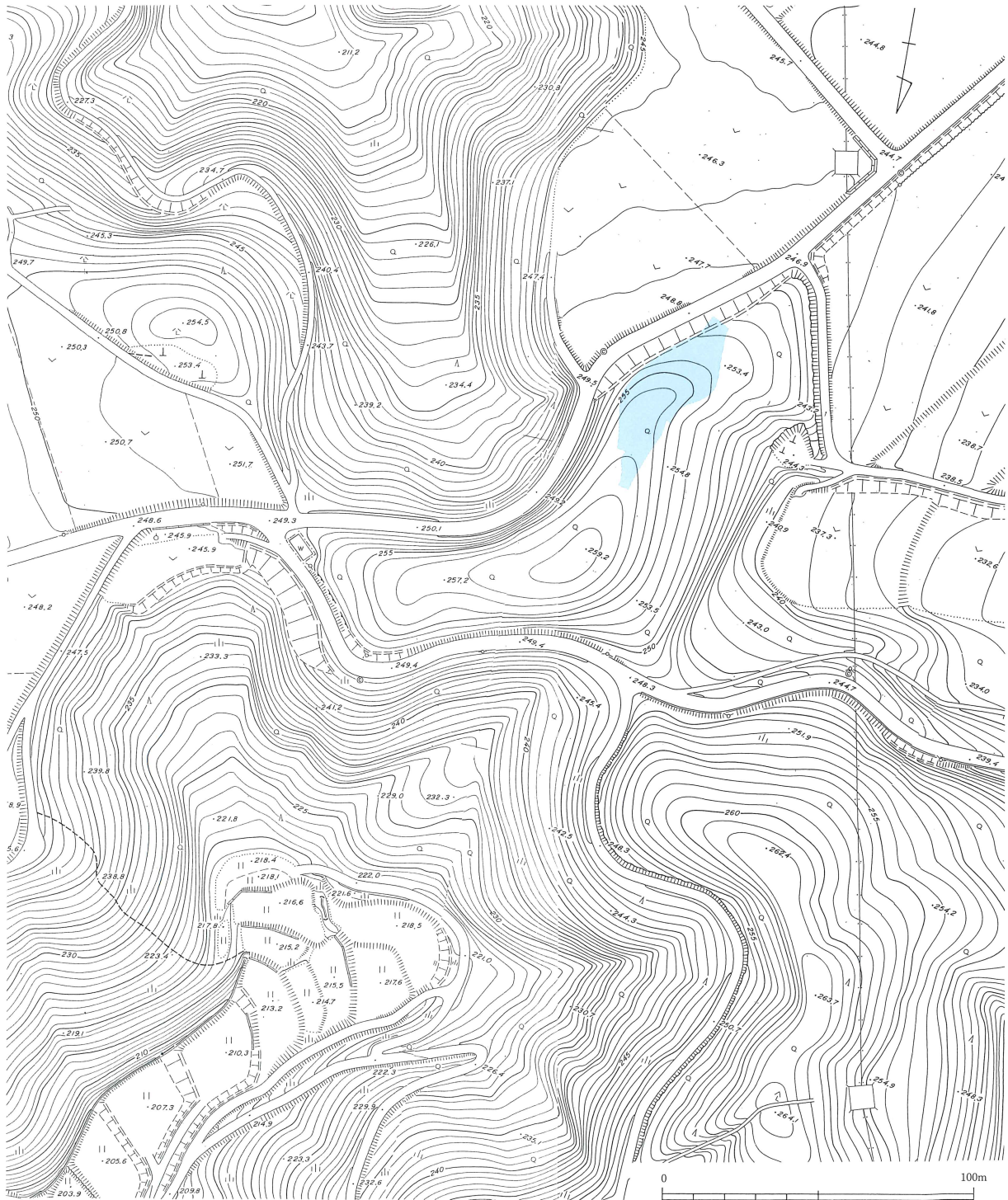
- 後藤晃一2002「九州縄文時代注口土器の研究」『古文化談叢』第48号 九州古文化研究会
- 後藤晃一2004「縄文時代後期の東北部九州－縄文時代後期後半の土器編年－」『考古論集－河瀬正利先生退官記念論文集－』河瀬正利先生退官記念事業会
- 古森政次（編）1994『ワクド石遺跡』 熊本県教育委員会
- 坂本嘉弘（編）1984『大野原の先史遺跡』 大分県教育委員会
- 沢下孝信1983「福岡県・黒山遺跡について－三万田式土器の再検討－」『古文化談叢』第11集 九州古文化研究会
- 島津義昭・清田純一1980「天城遺跡－熊本県菊池市大字赤星字天城－出土縄文土器の報告」『古保山・古閑・天城』 熊本県教育委員会
- 富田紘一1977『鳥井原遺跡発掘調査報告書－熊本市健軍町－』熊本市教育委員会
- 富田紘一1983「太郎迫遺跡の縄文土器（1）」『肥後考古』第4号 肥後考古学会
- 富田紘一1987「太郎迫遺跡の縄文土器（2）」『肥後考古』第6号 肥後考古学会
- 二宮忠司・渡辺和子（編）1983『四箇周辺遺跡調査報告書（5）』 福岡市教育委員会
- 二宮忠司（編）1987『四箇遺跡』 福岡市教育委員会
- 松本直子2002「伝統と変革に揺れる社会－後・晩期の九州－」『縄文社会論（下）』同成社
- 宮内克己1981「三万田式土器の研究」『古文化談叢』第8集 九州古文化研究会
- 宮内克己1985「東貝塚の縄文式土器－東九州における三万田式土器の研究－」『研究紀要』II 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
- 宮内克己1995「尾畑遺跡 北II区包含層出土土器」『横山遺跡・尾畑遺跡』 大分県教育委員会
- 柳田純孝1978『四箇周辺遺跡調査報告書（2）』 福岡市教育委員会
- 綿貫俊一1996「森本遺跡」『横手遺跡群発掘調査報告書』 大分県教育委員会

第3章 穴井遺跡の調査

第1節 調査の概要

穴井遺跡は大分県豊後大野市大野町杉園字芝尾（旧 大野郡大野町杉園字芝尾）に所在する。大野川中流域の台地上に存在する丘陵頂部付近の緩斜面に位置するが、旧来の地形が残る場所は本調査区を含むごく一部のみであり、周辺には広大な畑地が広がる。これらの畑地は昭和40年代に開墾されているが、その際に数多くの土器片が出土したと伝えられている。

遺跡からは遺構として方形プランの竪穴住居跡11棟と土坑8基が検出されているのみである。竪穴住居跡から



第34図 穴井遺跡調査区位置図 (1/2,000)

表4 穴井遺跡遺構一覧表

本報告での遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の時期	特記事項	掲載頁
1号竪穴	S H 1	竪穴住居	弥生時代終末～古墳時代前葉		54
2号竪穴	S H 2	竪穴住居	弥生時代終末～古墳時代前葉		55
3号竪穴	S H 3	竪穴住居	弥生時代終末～古墳時代前葉		56
4号竪穴	S H 4	竪穴住居	弥生時代終末～古墳時代前葉		57
5号竪穴	S H 5	竪穴住居	古墳時代前葉		57
6号竪穴	S H 6	竪穴住居	弥生時代終末～古墳時代前葉		59
7号竪穴	S H 7	竪穴住居	古墳時代前葉		59
8号竪穴	S H 8	竪穴住居	弥生時代終末～古墳時代前葉		59
9号竪穴	S H 9	竪穴住居	弥生時代終末～古墳時代初頭		59
1号土坑	S K 1	土坑	縄文時代晩期中頃		61
2号土坑	S K 2	土坑	縄文時代晩期中頃		61
3号土坑	S K 3	土坑	縄文時代晩期中頃		61

出土する遺物は少ないが丸底複合口縁壺が出土しており、古墳時代初頭をはじめ、それを前後する短期間の時期におさまるものと考えられる。竪穴住居跡は大小2パターンに分けられ、大は4～5本柱、小は2本柱のものが多い。中央には炭・焼土の堆積が確認でき、炉跡が存在することがわかる。

また、径約1m、深さ約20cm程度の円形を呈する土坑3基をはじめ合計8基が検出されている。中でも1号土坑からは、縄文時代晩期の土器片や扁平打製石器片・姫島産黒曜石片などが出土している。縄文時代の遺構は非常に少なく、また、出土遺物も貧弱である。これは、当遺跡の表土自体が黒ボク層であり、堆積よりはむしろ浸食が著しい地形であることに起因しているのであろう。

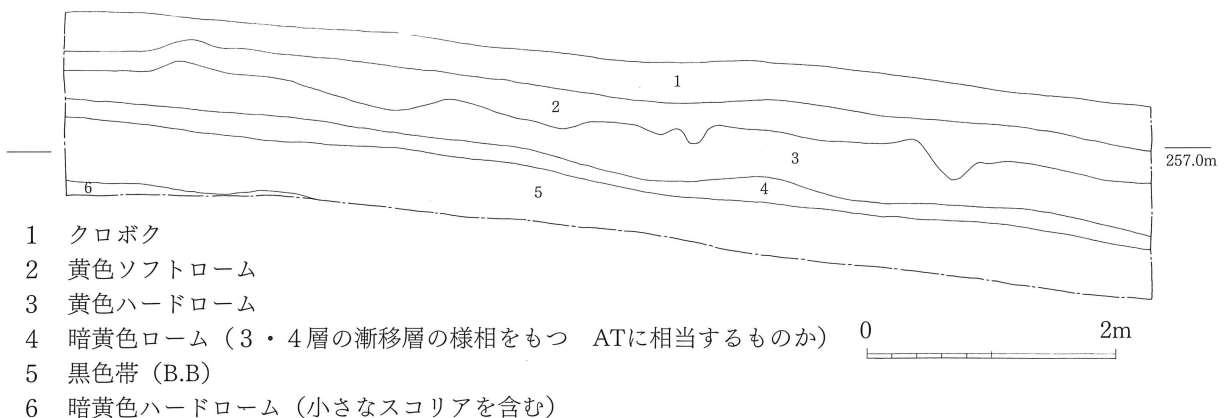
また、黒色帯(B.B)中より、径4～5mの範囲に石核・剥片等が分布するブロックが確認されている。このブロックの中心付近には礫群がみられるが、カーボンおよび礫の赤変は確認できなかった。このほかにもブロック内から叩き石と考えられる川原石が出土しており、当時の最小単位の生活空間をうかがい知る上で非常に貴重な成果が得られた。

発掘調査は、平成15年8月から平成16年10月まで2ヶ月間、実施した。

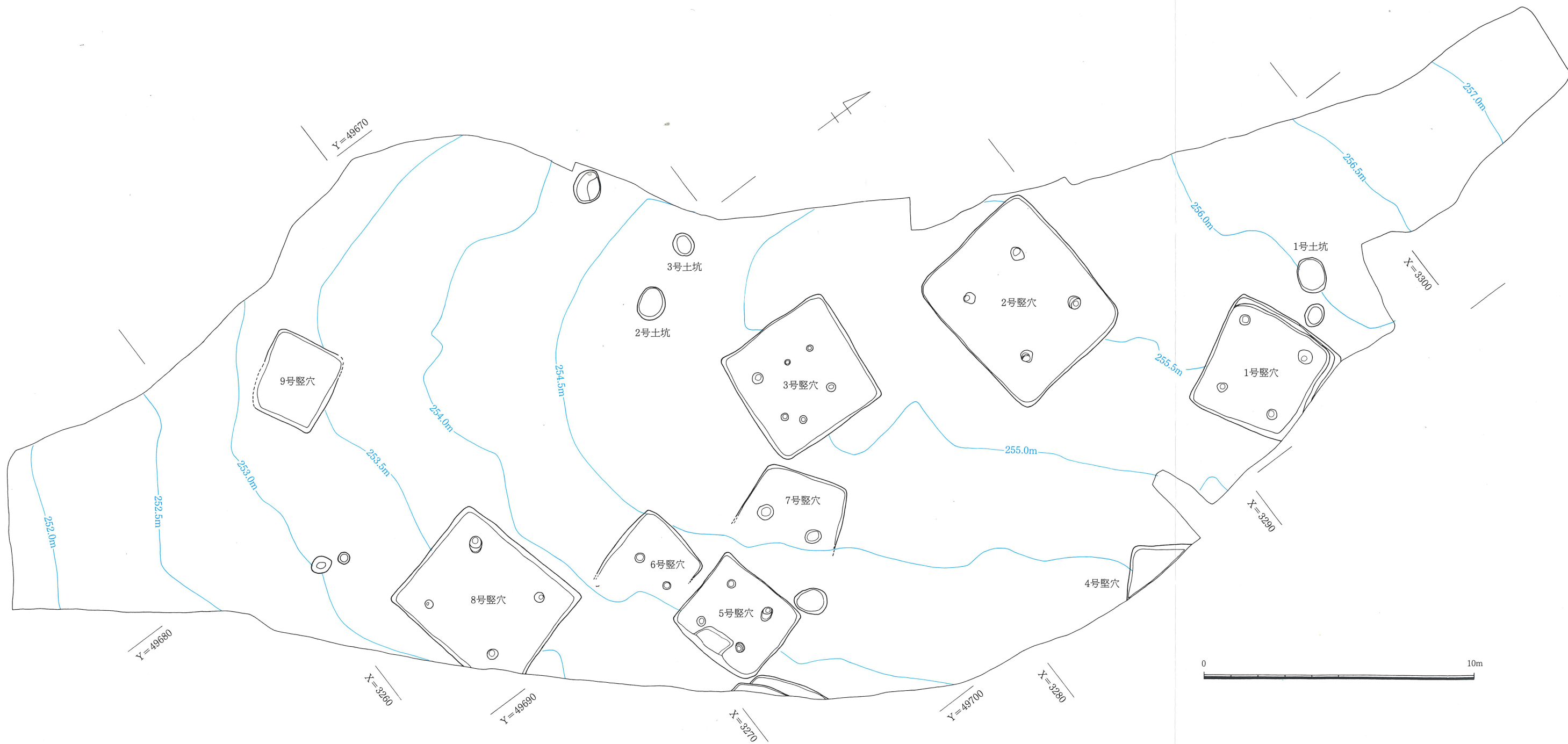
第2節 遺構と遺物

旧石器ブロック (第38図)

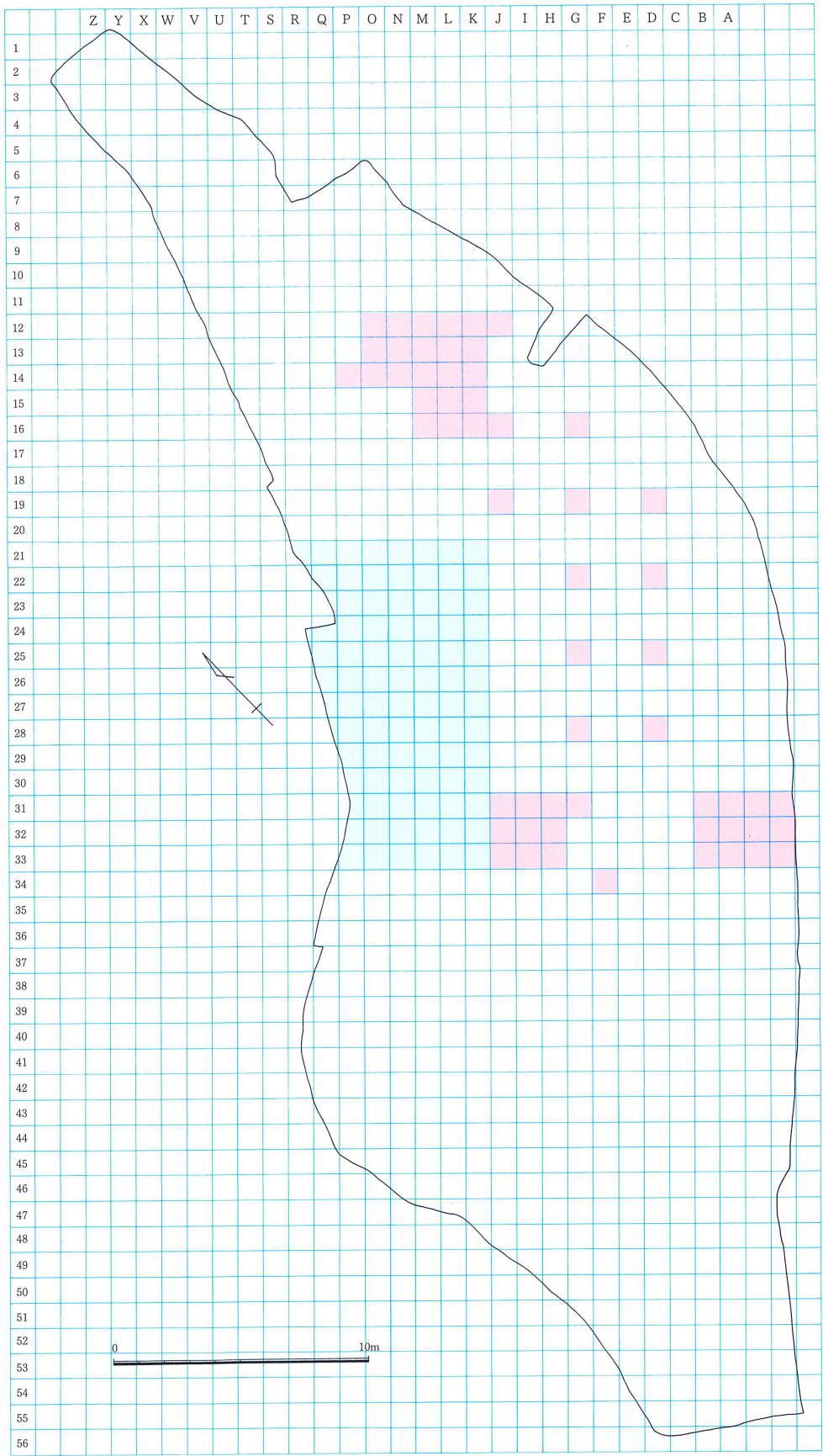
本遺跡の基本層序として、第35図に示したように表土のクロボク層が確認できる。本遺跡では大野川中流域の台地上に一般的に確認できるクロボク層間のアカホヤ(Ah)層がみられず、調査区が台地上に存在する丘陵頂部付近の緩斜面に位置するため、浸食作用により失われたことが想定でき、堆積作用よりはむしろ浸食が著しいことがわかる。クロボク下には黄色ソフトロームと黄色ハードロームがみられ、その下の始良丹沢火山灰層



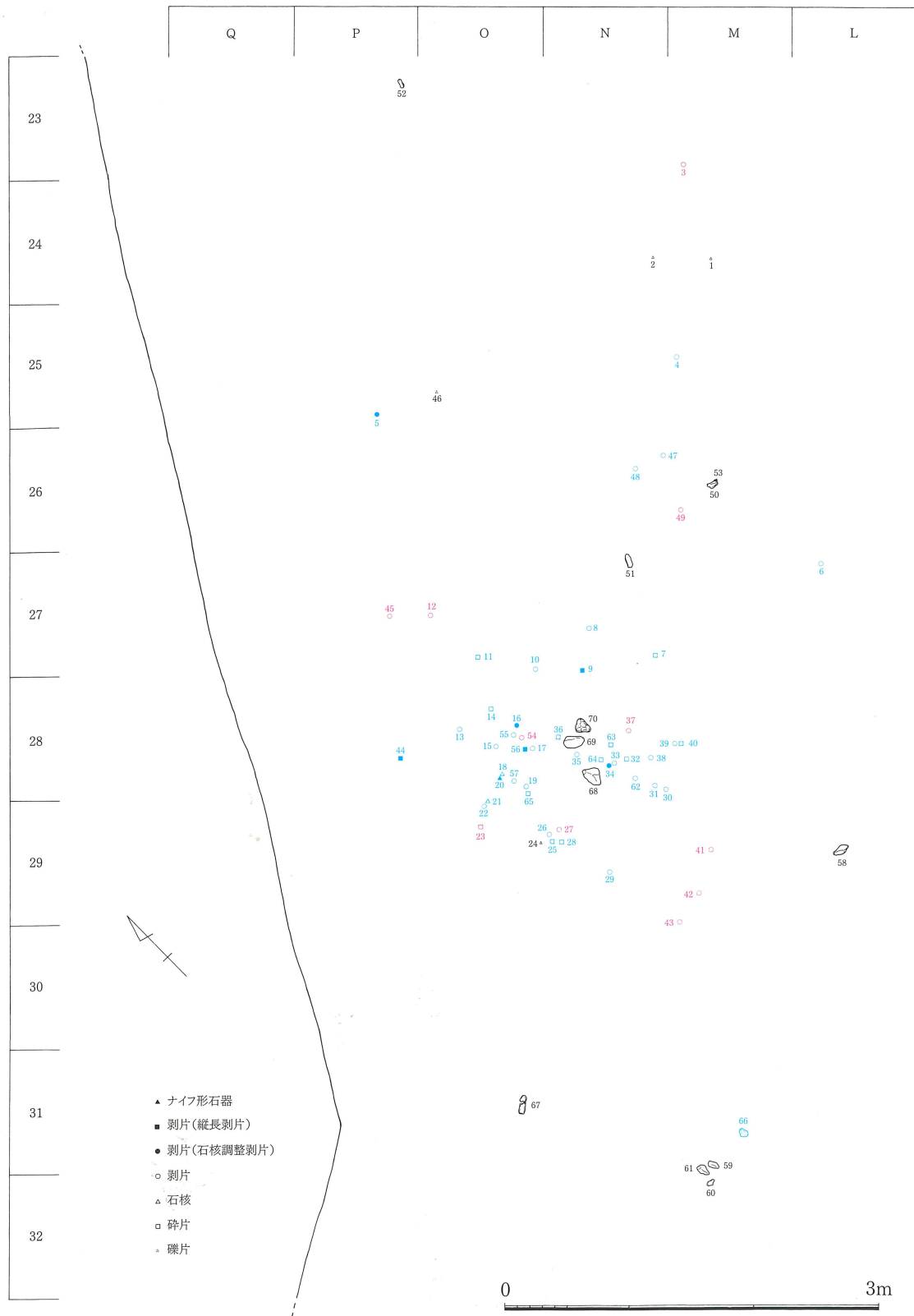
第35図 穴井遺跡調査区北東壁断面図 (1/60)



第36图 穴井遺跡遺構配置図 (1/150)



第37図 穴井遺跡グリッド配置図 (1/250)



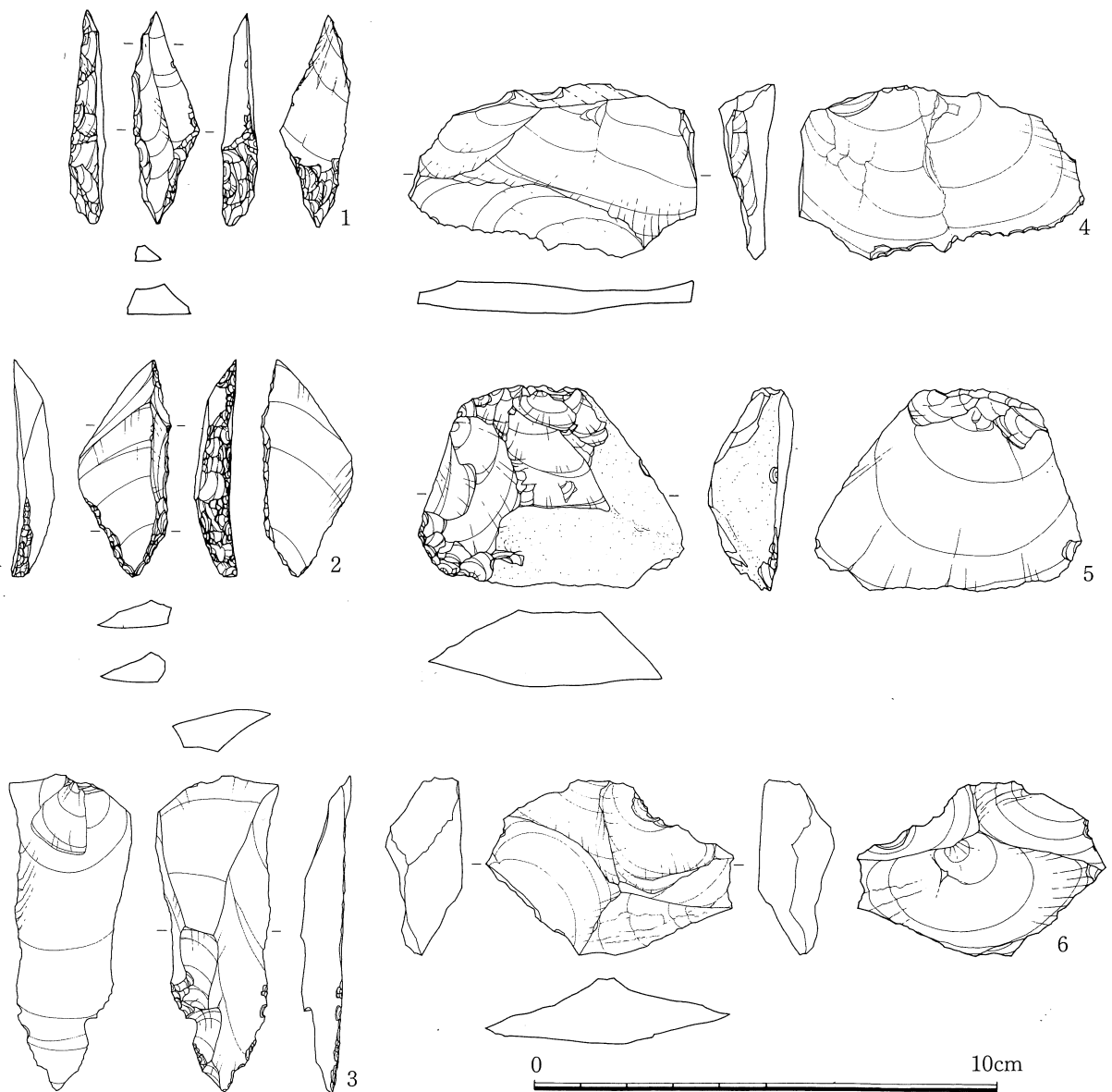
第38図 穴井遺跡石器出土地点分布図（青字は流紋岩、赤字は象ヶ鼻黒曜石 1/50）

表5 穴井遺跡旧石器ブロック石器一覧表

番号	器種	重量 (g)	石材	備考	挿図番号
1	礫片	—	—		
2	礫片	—	—		
3	剥片	2.2	象ヶ鼻黒曜石		
4	剥片	1.6	流紋岩		
5	剥片	39.2	流紋岩	石核調整剥片	第39図-5
6	剥片	1.7	流紋岩		
7	碎片	0.7	流紋岩		
8	剥片	0.8	流紋岩		
9	剥片	12.8	流紋岩	縦長剥片	第40図-3
10	剥片	0.5	流紋岩		
11	碎片	0.8	流紋岩		
12	剥片	1.6	象ヶ鼻黒曜石		
13	剥片	3.9	流紋岩		
14	碎片	1.8	流紋岩		
15	剥片	1.2	流紋岩		
16	剥片	33.5	流紋岩	石核調整剥片	第40図-5
17	剥片	10.1	流紋岩		第41図-4
18	石核	122.8	流紋岩		第42図-1
19	剥片	1.2	流紋岩		
20	ナイフ形石器	4.6	流紋岩		第39図-2
21	石核	175.1	流紋岩		第42図-2
22	剥片	23.6	流紋岩		第41図-6
23	碎片	1.1	象ヶ鼻黒曜石		
24	礫片	—	—		
25	碎片	0.1	流紋岩		
26	剥片	1.4	流紋岩		
27	剥片	1.5	象ヶ鼻黒曜石		
28	碎片	3.0	流紋岩		
29	剥片	2.1	流紋岩		
30	剥片	0.9	流紋岩		
31	剥片	1.1	流紋岩		
32	碎片	1.8	流紋岩		
33	剥片	0.7	流紋岩		
34	剥片	30.4	流紋岩	石核調整剥片	第40図-4
35	剥片	10.6	流紋岩		第41図-2
36	碎片	1.7	流紋岩		
37	剥片	5.5	象ヶ鼻黒曜石		
38	剥片	2.2	流紋岩		
39	剥片	0.7	流紋岩		
40	碎片	0.3	流紋岩		
41	剥片	4.9	象ヶ鼻黒曜石		
42	剥片	1.6	象ヶ鼻黒曜石		
43	剥片	4.3	象ヶ鼻黒曜石		
44	剥片	28.4	流紋岩	縦長剥片 使用痕あり	第40図-1
45	剥片	33.3	象ヶ鼻黒曜石		
46	礫片	—	—		
47	剥片	2.8	流紋岩		
48	剥片	8.1	流紋岩		
49	剥片	10.4	象ヶ鼻黒曜石		
50	礫	335.3	安山岩	川原石	
51	礫片	—	—		
52	敲石?	314.1	安山岩	川原石	第43図-2
53	礫片	—	—		
54	碎片	0.1	象ヶ鼻黒曜石		
55	剥片	3.6	流紋岩		
56	剥片	22.2	流紋岩	縦長剥片 使用痕あり	第39図-4
57	剥片	1.4	流紋岩		
58	—	—	—		
59	—	—	—		
60	—	—	—		
61	—	—	—		
62	剥片	4.2	流紋岩		
63	碎片	0.7	流紋岩		
64	碎片	0.1	流紋岩		
65	碎片	0.3	流紋岩		
66	礫	201.5	流紋岩		第43図-3
67	敲石	473.7	安山岩		第43図-1
68	—	—	—		
69	—	—	—		
70	—	—	—		

表6 穴井遺跡旧石器ブロック石器データー

		ナイフ形石器	石核	剥片				破片	敲石	合計
				石核調整剥片	縦長剥片	その他の剥片	合計			
流紋岩	個体数	1	2	3	3	22	28	11	0	42
	合計重量 (g)	4.6	297.9	103.1	63.4	84.4	250.9	11.3	0	564.7
象ヶ鼻黒曜石	個体数	0	0	0	0	9	9	2	0	11
	合計重量 (g)	0	0	0	0	65.3	65.3	1.2	0	66.5
安山岩	個体数	0	0	0	0	0	0	0	2	2
	合計重量 (g)	0	0	0	0	0	0	0	787.8	787.8



第39図 穴井遺跡出土石器実測図① (2/3)

(A T)に相当すると考えられる厚さ10~20cmの暗黄色ローム層をはさみ、厚さ50cm程度の黒色帯 (B.B) がみられる。さらに、黒色帯下には小さいスコリアを含む暗黄色ハードロームが確認できたが、本遺跡での発掘調査による掘り下げ作業はこの層までとめた。一般的に大野川中流域の台地上に展開する基本層序が本遺跡でも確認できたわけだが、本遺跡の場合、その堆積は安定している。

本遺跡で旧石器ブロックが確認できたのは黒色帯中であり、原位置をほぼ留める一括性の高い石器群であるものと考えられるため、ブロック設定を行ったが、このブロック外にも漸移的にその分布は広がる。特に、調査区外西側には集中部にあたる範囲が広がっているものと考えられる。このブロックの南側および東側では丘陵斜面であるため黒色帯 (B.B) が失われており、このブロックが本来の範囲であったかどうかについては明らかではない。ただ、北側に関しては、試掘トレンチで確認した結果、遺物の広がりには確認できなかった。なお、ここで設定したブロックは当時の生活単位を意識したものではなく、単発で散在する範囲が広がるため、あくまでも物理的に集中部を意識した範囲であることを断っておきたい。

このブロック中から確認できた石器の総数は57点であるが、それぞれ石材別の出土地点を第38図に示した。密集する範囲の中心にあたる場所に20cm内外の大きさの礫が3点 (第38図68・69・70) 存在する。特に第38図70は被熱により赤変し、表面がはじけて剥離している。この礫を中心に流紋岩・象ヶ鼻黒曜石の石器が分布する。流紋岩の場合、ナイフ形石器が1点 (第38図20)、石核が2点 (第38図18・21) ブロックの中心部から出土しているほか、やや広がりをもち縦長剥片・石核調整剥片が出土している。一方、象ヶ鼻黒曜石は、剥片・破片が、流紋岩の剥片・破片の分布圏に重なり出土しているが、総数11点であり、流紋岩の総数の4分の1にみえない。

図化できた出土遺物は第39~43図に示したが、ナイフ形石器・縦長剥片・石核調整剥片・石核・不定形剥片・敲石などがみられる。第39図2は流紋岩製ナイフ形石器である。第42図1・2は流紋岩の石核であり、第39図5、第40図5は流紋岩の石核調整剥片である。第39図4、第40図1・3は流紋岩の縦長剥片であり、第39図4、第40図1には使用痕が認められる。破片と剥片は2cmの大きさを境に分類したが、第41図2・6は流紋岩の剥片である。第43図1・2は安山岩の川原石を利用した敲石であろうか。両端にわずかに敲打によると思われる剥離がみられる。第43図3は流紋岩の礫である。自然石であるが、中央に自然の風化によると考えられる孔が確認できる。

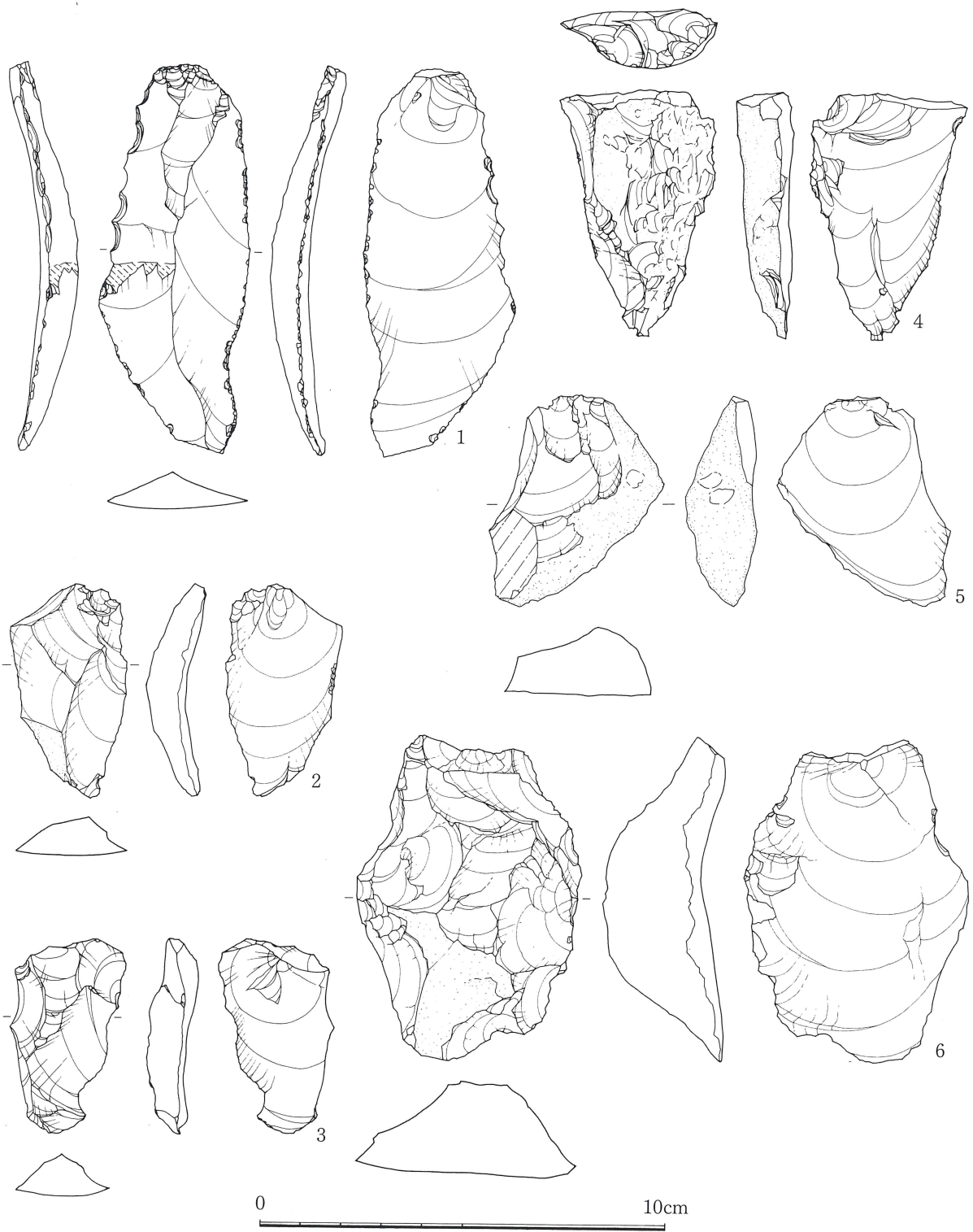
その他の石器

第38図に示した石器ブロックの南側の調査区は、地形の傾斜により5層である黒色帯 (B.B) が流れており、黒色帯 (B.B) より上層が残る北側の調査区に1m四方の試掘グリッドを設定して調査を進め、石器出土地点の周囲を拡張して掘り下げた。しかし、石器の出土は単発であり、ブロック状態では確認できなかった。しかも、2~4層から出土しており、第38図に示した石器ブロックに関連するものではないように思える。

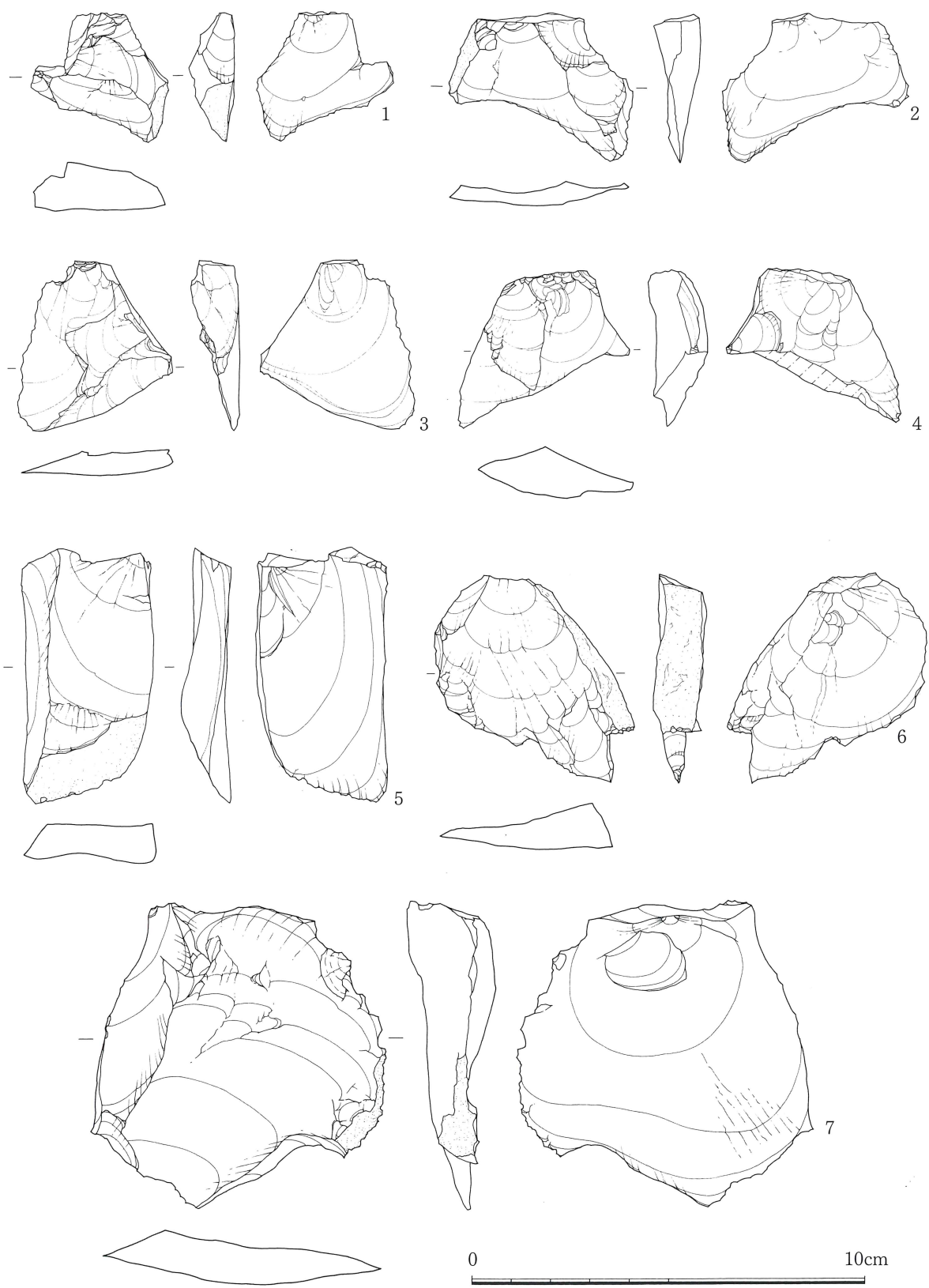
図化できた出土遺物は第39~41図に示した。第39図3は流紋岩製ナイフ形石器の未成品であり、G-19区2層から出土したものである。第40図2は流紋岩の縦長剥片であり、N-14区4層から出土したものである。第40図6は流紋岩の石核調整剥片であり、A-32区5層から出土したものである。

表7 穴井遺跡包含層出土石器一覧

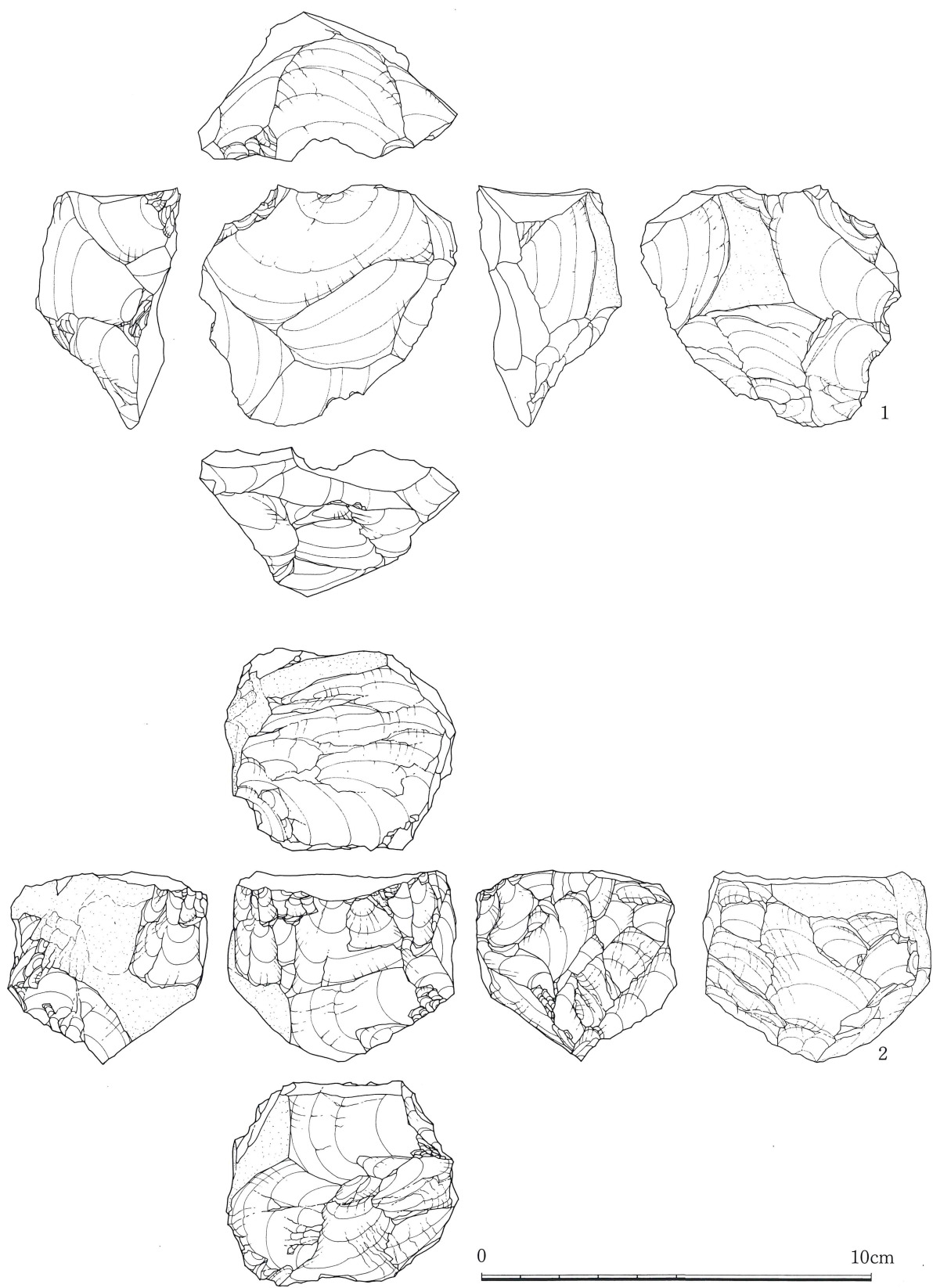
挿図番号	器種	重量 (g)	石材	グリッド	層位	備考
第39図-1	ナイフ形石器	4.6	流紋岩	I-32	4層	
第39図-3	ナイフ形石器	11.8	流紋岩	G-19	2層	未製品
第39図-6	剥片	22.3	流紋岩	L-14	4層	
第40図-2	剥片	13.7	流紋岩	N-14	4層	縦長剥片
第40図-6	剥片	101.1	流紋岩	A-32	5層	石核調整剥片
第41図-1	剥片	10.1	象ヶ鼻黒曜石	不明	2層	
第41図-3	剥片	11.2	流紋岩	不明	不明	
第41図-5	剥片	26.3	流紋岩	不明	不明	
第41図-7	剥片	75.2	流紋岩	B~E-34~36	1~5層	



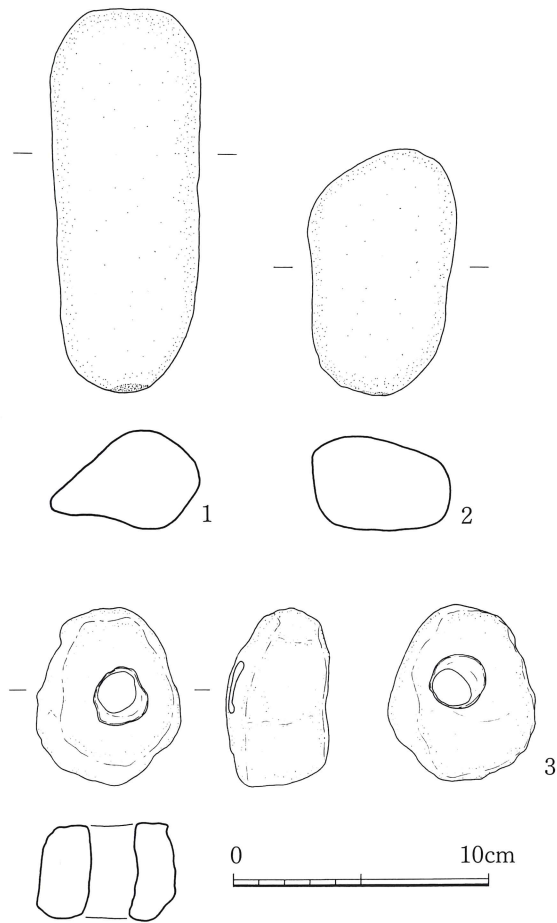
第40图 穴井遺跡出土石器実測图② (2/3)



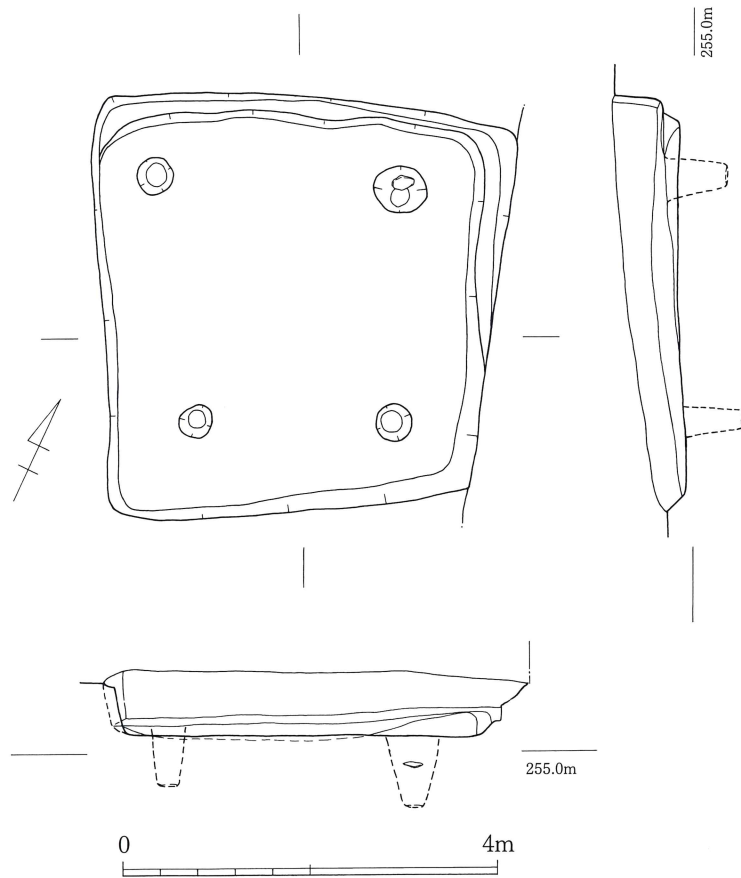
第41图 穴井遺跡出土石器実測图③ (2/3)



第42图 穴井遺跡出土石器実測図④ (2/3)



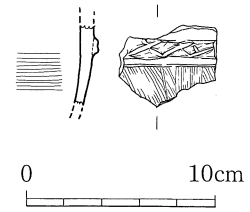
第43图 穴井遺跡出土石器実測図⑤ (1/3)



1号竖穴 (第44图)

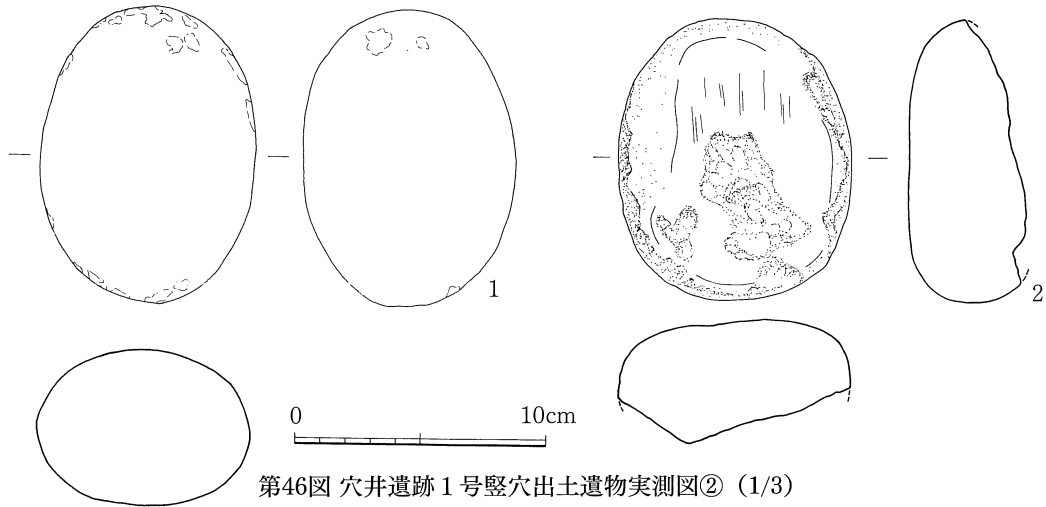
第44图 穴井遺跡1号竖穴实测图 (1/80)

調査区の北東端において確認された方形竪穴住居である。残存する深さは70cm程度であり、遺構の南側部分が地形の傾斜により削平を受けている。一辺4.4mの隅丸方形を呈すると思われるが、東辺は調査区の壁と接する。北壁及び東壁の中位で10cmの段差がみられ、拡張した結果のものと考えられよう。主柱穴は4本確認でき、比較的各隅に近く配置されており、柱穴間は広い空間をもつ。

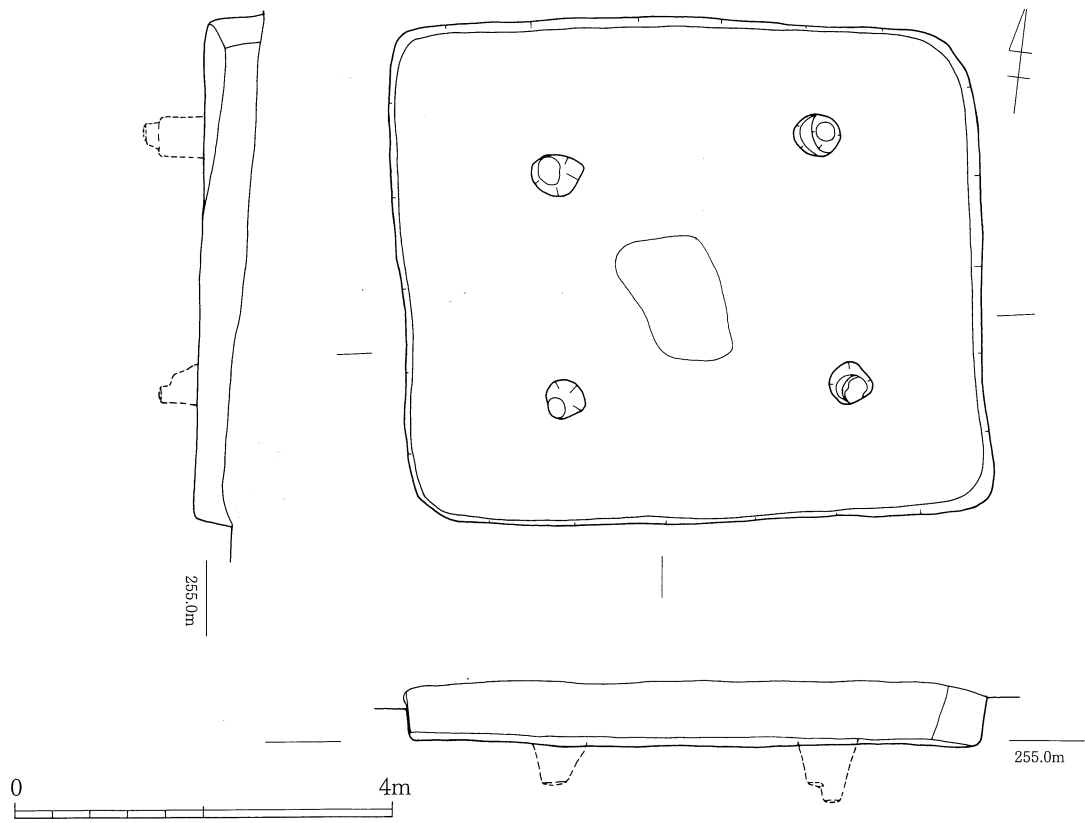


第45図 穴井遺跡1号竪穴
出土遺物実測図① (1/4)

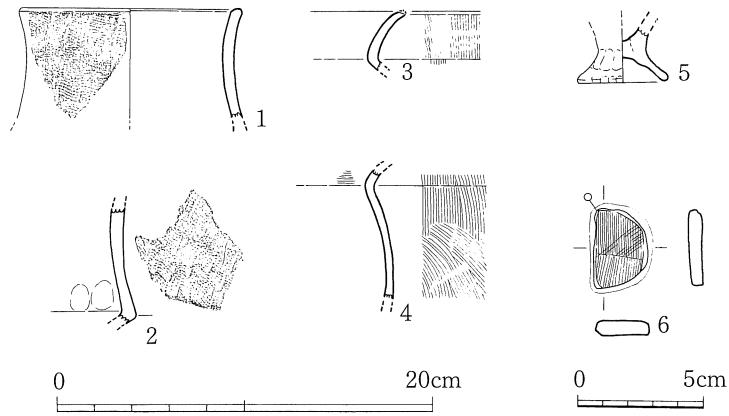
出土遺物はきわめて乏しく、図化しえたものは第45・46図に示した。第45図は壺の胴部最大径付近に廻る扁平なベルト状の突帯であり、表面にはヘラ状工具により格子目を刻んでいる。第46図1・2は川原石を利用した敲石である。



第46図 穴井遺跡1号竪穴出土遺物実測図② (1/3)



第47図 穴井遺跡2号竪穴実測図 (1/80)

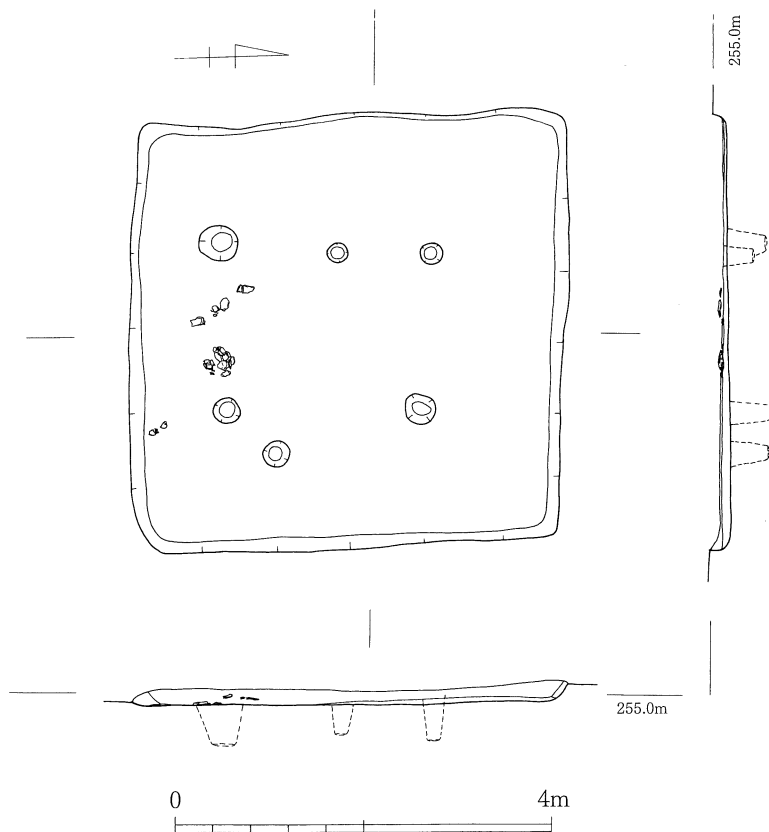


第48図 穴井遺跡 2号竪穴出土遺物実測図 (1/4・1/3)

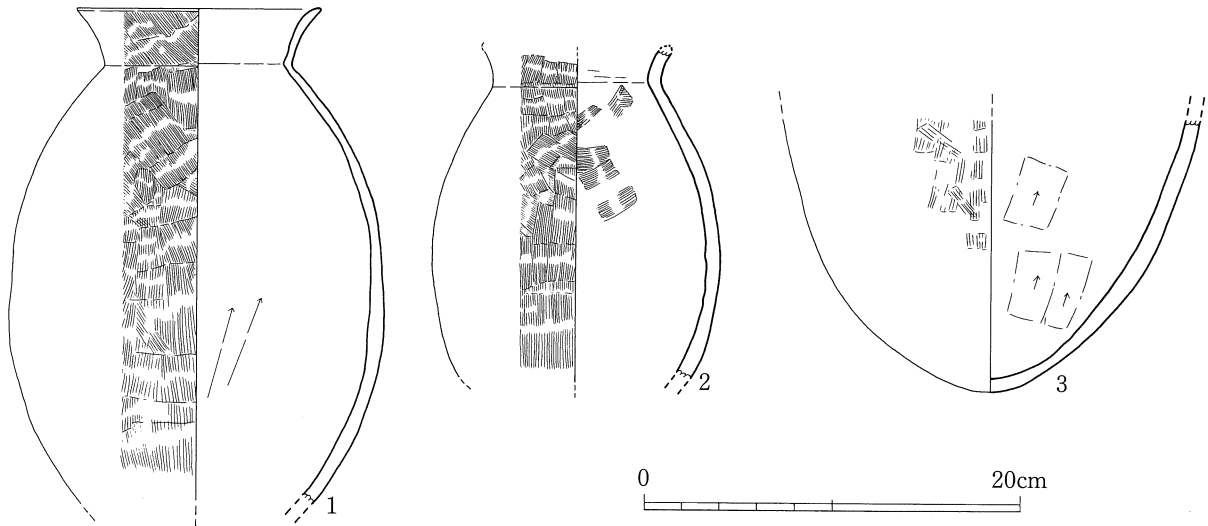
2号竪穴 (第47図)

調査区の中央よりやや北側において確認された東西6.2m、南北5.4mを測る方形竪穴住居である。残存する深さは60cm程度である。支柱穴は4本確認でき、中央部には床面に1.2×1.4mの範囲でわずかに焼土が混じる炭の広がり確認できた。

出土遺物は第48図に示した。1・2は複合口縁壺の破片であり、口縁の立ち上がりは非常に高く、外面に櫛描波状文が施されている。3・4は甕である。5は製塩土器である。6は半月形の土器片加工品であり、周縁を粗く磨いている。



第49図 穴井遺跡 3号竪穴実測図 (1/80)

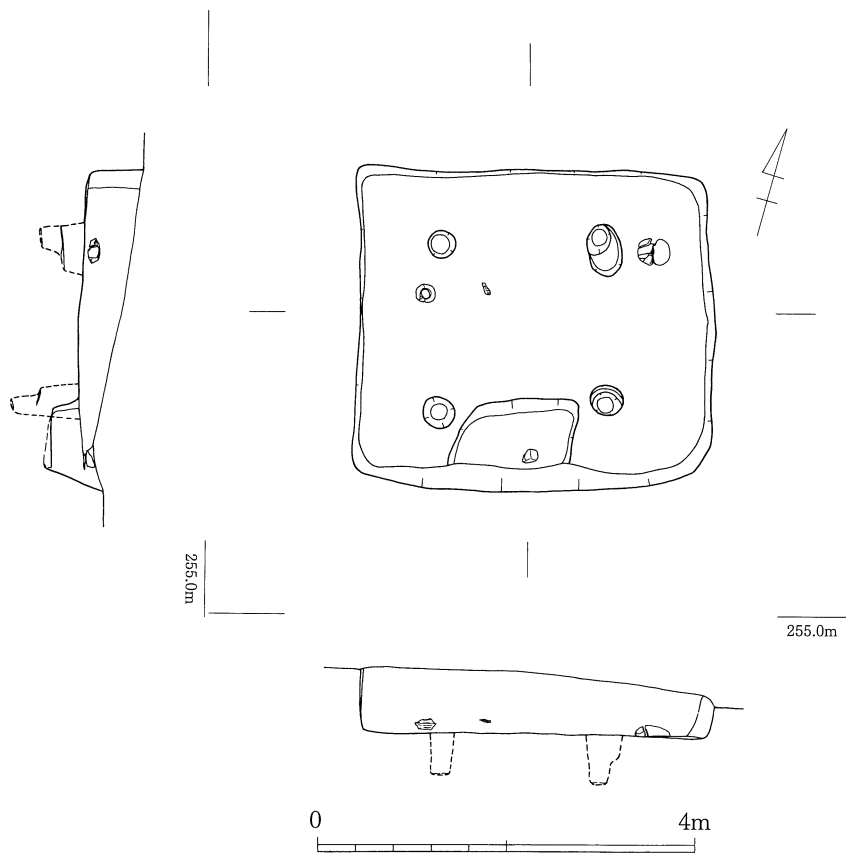


3号竪穴 (第49図)

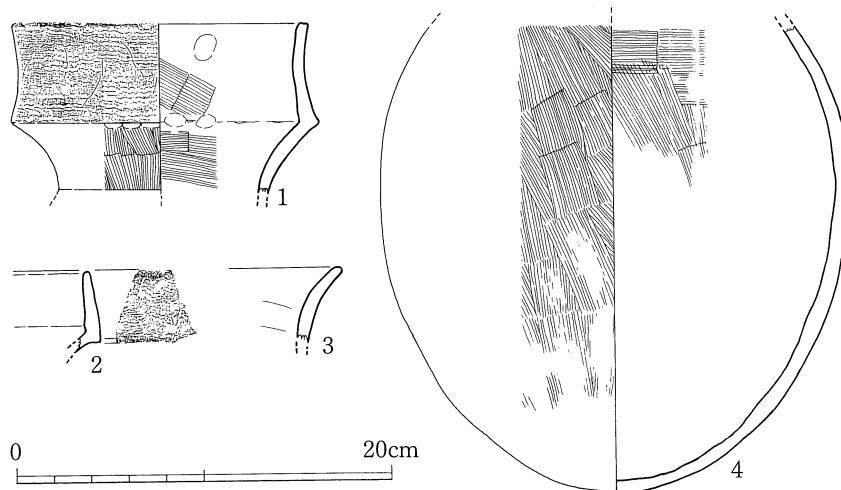
第50図 穴井遺跡 3号竪穴出土遺物実測図 (1/4)

調査区の中央において確認された4.6×4.6mを測る方形竪穴住居であり、残存する深さは20cm程度である。主柱穴は西に3本、東に2本並び、合計5本であるものと考えられる。南側の柱穴間に甕が破碎した状態で床面上に確認できた。床面上にはわずかに炭・焼土がみられる。

出土遺物は第50図に示した。いずれも甕であり、1・2の胴部最大径は中央よりやや下に位置する。3の底部は丸底を呈し、内面をケズリあげている。



第51図 穴井遺跡 5号竪穴実測図 (1/80)



4号竪穴 (第36図)

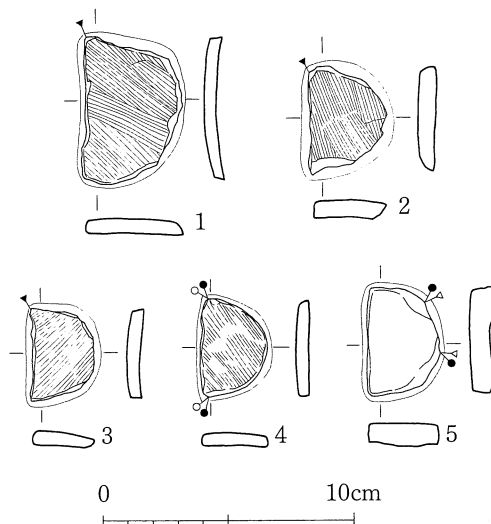
第52図 穴井遺跡 5号竪穴出土遺物実測図① (1/4)

調査区の東端に一部確認できたものであり、隅丸方形を呈することがわかる。しかし、そのほとんどは調査区外に延びており、全貌のほとんどはわからない。また、帰属時期がわかる遺物の出土もみられなかった。

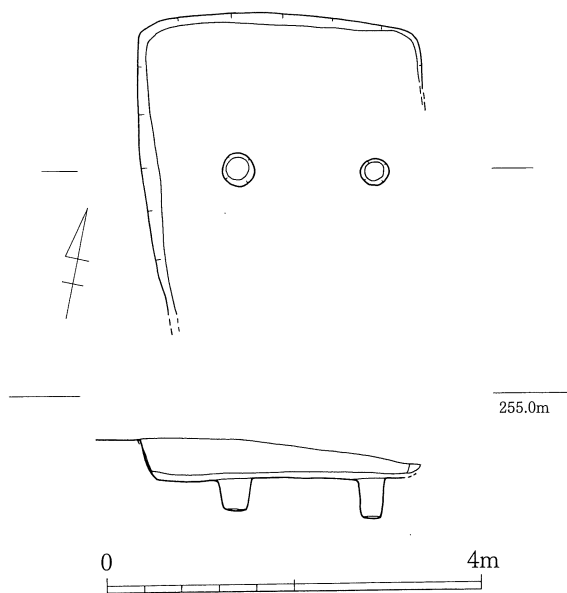
5号竪穴 (第51図)

調査区の中央やや東側において確認された3.8×3.4mの隅丸方形を呈する竪穴住居であり、残存する深さは70cm程度である。支柱穴は4本確認でき、南辺に接して深さ40cm、1.2×0.7mの規模をもつ土坑がみられた。床面上に10cm程度浮いた状態で焼土がいたるところに確認できた。

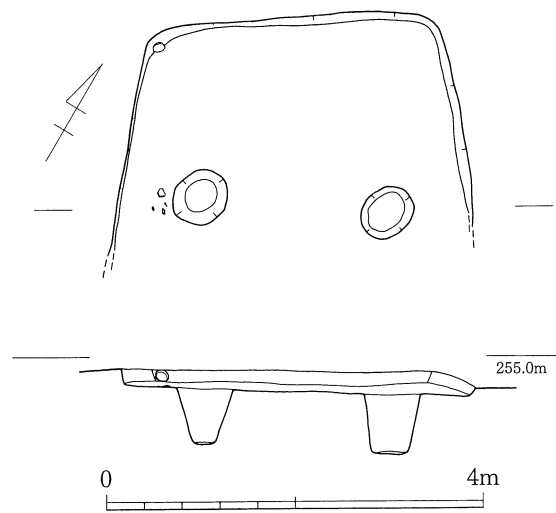
出土遺物は第52・53図に示した。第52図1・2は複合口縁壺の破片であり、口縁の立ち上がりは非常に高く、外面に櫛描波状文が施されている。3・4は甕であり、4の胴部最大径が中央に位置し、丸底を呈する。第53図は半月形の土器片加工品である。



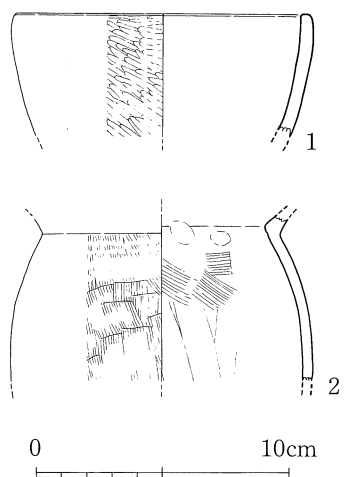
第53図 穴井遺跡 5号竪穴出土遺物実測図② (1/3)



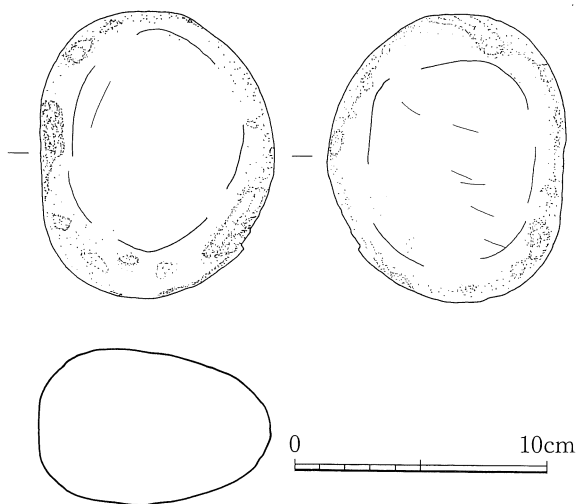
第54図 穴井遺跡 6号竪穴実測図 (1/80)



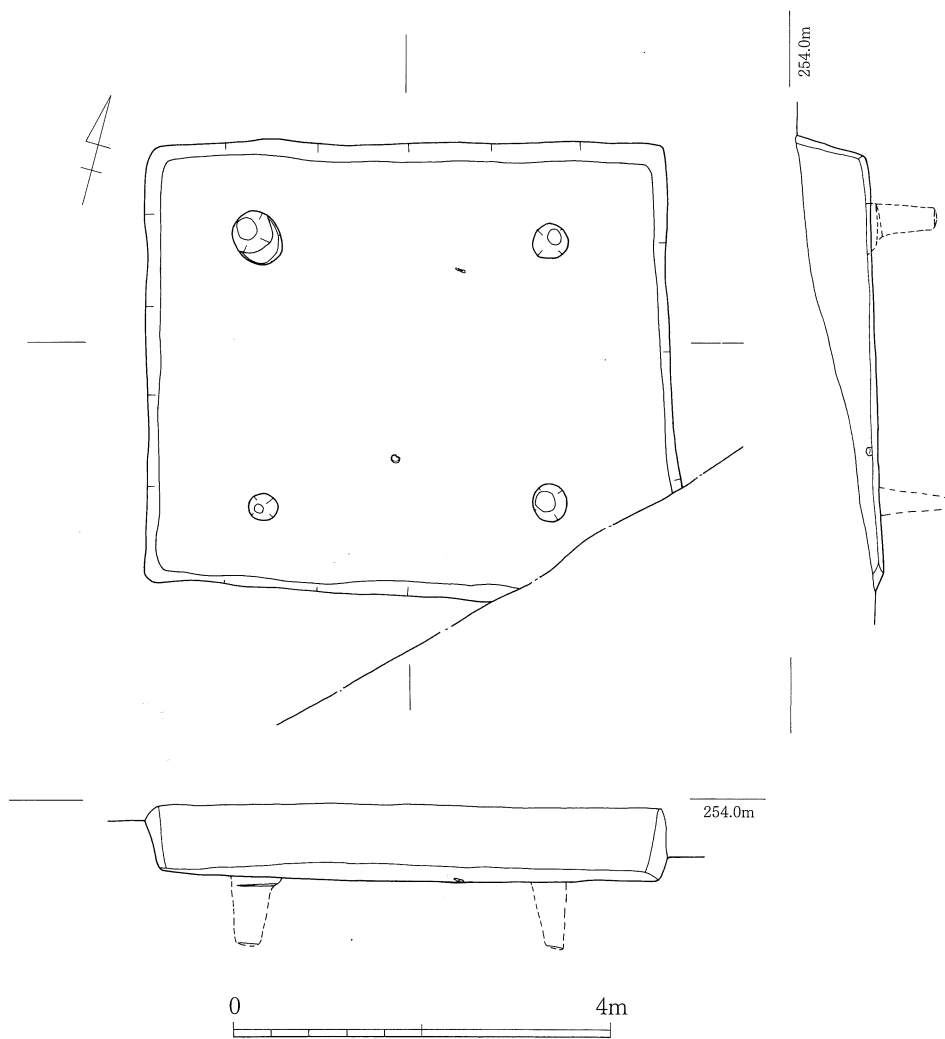
第55図 穴井遺跡 7号竪穴実測図 (1/80)



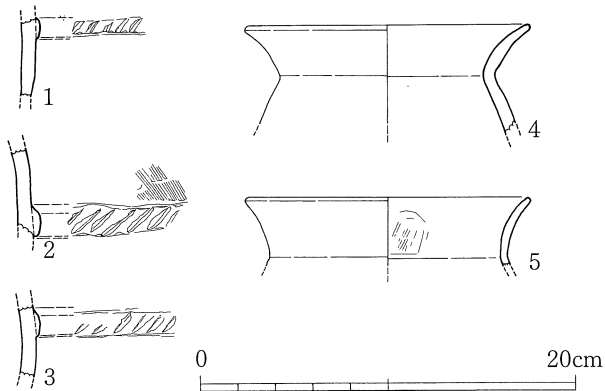
第56図 穴井遺跡 7号竪穴出土遺物実測図① (1/4)



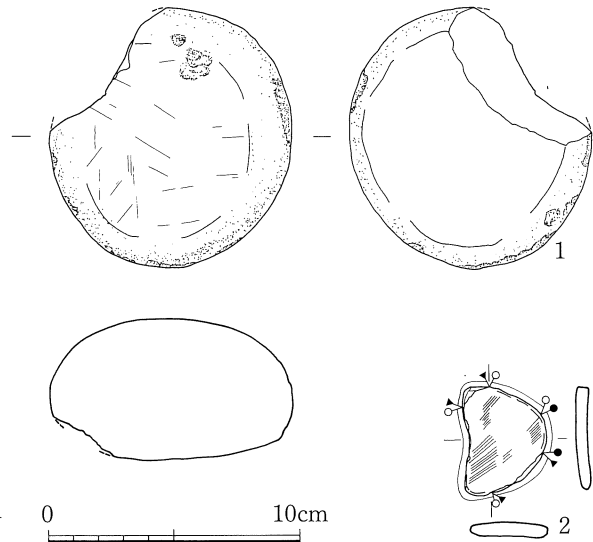
第57図 穴井遺跡 7号竪穴出土遺物実測図② (1/3)



第58図 穴井遺跡 8号竪穴実測図 (1/80)



第59図 穴井遺跡 8号竪穴出土遺物実測図① (1/4)



第60図 穴井遺跡 8号竪穴出土遺物実測図② (1/3)

6号竪穴 (第54図)

調査区の中央やや東側において確認された方形竪穴住居である。残存する深さは40cm程度であり、遺構の南西側部分が地形の傾斜により削平を受けている。東西3.0m、南北3.2m以上を測ることが確認できたが、支柱穴の位置から、南北にはさほど伸びない住居跡であることが想定できる。支柱穴は2本確認できた。出土遺物もほとんどみられず、焼土・炭などの堆積も認められなかった。

7号竪穴 (第55図)

調査区の中央やや東側において確認された方形竪穴住居である。残存する深さは15cm程度であり、遺構の南側部分が地形の傾斜により削平を受けている。東西3.8mを測ることが確認できたが、南側部分が削平されているため、南北の大きさは確定できない。支柱穴の位置から、南北4.0m程度であることが想定できる。支柱穴は2本確認できた。中央部床面に焼土が一部確認できたほか、出土遺物が少量確認できた。

出土遺物は第56・57図に示した。第56図1は鉢であり、外面を丁寧にみがいている。第56図2は甕であり、胴部最大径が中央付近に位置している。第57図は川原石を利用した敲石である。

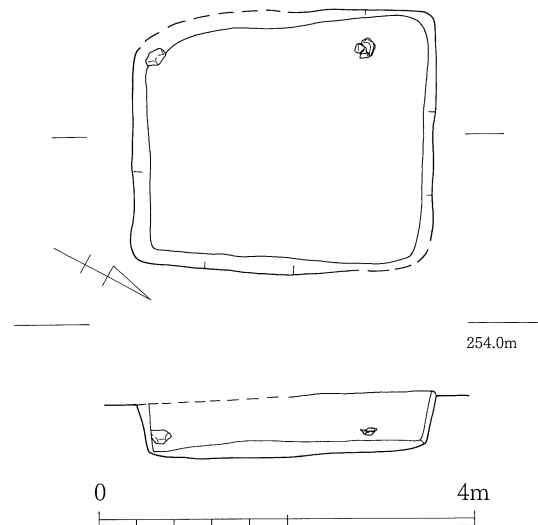
8号竪穴 (第58図)

調査区の南側において確認された方形竪穴住居である。残存する深さは60cm程度であり、遺構の南東端が調査区外に延びる。東西5.6m、南北4.8mを測ることが確認でき、支柱穴は4本である。中央部およびその北側床面に焼土が一部確認できたほか、遺物が少量出土した。

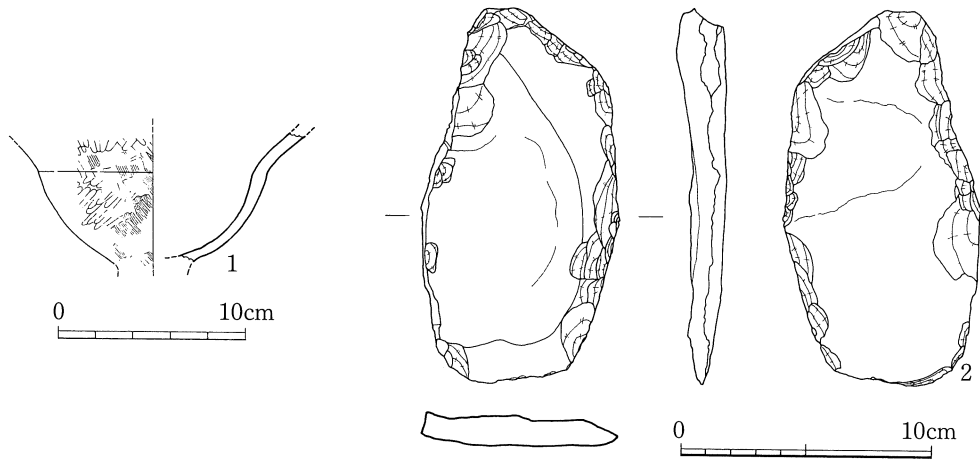
出土遺物は第59・60図に示した。第59図1～3は壺の胴部最大径付近に貼り付けられていたと考えられるベルト状の突帯であり、ナナメの施文がみえる。4・5は甕の口縁である。第60図1は川原石の敲石であり、2は半月形の土器片加工品である。

9号竪穴 (第61図)

調査区の南側において確認された方形竪穴住居である。



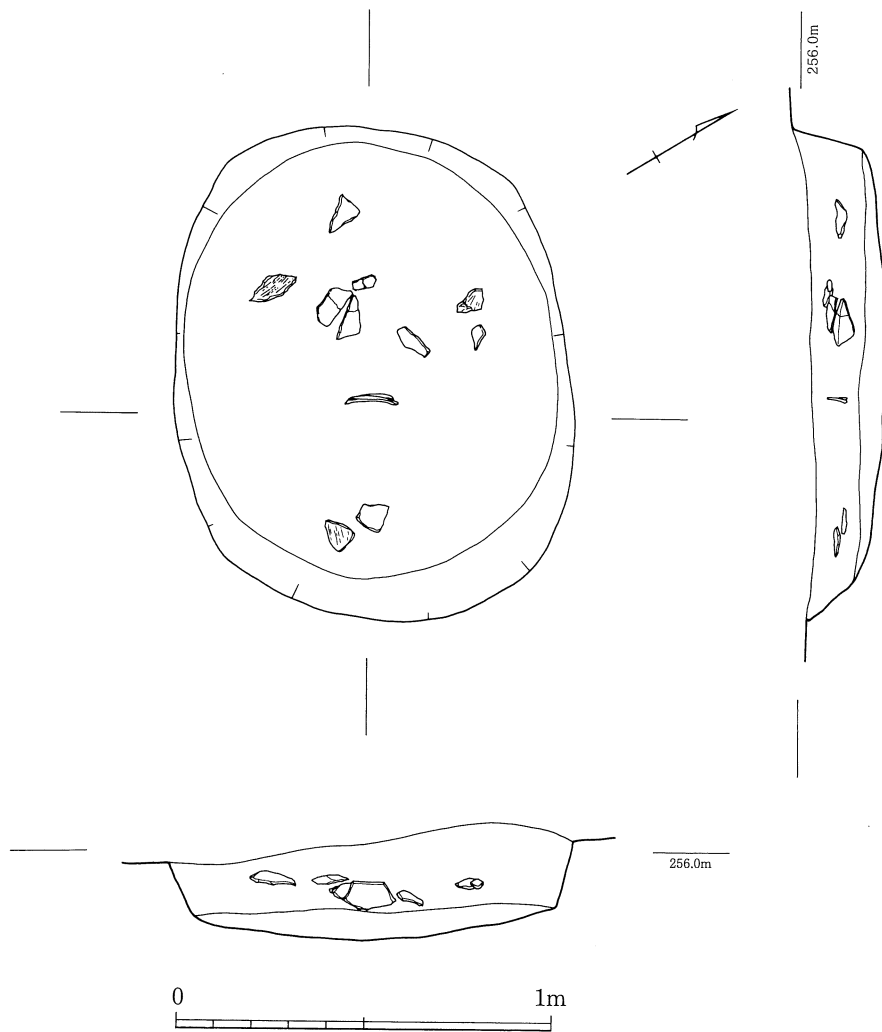
第61図 穴井遺跡 9号竪穴実測図 (1/80)



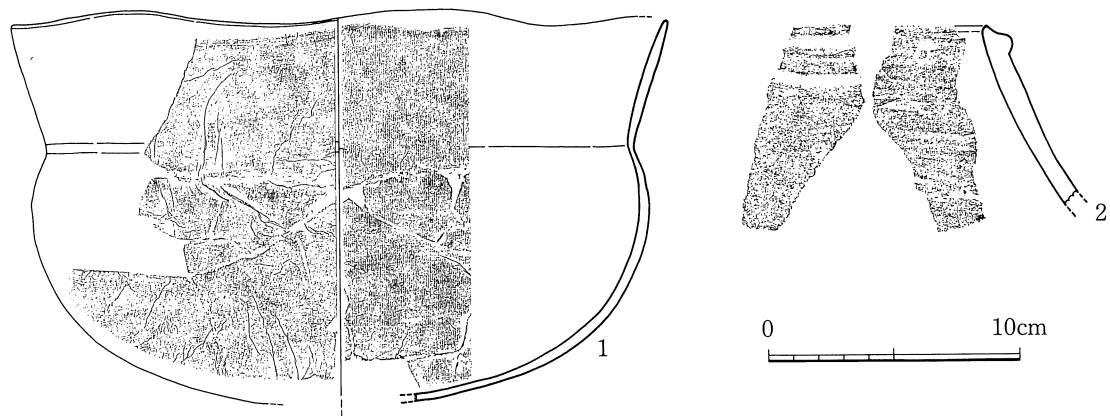
第62図 穴井遺跡9号竪穴出土遺物実測図 (1/4・1/3)

残存する深さは60cm程度であり、東西2.8m、南北3.2mを測り、支柱穴は確認できない。床面上には炭・焼土等は確認できず、遺物が少量出土した。

出土遺物は第62図に示した。1は高坏であり、外面にミガキ及びハケによる調整がみられる。2は扁平打製石器である。



第63図 穴井遺跡1号土坑実測図 (1/20)



第64図 穴井遺跡1号土坑出土遺物実測図① (1/3)

1号土坑 (第63図)

調査区の最も北側にみられる130×105cm、深さ20cmの楕円形土坑である。土坑内から縄文土器片や扁平打製石器の破片と考えられる石片が出土している。出土遺物は第64・65図に示した。第64図1は器壁のひじょうに薄い浅鉢である。口縁を波状にし、内外面を入念に研磨している。2は内傾して口縁に至る深鉢であり、外面に突帯をもつ。

第65図は安山岩製の扁平打製石器である。

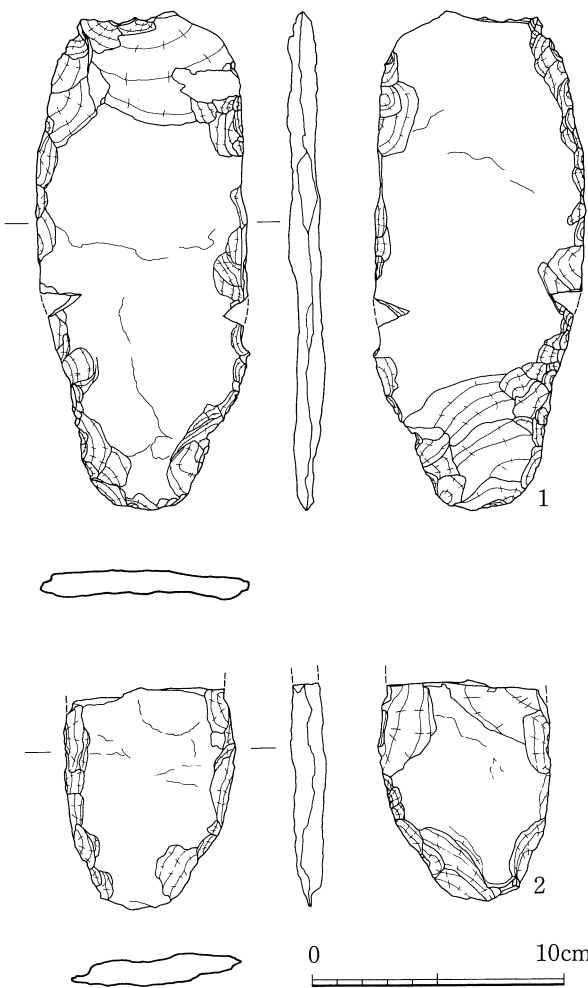
2号土坑 (第66図)

調査区の中央西側にみられる125×100cm、深さ20cmの楕円形土坑である。土坑内から縄文土器片少量が出土している。

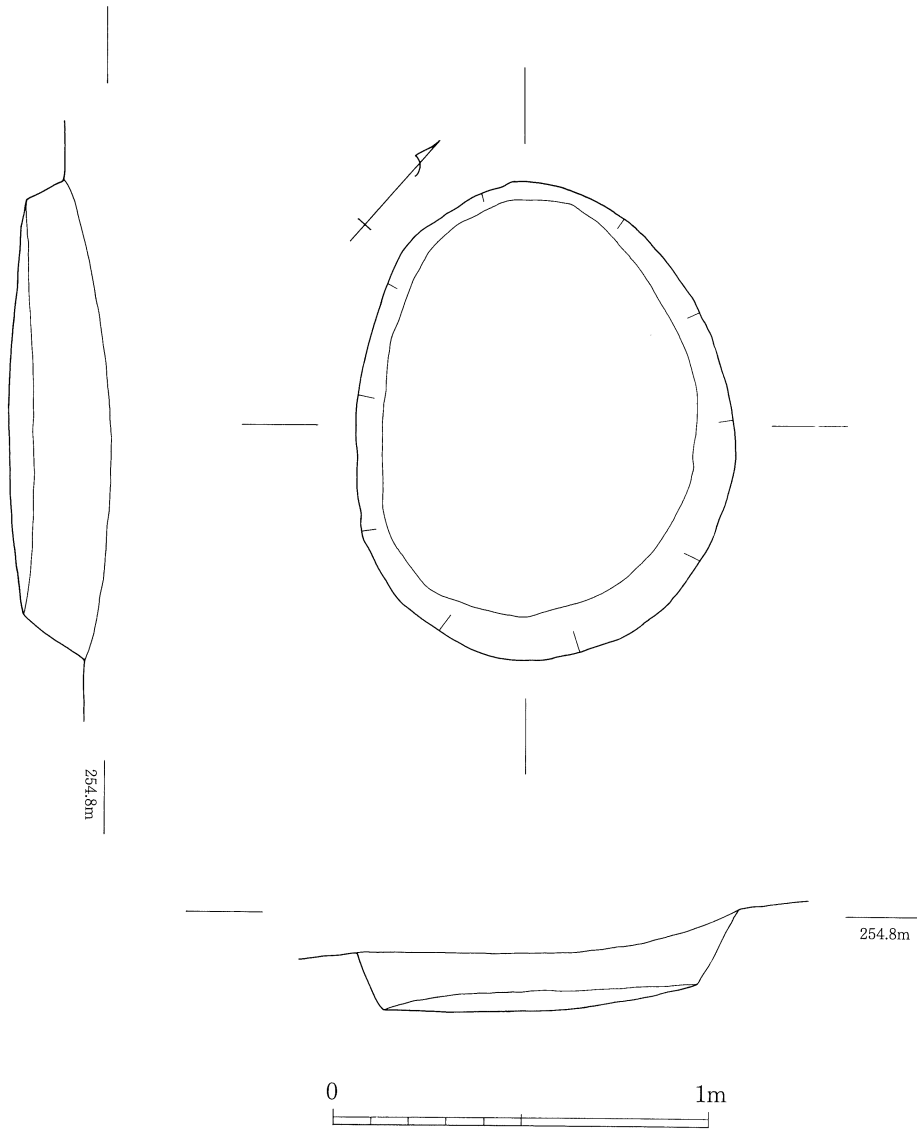
出土遺物は第67図に示した。器壁のひじょうに薄い鉢であり、内外面を入念に研磨している。なお、口縁内面にわずかな沈線を入れている。

包含層 (第35図)

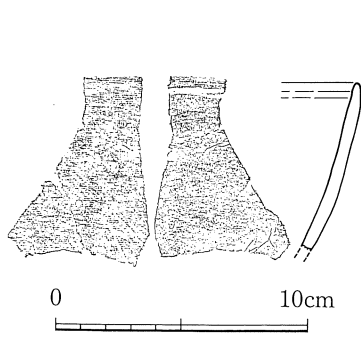
包含層中から出土した遺物は第41・68・69図に示した。第41図は1は象ヶ鼻黒曜石の剥片であり、3・5は流紋岩の剥片である。第69図1・2は川原石を利用した磨石であり、3は扁平打製石器である。



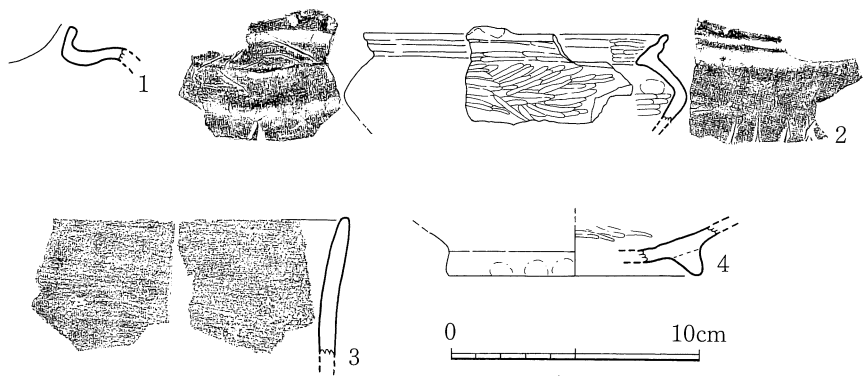
第65図 穴井遺跡1号土坑出土遺物実測図② (1/3)



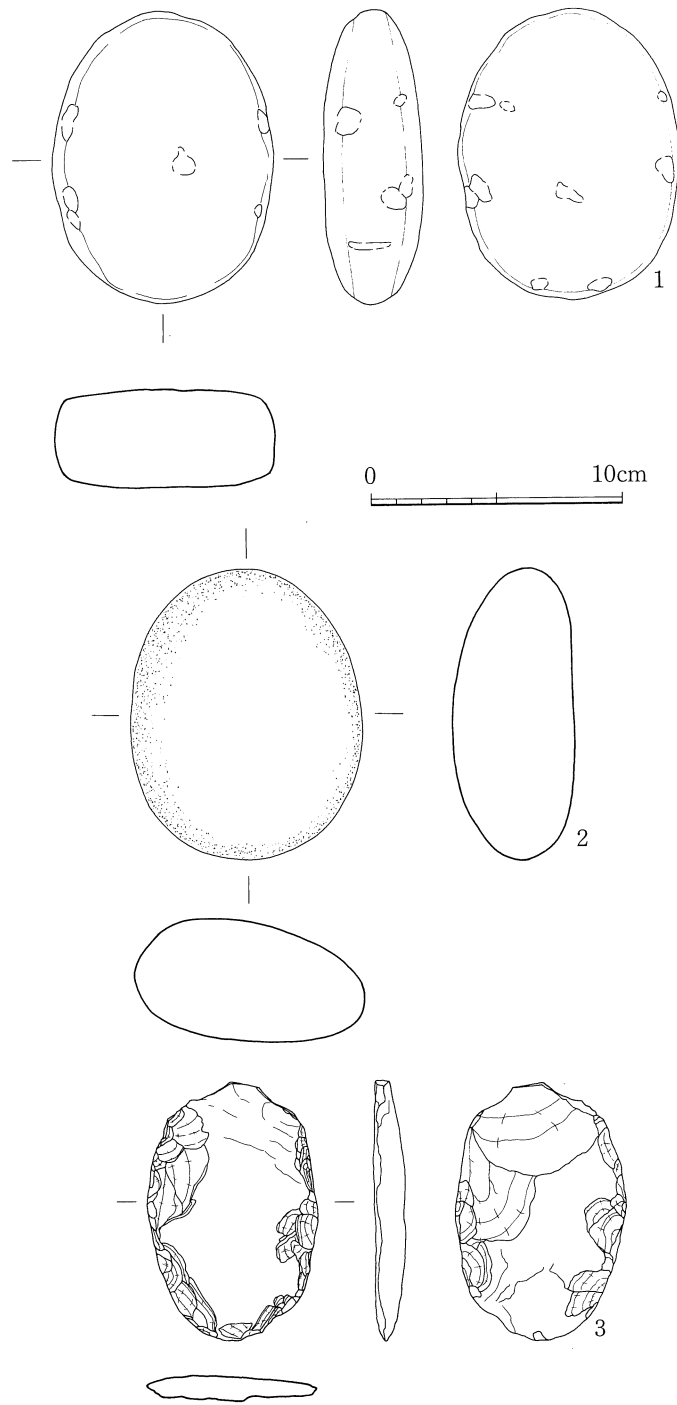
第66图 穴井遺跡 2号土坑実測図 (1/20)



第67图 穴井遺跡 2号土坑出土
遺物実測図 (1/3)



第68图 穴井遺跡出土遺物実測図① (1/3)



第69図 穴井遺跡出土遺物実測図② (1/3)

第3節 まとめ

穴井遺跡からは旧石器時代、縄文時代、弥生時代終末～古墳時代前葉の遺構・遺物群が確認されている。

旧石器時代の文化層として、黒色帯 (B.B) 中より石器ブロックが確認されている。石器が密集する範囲の中心にあたる場所に20cm内外の大きさの礫が3点存在し、その中の1点は被熱により赤変し、表面がはじけて剥離している。この礫を中心に流紋岩・象ヶ鼻黒曜石の石器が分布し、流紋岩の場合、ナイフ形石器が1点、石核が2点ブロックの中心部から出土しているほか、やや広がりをもち縦長剥片・石核調整剥片が出土している。一方、象ヶ鼻黒曜石は、剥片・碎片が、流紋岩の剥片・碎片の分布圏に重なり出土しているが、総数11点であり、流紋岩の総数の4分の1にみえない。このブロック中から出土した石器は、ナイフ形石器・縦長剥片・石核調整剥片・石核・不定形剥片・敲石などがみられる。大野川流域の台地上では、駒方遺跡C地点とともに最も古い時期のものであり注目されよう。

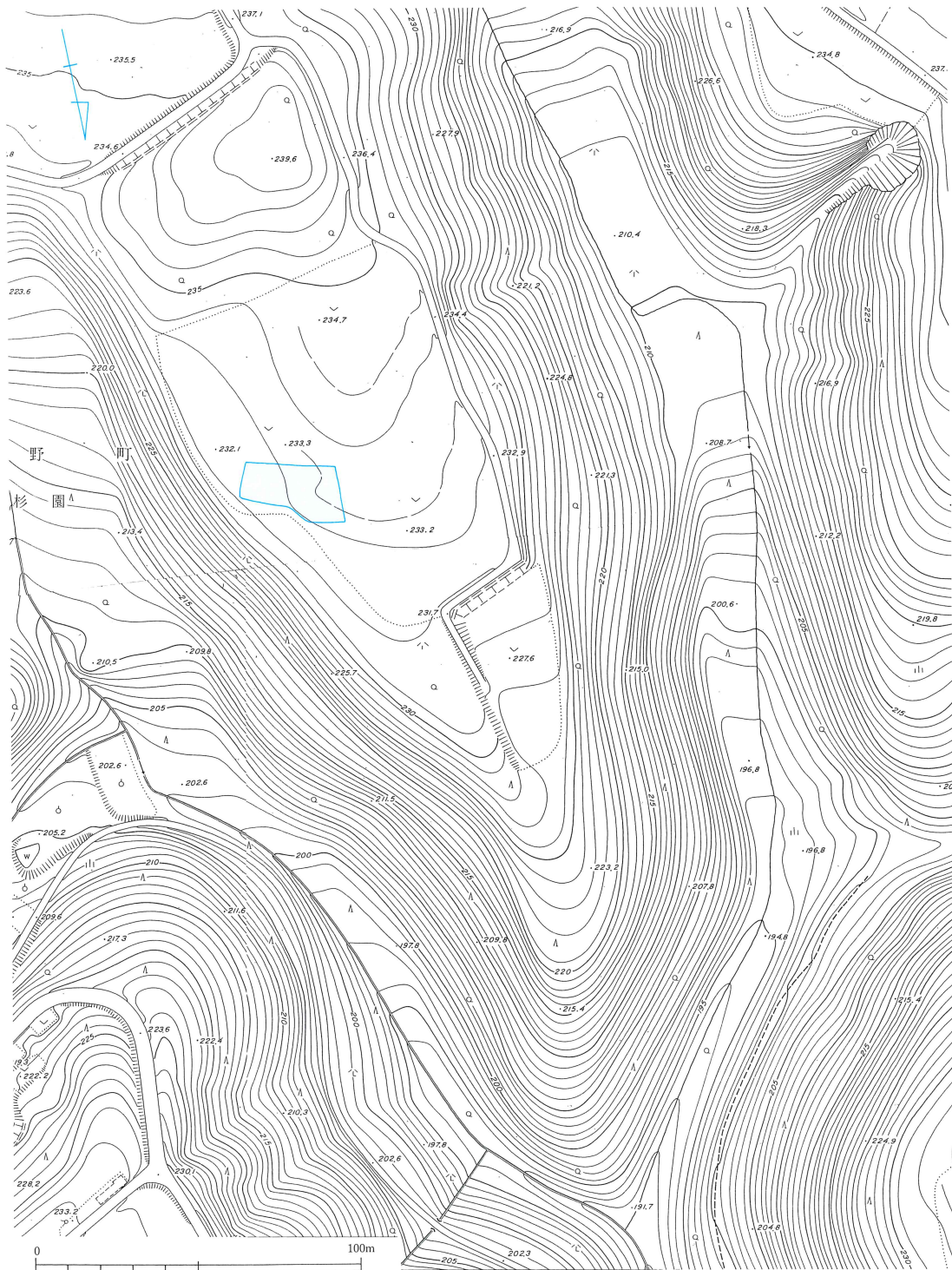
縄文時代の遺構として、確実には2基の楕円形土坑が確認されている。しかし、同規模の同様な楕円形土坑は合計6基存在し、埋土の様相から、これらも同時期の可能性が高いものと考えられる。しかし、縄文時代の遺構はこれらの土坑群のみである。包含層中から出土した縄文時代の出土遺物も乏しく、これらの土坑群がどのような性格をもつものかは今後の検討課題であろう。なお、土坑群中および包含層中出土の縄文土器はいずれも縄文時代晩期中頃の上菅生B式土器併行期の短期間におさまるものである。

また、弥生時代終末～古墳時代前葉の集落跡が確認できた。いずれも方形プランをもつ9棟の竪穴のうち、平面形13㎡以上のものが4～5本柱であり、それ以下のものは2本柱ないし柱穴をもたない。前者は1・2・3・5・8号竪穴の5基、後者は6・7・9号竪穴の3基が確認できた。調査区が狭いため、竪穴群の配置が意味するものは明らかでないが、何らかの機能差を考えるのが自然であろう。ただ、本調査区は遺跡の最高所に旧地形が残る部分にすぎなかった。しかし、本調査区の南側には広大な台地が広がり、周辺の畑地の開墾時に土器を採取したという地元の方々の証言もあり、弥生時代後期～古墳時代前葉に、そこにも集落の広がりが存在することは容易に推測できる。大野川流域の台地上では豊後大野市千歳町高添遺跡群や豊後大野市千歳町鹿道原遺跡のように200棟を超える竪穴をもつ当該期の集落跡が確認されているが、穴井遺跡周辺にもこのクラスの規模をもつ集落が存在していた可能性がある。次章で紹介する穴井南遺跡も同一の台地上に存在し、帰属時期が弥生時代後期後葉～終末であることからしても穴井遺跡の集落は台地全域に広がっていた可能性がある。

第4章 穴井南遺跡の調査

第1節 調査の概要

穴井南遺跡は大分県豊後大野市大野町杉園字萩迫原（旧 大野郡大野町杉園字萩迫原）に所在する。大野川中流域の台地縁辺に位置し、現在は周辺に広大な畑地が広がる。これらの畑地は昭和40年代に開墾されているが、その際に数多くの土器片が出土したと伝えられている。表土除去後に調査区の谷部側である北東部ではクロボク層が確認できるが、台地中央部側の調査区南西側では黒色帯（B.B）が確認できるため、本来は傾斜地に地層が均



第70図 穴井南遺跡調査区位置図（1/2,000）



第71図 穴井南遺跡遺構配置図 (1/200)

質に堆積していたことがうかがえる。畑地化のために水平に造作したため、台地中央部側の遺構群は削平されてしまった可能性が高い。

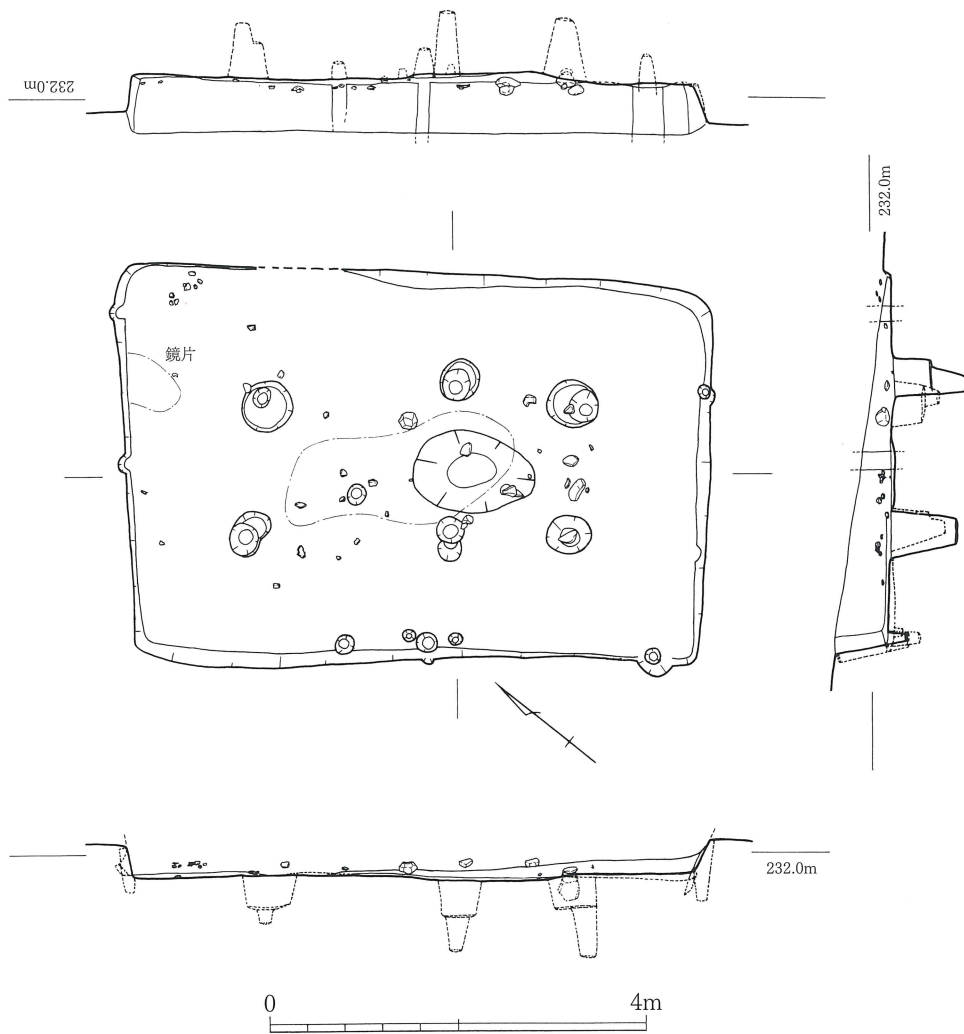
遺跡からは方形プランの竪穴住居跡1棟と床面まで削平された竪穴住居跡のものと考えられるピットが数基検出されているのみである。竪穴住居跡から出土する遺物は少ないが複合口縁壺をはじめとした遺物が出土しており、弥生時代後期後葉～終末の時期におさまるものと考えられる。特に、竪穴住居跡床面上からは鏡片が出土しており、興味深い。

発掘調査は、平成16年2月26日から平成16年3月11日まで2週間、実施した。

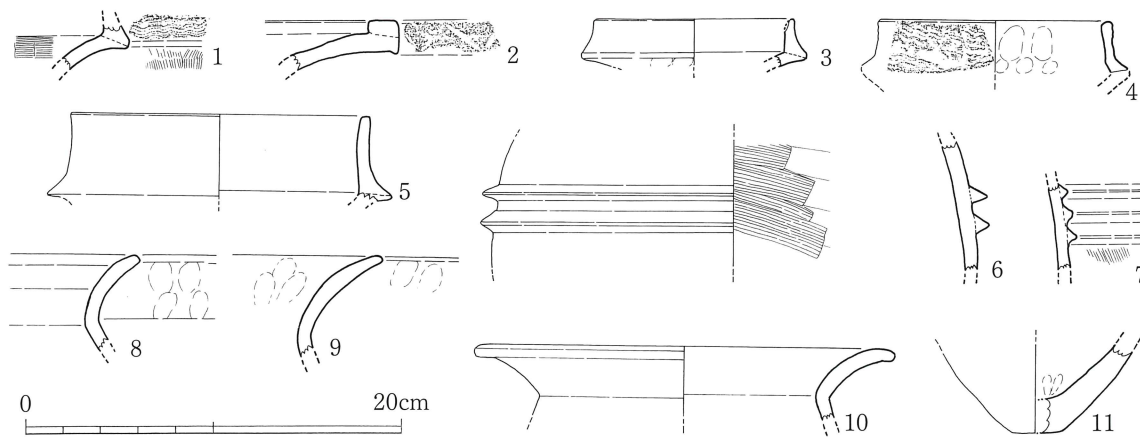
第2節 遺構と遺物

1号竪穴 (第72図)

調査区の中央において確認された長辺6.2m、短辺4.2mを測る方形竪穴住居であり、長辺が等高線に沿っており、残存する深さは谷側が10cm程度、台地中央側が60cm程度と、谷側の削平がいちじるしい。床面はほとんど水平であり支柱穴は6本である。拡張に伴う柱穴配置である可能性もあるが、その詳細は調査で確認できなかった。竪穴住居跡の壁には北西辺に2箇所、南西辺に3箇所、南東辺に2箇所、杭、あるいは細い丸太材を立てたような挟りが、また、床面には小ピットがそれぞれ確認できた。この小ピットは貼り床下にも確認できるため、竪穴住居造作時に設えられたものであることがわかる。中央の柱穴に挟まれた床面が3～4cm程度窪み、炉跡として把握した。この炉跡から中央部にかけて床面上に炭・焼土が集中する箇所がみられる。また、北側壁に沿って、床面上に薄く焼土が堆積して平である。支柱穴は6本と考えられるが、中央の支柱穴2本が南側に寄って



第72図 穴井南遺跡1号竖穴実測図(1/80)

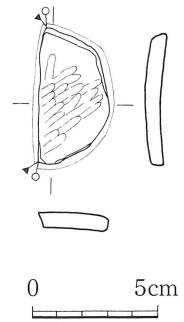


第73図 穴井南遺跡1号竖穴出土遺物実測図①(1/4)

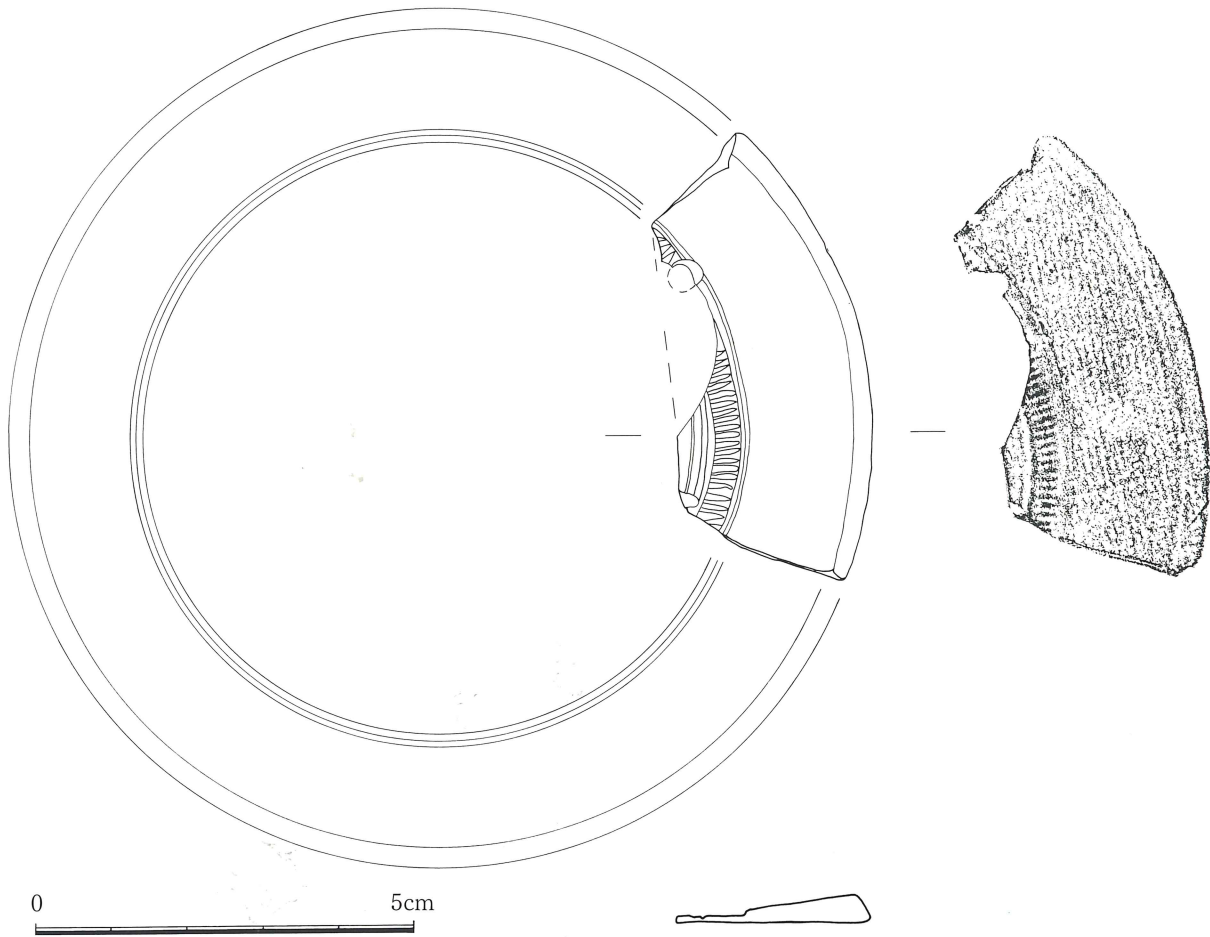
り、バランスが悪い。

遺物は少なく、床面上に土器片や拳大の礫がみられる。なかでも、北側壁に沿って、床面上に薄く焼土が堆積している付近の床面から鏡片が出土しており、興味深い。

出土遺物は第73～75図に示した。第73図1～5は複合口縁壺の破片であり、2は口縁の立ち上がりが低く、口縁外面に鋸歯状の陰刻線が配されている。3は直線的に立ち上がる口縁の外面に櫛描波状文が施されている。6・7は壺胴部最大径付近に廻らされた断面三角形の突帯である。8～10は甕口縁である。11は土器底部であり、小さな平底をもつ。第74図は半月形の土器片加工品である。第75図は復元径11.4cmを測る内行花文鏡の破片である。櫛歯文とその内側に一部雲雷文をあらわす突線がみられる。破損面は擦れており、破片の状態で使用続けられたことがわかる。櫛歯文帯の位置に径3mm程度の円孔が存在していた痕跡がみられるが、さらに破損したせいか、円孔の痕跡が半分だけ残る。なお、表面には櫛歯文や破損面に赤色顔料がわずかに残っている。



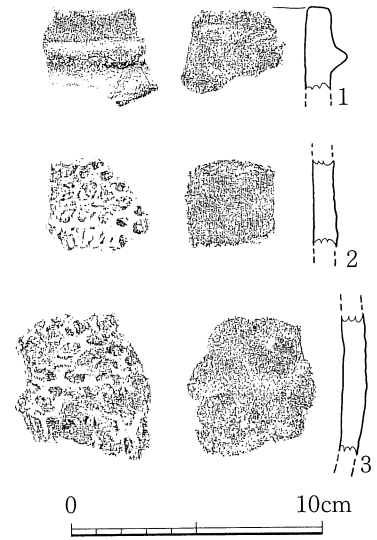
第74図 穴井南遺跡
1号竪穴出土遺物
実測図② (1/3)



第75図 穴井南遺跡 1号竪穴出土遺物実測図③ (1/1)

包含層（第76図）

開墾時に移動された包含層中からの遺物は少なく、竪穴住居が営まれた時期の遺物のほかに縄文土器が出土している。第76図は図化したもので、1は無文土器の口縁に断面三角形の突帯状の突起がつく。2・3には楕円押型文がみられる。



第76図 穴井南遺跡出土遺物実測図（1/3）

第5章 千仏南遺跡の調査

第1節 調査の概要

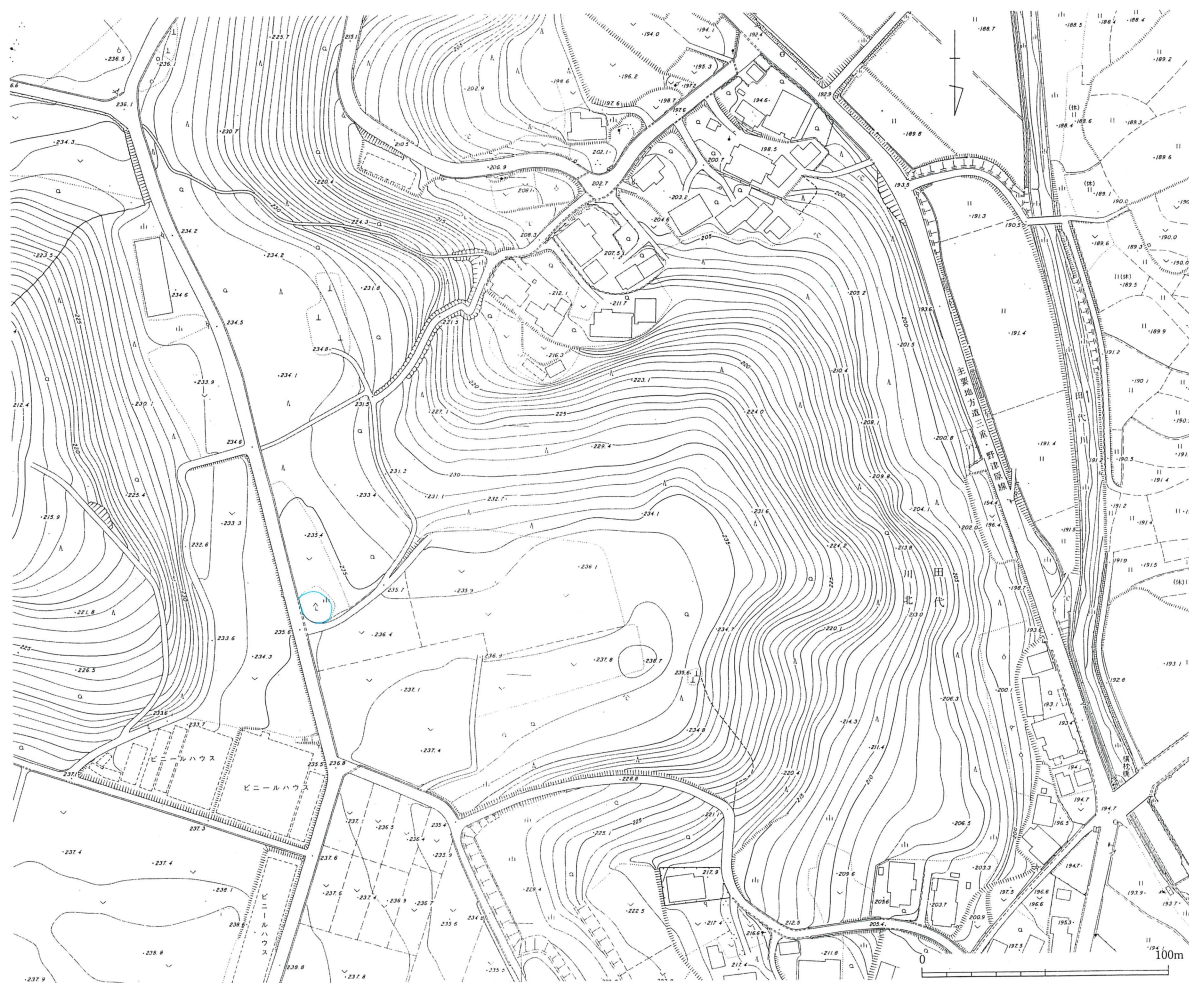
千仏南遺跡は標高約230mの台地上にあり、北東を茜川、南西側を田代川に挟まれ、その北は国道57号が走る田中地区に向かって落ちている。その比高差は35mから50mである。周辺には千仏東遺跡・川北遺跡・えのきどくぼ遺跡等旧石器時代の遺物散布地や縄文晩期の遺物包蔵地である赤鳥居遺跡・岡崎遺跡などが広がっている。また、約800m北東の位置に、文安二年（1445）銘の西ヶ迫石幢々身がある。

この場所は、旧田代村と旧田中村の境に近い道端にあたり、豊後大野市田代字塚ノ原1188番地にある。そこでは東西7.5m、南北11m（面積114㎡）の範囲に一字一石経、宝篋印塔等の石造物が東向きに5基立ち並んで確認された。付近では同様な近世墓が1121番地と1434番地の2箇所で確認されている。

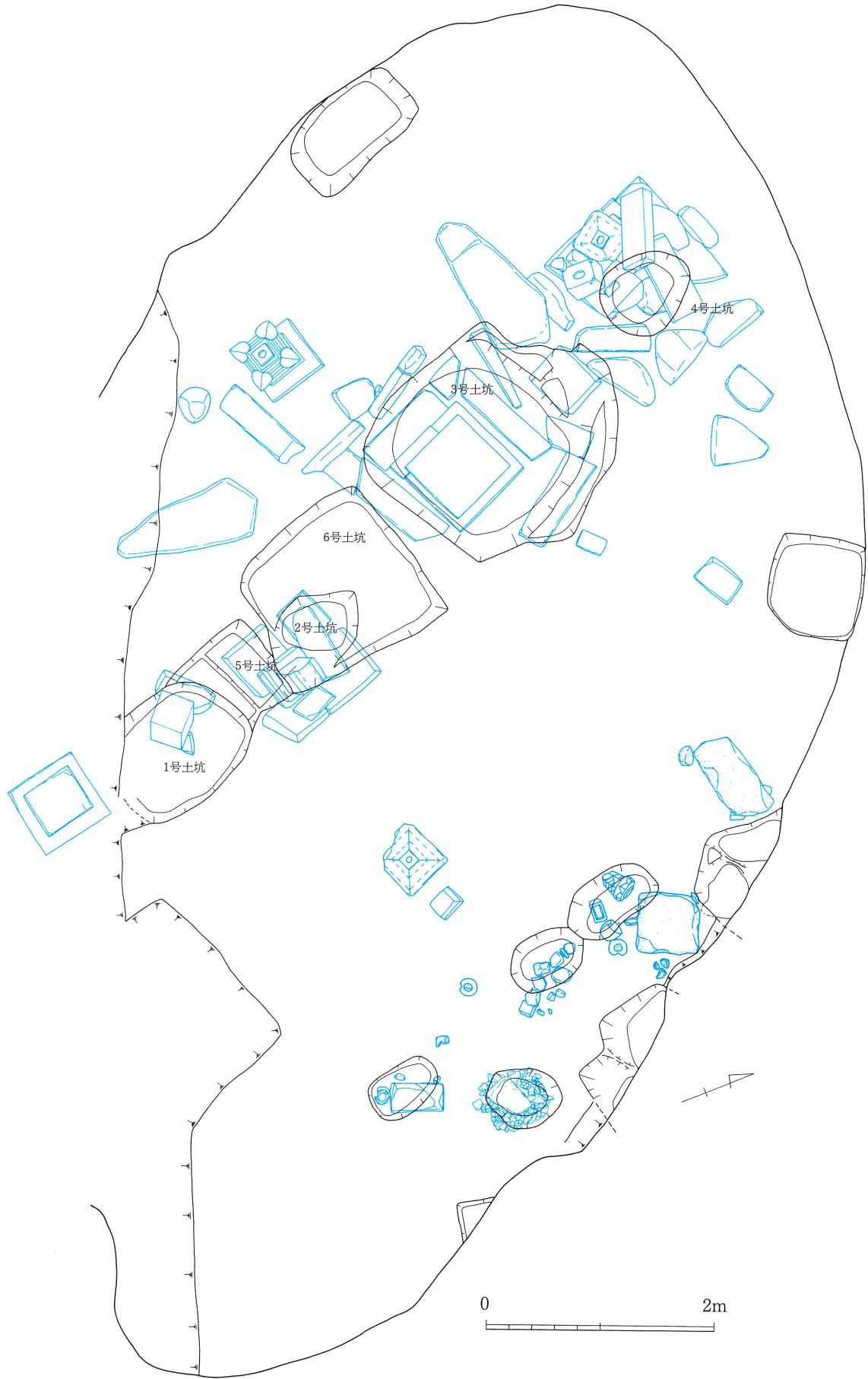
今回の調査は、一般国道57号中九州横断道路の大野インターチェンジ建設工事に伴う事前の発掘調査として実施され、平成13年1月9日に開始した。まず周辺の清掃と全景写真撮影の後、平板測量等を行った。その後、石塔の個別測量、刻字面の採拓をした。石塔移転後は地下遺構の確認及び掘り下げ、一字一石の取り上げ等を実施し、2月13日をもって調査は終了した。

第2節 遺構と遺物

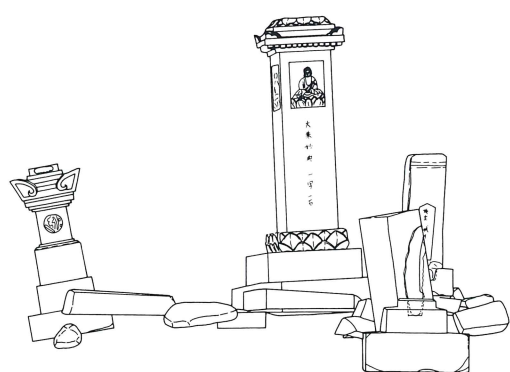
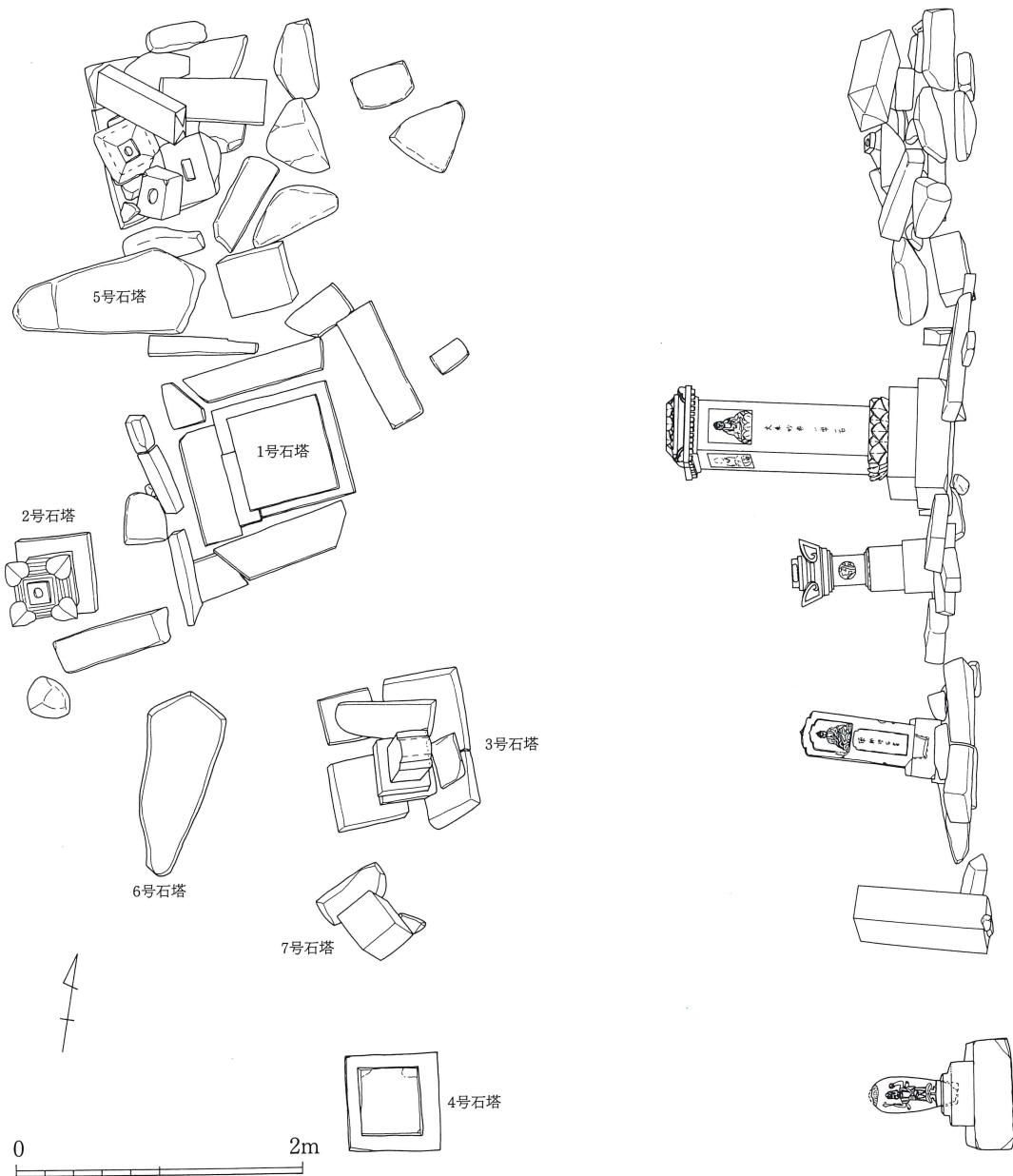
調査区の中央部に、一字一石経塔、宝篋印塔等の石造物が東向きに5基立ち並んでいる。南から青面金剛像（4号石塔）、三界萬霊塔（7号石塔）、薬師経石塔（3号石塔）、大乘妙典一字一石（1号石塔）、1号と3号の



第77図 千仏南遺跡調査区位置図（1/3,000）



第78图 千仝南遺跡遺構配置図 (1/50)



第79图 千仏南遺跡石造物実測図 (1/50)

間やや後ろに宝篋印塔（2号石塔）が立っていた。その東西に、石造物と同様に南北に並んだ土墳墓が検出された。中には60cm大の角礫や小礫で墓壇を覆っているものがあった。土墳墓群と石造物群との間隔は約2mあり、道や墓前として機能していたようである。

7号石塔（第84図）—1743年

総高91cm、横28cm、縦27cmの経碑は方柱形で下部に方形枅があり、台石が失われた状態で確認された。石材は凝灰岩製である。

前面中央部に「三界萬靈」、裏面に「□部經一字一石」、その右に小さく「浄土」の銘文を刻む。また右側面に「寛保三癸亥年十一月朔日」、左側面に「施主 城井玄立」の文字を薬研彫で刻む。

1・5号土坑（第80図）

7号石塔（三界萬靈・浄土□部經一字一石・寛保三年（1743））の経碑の下部構造として、礫石経の埋納土坑が検出された。埋納土坑は地表面から約10cmの表土を掘削し検出した。土坑の平面プランは、東西100cm、南北90cmの隅丸の方形を呈する。確認面から底面までは40cmほどの深さがある。礫石経は、この土坑の床面から高さ35cmの範囲に、手の平に納まる扁平な河原石がびっしりと詰まった状態で検出された。本土坑は北側を約90cm四方、深さ30cmの5号土坑に切られている。

礫石経（表8）

本土坑に埋納された礫石の総数は4,066個を数えた。その内、文字の鮮明な礫石は269個、文字の判読ができなかった礫石は3797個である。文字の判明したものの種数は161種であった。最も数が多かったのは「生」の9個、次いで「薩」の8個、「者」の7個、「佛」の6個、「諸」「無」の5個、4個の「聞」「何」「得」「阿」「有」「作」「人」「爲」「壽」、3個の「是」「天」「一」「三」「六」「土」「言」「正」「菩」と続いている。

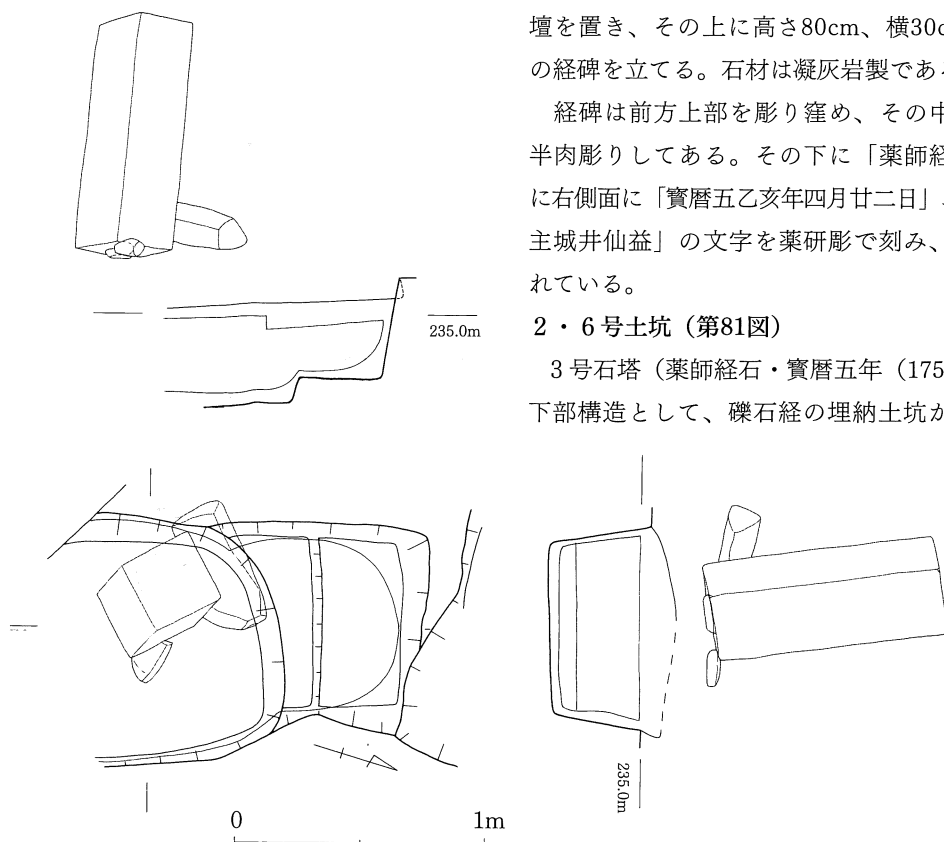
3号石塔（第84図）—1755年

約90cm四方の基礎の上に、高さ15cmと20cmの基壇を置き、その上に高さ80cm、横30cm、縦24cm、の経碑を立てる。石材は凝灰岩製である。

経碑は前方上部を彫り窪め、その中に薬師如来を半肉彫りしてある。その下に「薬師経石書」、さらに右側面に「寶曆五乙亥年四月廿二日」、左側面に「施主 城井仙益」の文字を薬研彫で刻み、さらに墨入されている。

2・6号土坑（第81図）

3号石塔（薬師経石・寶曆五年（1755））の経碑の下部構造として、礫石経の埋納土坑が検出された。



第80図 千仏南遺跡1・5号土坑実測図（1/30、下部土坑は断面見透し図、上部石塔は正面図）

埋納土坑は地表面から約20cmで検出された。2号土坑は東西70cm、南北65cm、深さ60cmの不定形の平面プランを呈し、礫石経は土坑の床面から高さ45cmの範囲に、扁平な河原石が詰まった状態で検出された。本土坑の下から約140cm四方、深さ20cmの6号土坑が検出された。

礫石経（表9）

本土坑に埋納された礫石の総数は983個を数えた。その内、文字の鮮明な礫石は229個、文字の判読ができなかった礫石は754個である。文字の判明したものの種数は128種であった。最も数が多かったのは「或」の14個、次いで「人」の9個、「身」の7個、「現」「得」「善」の6個、「佛」「命」「無」「是」「生」の5個、4個の「諸」「薩」「若」「等」「者」、3個の「神」「日」「王」「不」と続いている。

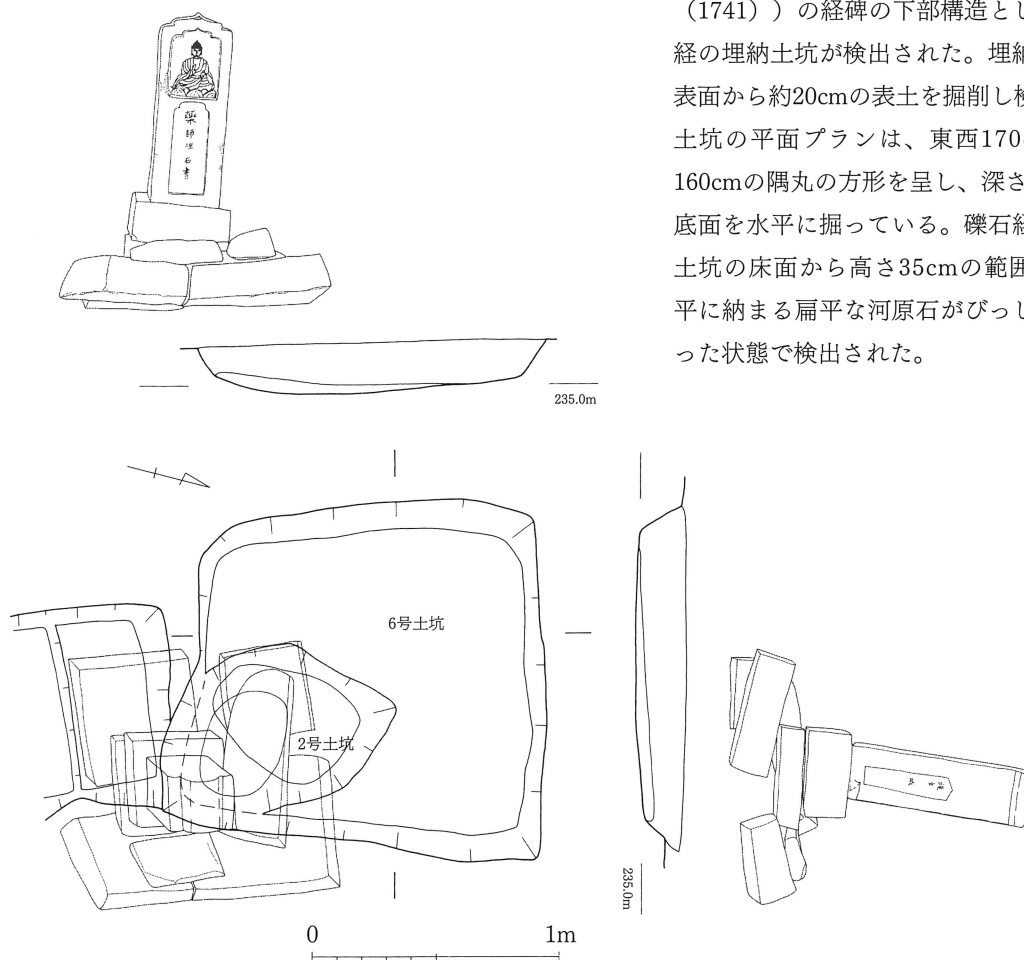
1号石塔（第83図）—1741年

約130cm四方の基礎の上に、高さ24cm、横78cm、縦80cmと高さ20cm、横62cm、縦60cmの2段の基壇を置き、その上に台座と経碑、笠をのせる。石材は凝灰岩製である。

蓮華座状の台座は3重単弁の8弁で、高さ13cm。経碑は四方を方形に彫り窪め、その中に釈迦如来（前面）、阿弥陀如来（右側面）、観世音菩薩（左側面）、地藏菩薩（後面）が半肉彫りしてある。各面ともその下に銘文が彫られる。前面中央部に「大乘妙典一字一石」、その右に「寛保元辛酉年」、その左に「七月十有五日」とある。右側面には「南無阿弥陀如来」、左側面に「南無観世音菩薩」。さらに後面には「奉為三界萬靈等」、その右に「願主」、左に「城井玄立」の銘が彫られている。笠部は垂木を造りだし、その上に隅飾突起、反花をのせる、本来はこの上に宝珠がのっていたようである。

3号土坑（第82図）

1号石塔（大乘妙典一字一石・寛保元年（1741））の経碑の下部構造として、礫石経の埋納土坑が検出された。埋納土坑は地表面から約20cmの表土を掘削し検出した。土坑の平面プランは、東西170cm、南北160cmの隅丸の方形を呈し、深さ85cmで、底面を水平に掘っている。礫石経は、この土坑の床面から高さ35cmの範囲に、手の平に納まる扁平な河原石がびっしりと詰まった状態で検出された。



第81図 千仏南遺跡2・6号土坑実測図（1/30、下部土坑は断面見透し図、上部石塔は正面図）

礫石経（表10）

本土坑に埋納された礫石の総数は12,229個を数えた。その内、文字の鮮明な礫石は257個、文字の判読ができなかった礫石は11,972個である。文字の判明したものの種数は148種であった。最も数が多かったのは「一」の12個、次いで「無」「有」の11個、「人」の8個、「十」「不」の6個、「得」「大」の5個、「三」の4個、3個の「此」「尼」「六」「是」「作」「師」「坐」「生」「八」「求」「千」と続いている。

2号石塔（第84図）

本宝篋印塔は1号石塔の後方にあり、その基礎第3重前面には種子シッチリヤ（宝篋印陀羅尼経）が薬研彫りされている。石材は凝灰岩である。上面に2段の段形があり、その上に高さ22cmの塔身がおさまる。塔身の四方には金剛界四仏の種子キリーク（阿弥陀如来）、タラク（宝生如来）、ウーン（阿閼如来）、アク（不空成就如来）が陽刻されている。笠の段形は下部3段、上部4段。隅飾突起は一石造り出しで、外に開いている。その上に格狭間がみられるが、相輪は見あたらない。

4号石塔（第84図）

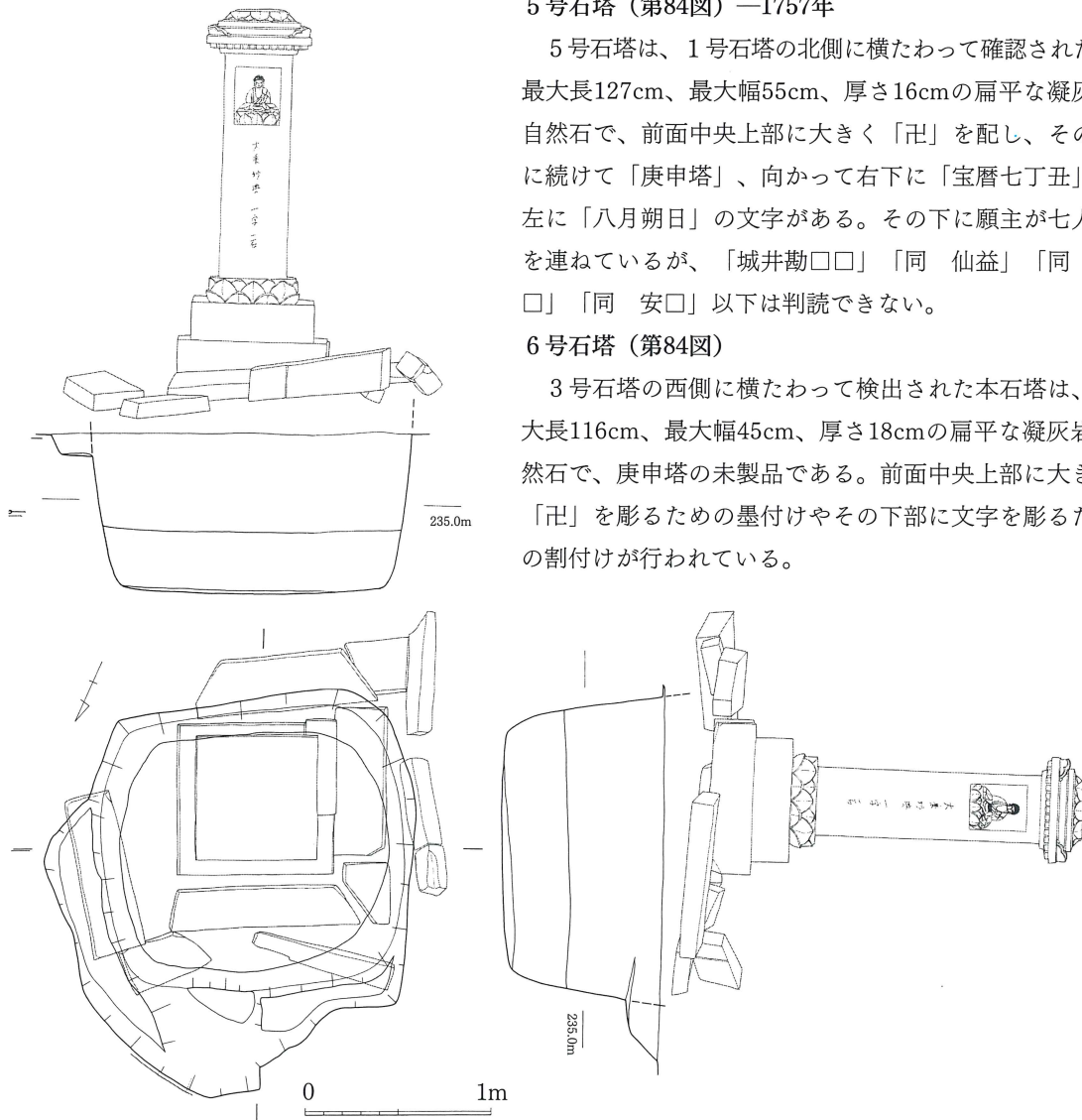
調査区南側に立っており、基礎1段（高さ24cm）、台石2段（高さ15cm、7cm）の上に、青面金剛像が半肉彫りされたもので、その総高は93cm。本体と台石を方形柄で固定する。石材はともに凝灰岩製である。金剛像は腕が4本、手に三叉戟・法輪を持つ。

5号石塔（第84図）—1757年

5号石塔は、1号石塔の北側に横たわって確認された。最大長127cm、最大幅55cm、厚さ16cmの扁平な凝灰岩自然石で、前面中央上部に大きく「卍」を配し、その下に続けて「庚申塔」、向かって右下に「宝曆七丁丑」、左に「八月朔日」の文字がある。その下に願主が七人名を連ねているが、「城井勘□□」「同 仙益」「同 □□」「同 安□」以下は判読できない。

6号石塔（第84図）

3号石塔の西側に横たわって検出された本石塔は、最大長116cm、最大幅45cm、厚さ18cmの扁平な凝灰岩自然石で、庚申塔の未製品である。前面中央上部に大きく「卍」を彫るための墨付けやその下部に文字を彫るための割付けが行われている。



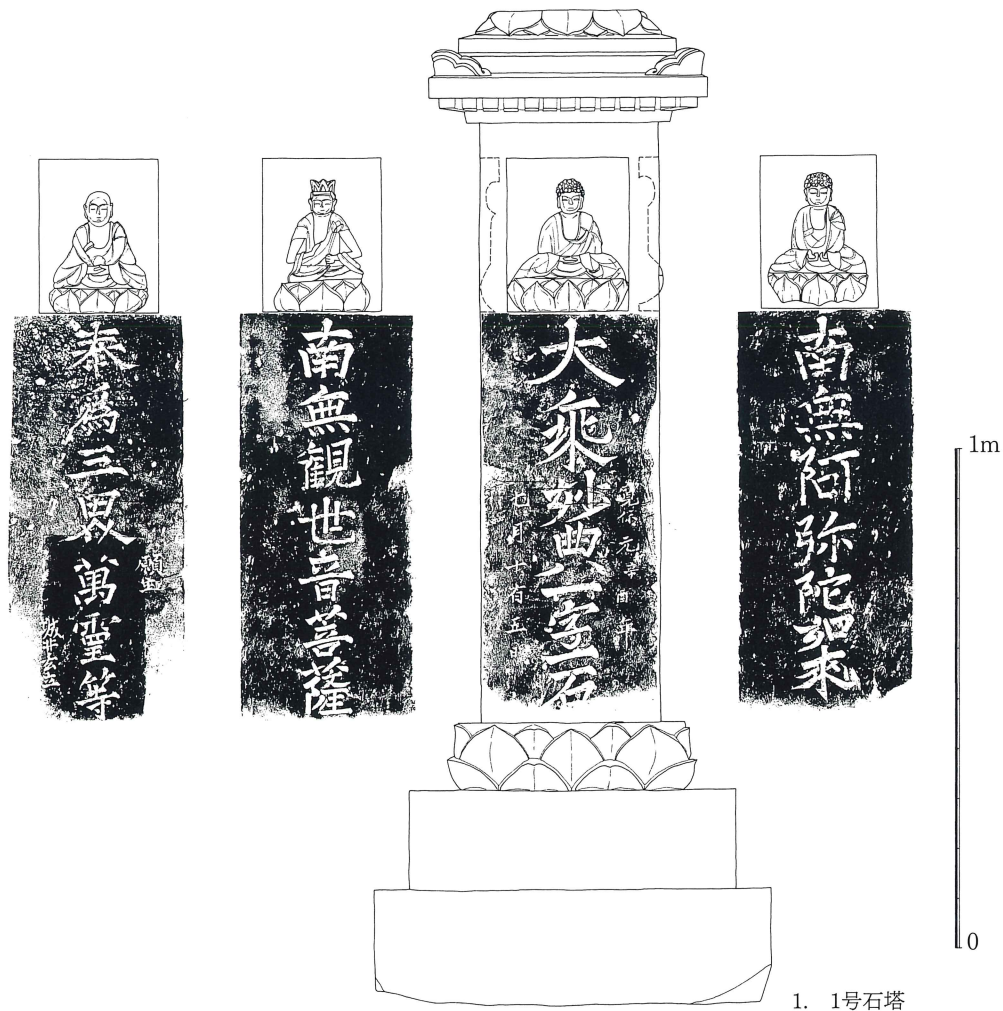
第82図 千仏南遺跡3号土坑実測図（1/40、下部土坑は断面見透し図、上部石塔は正面図）

その他の石造物（第85図）

1の檀陀地蔵は、2号土坑から礫石経に混じって出土した。2の地蔵は蓮華座と一石でできている。3から12は石塔の部材で、すべて凝灰岩製。3は反花、4は宝珠、5・6は笠部、7は水鉢。

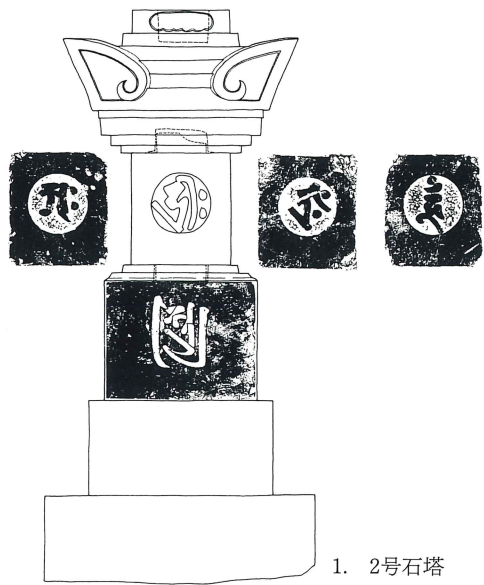
その他の礫石経（表12・13）

5号土坑、6号土坑及び整理の段階で混じった礫石をここに載せる。その総数は12,326個を数え、その内、文字の鮮明な礫石は1,729個、文字の判読ができなかった礫石は10,597個である。文字の判明したものの種数は465種であった。最も数が多かったのは「佛」の58個、次いで「不」の35個、「有」の33個、「人」の32個、「是」の31個、「諸」の28個、「一」の27個、「爲」の26個、「菩」「得」の25個、「無」「衆」「大」の24個、「生」「三」の23個、「於」「者」の20個、「十」の19個、「法」「行」の18個、「中」の16個、「其」の15個、「若」の14個、「我」「作」「二」の13個、「王」「聞」「阿」「天」の12個、「賓」「之」「利」「光」「經」「上」の11個、10個の「當」「住」「言」「量」「來」と続いている。

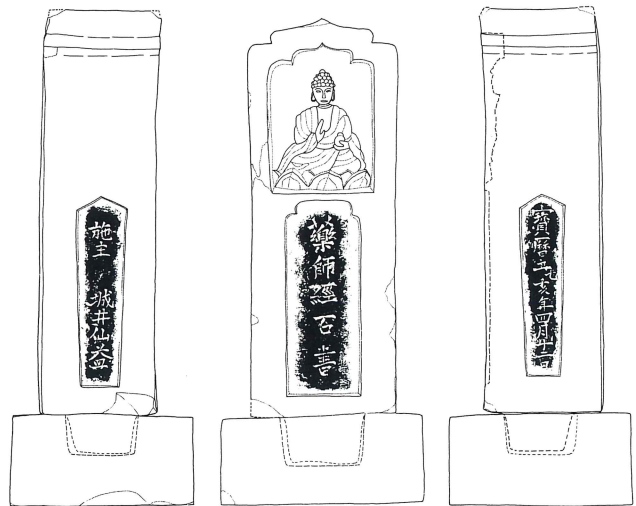


1. 1号石塔

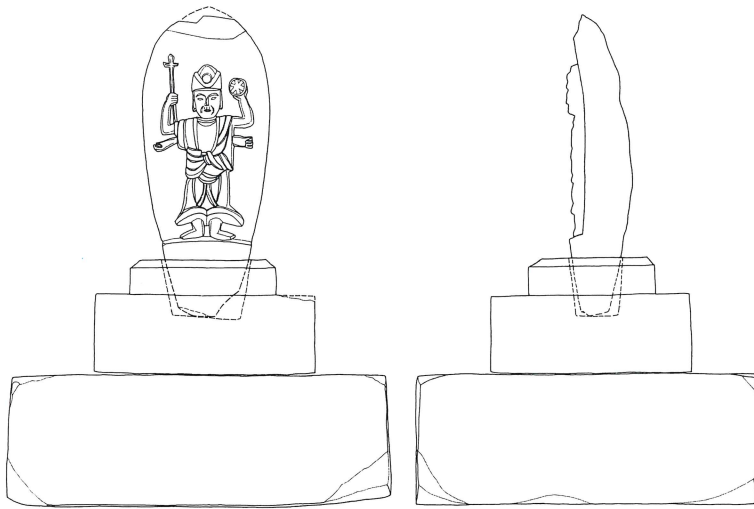
第83図 千仏南遺跡石造物実測図① (1/15)



1. 2号石塔



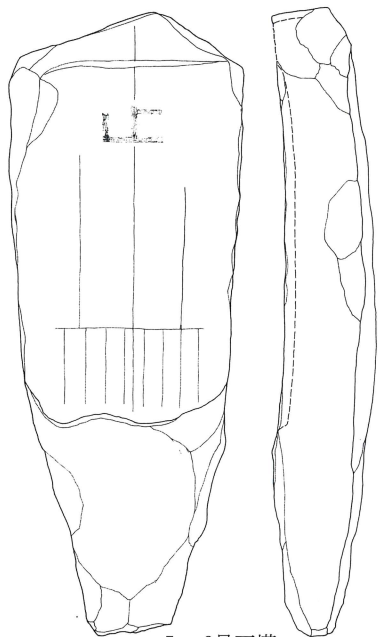
2. 3号石塔



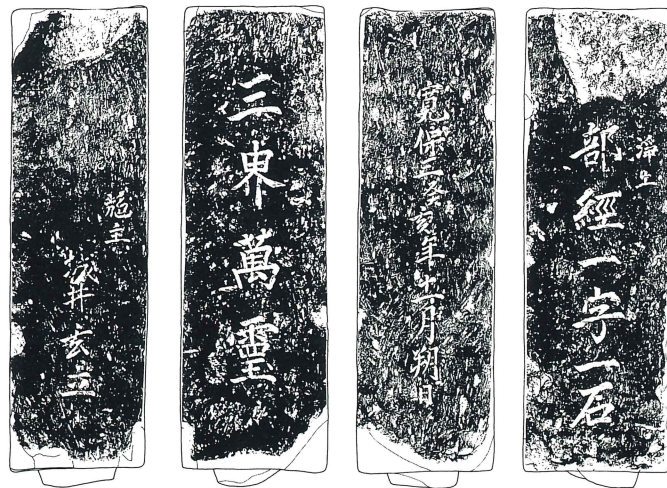
3. 4号石塔



4. 5号石塔



5. 6号石塔



6. 7号石塔



第84图 千仏南遺跡石造物実測图② (1/15)

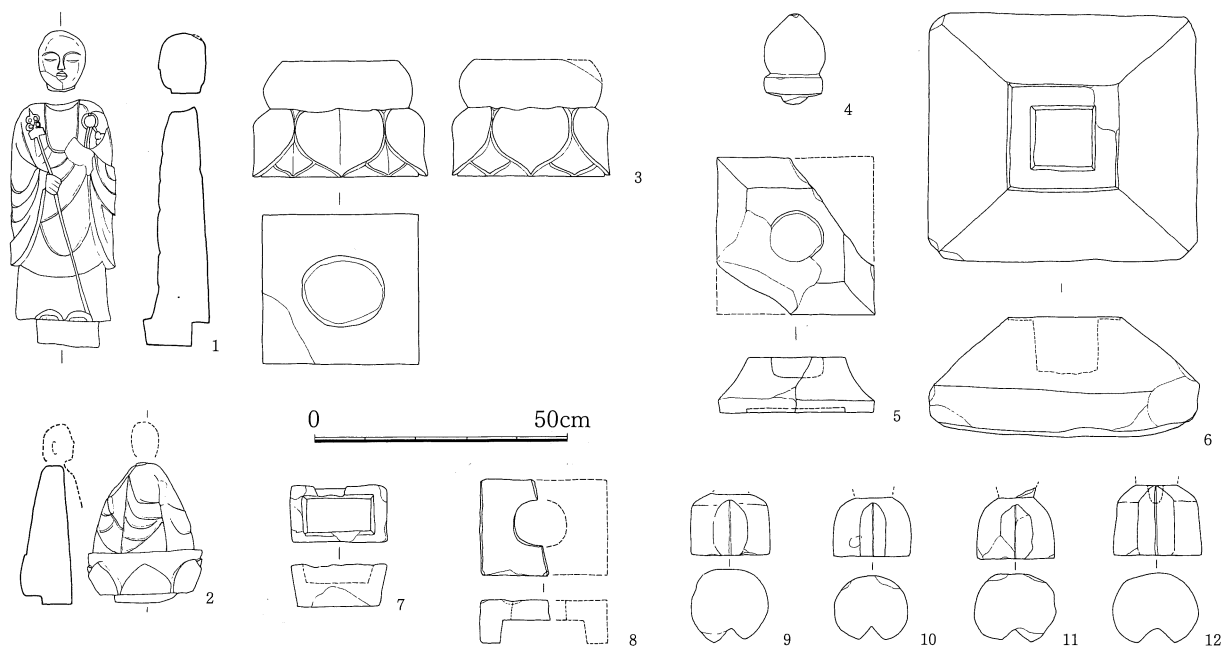
第3節 まとめ

一字一石塔の埋納行為は近世を中心とした庶民信仰の所産であり、何らかの供養塔として認識されてきた。本遺跡の石造物についても、享保年間の天下大飢饉の後、岡藩の財政が困窮した寛保二年（1742）を前後して、1号石塔（大乘妙典一字一石塔）と3号石塔（三界萬靈塔）が造立され、さらに宝暦五年（1755）大暴風雨による大洪水に見舞われた頃、3号石塔（薬師経石塔）及び5号石塔（庚申塔）が造立されており、災害や飢饉をもたらす虫除け等、禍をなくし生活安穩の一念からこれらの石塔が建てられたと考える。

また、大分市の尾崎遺跡の一字一石経塚同様、江戸時代のムラ境を考える資料として本遺跡の一字一石塔や庚申塔があげられる。ノラの虫をこの場所まで追いやっていた(虫送り)ことだろう。この地が以前「六地藏」と呼ばれ、2号土坑から檀陀地藏が出土していることからノラとヤマ、あるいはノラと隣接する村の境を認識していたことが窺える。

[参考文献]

- ・大分県大野町史刊行会 1980『大分県大野町史』
- ・大分県教育委員会 2002『尾崎遺跡ほか』大分県文化財調査報告書第137輯



第85図 千仏南遺跡石造物実測図③ (1/15)

表8 千仏南遺跡1号土坑出土経石一覽

文字	個数	文字	個数	文字	個数	文字	個数	文字	個数
生	9	上	2	惱	1	惡	1	山	1
薩	8	說	2	觀	1	火	1	告	1
者	7	化	2	寶	1	共	1	黃	1
佛	6	定	2	彼	1	以	1	願	1
諸	5	慧	2	中	1	往	1	成	1
無	5	樂	2	長	1	我	1	令	1
聞	4	德	2	方	1	鹿	1	羅	1
何	4	聲	2	並	1	厭	1	在	1
得	4	即	2	注	1	衣	1	示	1
阿	4	音	2	同	1	熱	1	身	1
有	4	故	2	表	1	吉	1	叱	1
作	4	所	2	福	1	解	1	兼	1
人	4	皆	2	地	1	具	1	降	1
爲	4	法	2	大	1	鳴	1	廣	1
壽	4	賢	2	其	1	且	1	魔	1
是	3	於	2	來	1	信	1	目	1
天	3	英	1	由	1	車	1	十	1
一	3	名	1	利	1	青	1	終	1
三	3	世	1	亦	1	憎	1	色	1
六	3	根	1	而	1	問	1	深	1
土	3	興	1	了	1	明	1	幸	1
言	3	業	1	又	1	事	1	或	1
正	3	國	1	也	1	穉	1	行	1
菩	3	敬	1	哉	1	真	1	現	1
命	2	計	1	免	1	舍	1	須	1
道	2	見	1	棄	1	枝	1	如	1
白	2	可	1	浴	1	食	1	持	1
品	2	應	1	勇	1	思	1	讚	1
俱	2	經	1	女	1	從	1	奧	1
已	2	光	1	心	1	受	1	寿	1
合	2	交	1	下	1	進	1	夢	1
發	2	百	1	間	1	稱	1		
當	2	悲	1	王	1	衆	1		

表9 千仏南遺跡2号土坑出土経石一覽

文字	個数	文字	個数	文字	個数	文字	個数	文字	個数
或	14	時	2	作	1	虛	1	起	1
人	9	與	2	色	1	地	1	哉	1
身	7	尔	2	七	1	度	1	孝	1
現	6	五	2	藏	1	詔	1	阿	1
得	6	来	2	師	1	惡	1	敬	1
菩	6	所	2	說	1	他	1	牛	1
佛	5	我	2	名	1	朝	1	議	1
命	5	二	2	摩	1	就	1	圓	1
無	5	三	2	邊	1	垢	1	後	1
是	5	入	2	福	1	定	1	界	1
生	5	六	2	來	1	天	1	護	1
諸	4	道	2	又	1	車	1	延	1
薩	4	化	2	風	1	笑	1	夜	1
若	4	在	1	父	1	月	1	擁	1
等	4	有	1	蓮	1	帝	1	財	1
者	4	異	1	目	1	上	1	千	1
神	3	旬	1	非	1	時	1	土	1
日	3	星	1	犯	1	鳩	1	商	1
王	3	心	1	毘	1	今	1	言	1
不	3	產	1	明	1	枝	1	醫	1
衆	2	轉	1	万	1	永	1	世	1
地	2	善	1	白	1	頃	1	性	1
大	2	受	1	衆	1	鬼	1	災	1
當	2	造	1	婦	1	持	1	業	1
官	2	但	1	隨	1	愛	1	若	1
其	2	功	1	慮	1	故	1		

表10 千仏南遺跡 3号土坑出土経石一覽

文字	個数	文字	個数	文字	個数	文字	個数	文字	個数
一	12	化	2	西	1	從	1	通	1
無	11	諸	2	刀	1	却	1	昨	1
有	11	彼	2	分	1	円	1	位	1
人	8	說	2	下	1	尔	1	神	1
十	6	身	2	提	1	應	1	買	1
不	6	名	2	智	1	共	1	咀	1
得	5	梵	2	万	1	可	1	信	1
大	5	和	2	百	1	強	1	河	1
三	4	来	2	世	1	男	1	偏	1
此	3	貧	2	民	1	高	1	付	1
尼	3	然	2	普	1	善	1	仁	1
六	3	以	2	我	1	光	1	旦	1
是	3	死	2	樂	1	丘	1	弗	1
作	3	衆	2	譽	1	記	1	之	1
師	3	亦	2	立	1	經	1	獄	1
坐	3	於	2	復	1	卷	1	莊	1
生	3	佛	2	壽	1	王	1	合	1
八	3	供	2	成	1	滯	1	家	1
求	3	愛	1	發	1	法	1	獨	1
千	3	莫	1	又	1	訶	1	萬	1
陀	2	盡	1	授	1	行	1	門	1
中	2	曾	1	前	1	定	1	空	1
土	2	善	1	所	1	沙	1	國	1
二	2	敬	1	持	1	議	1	菩	1
受	2	或	1	珠	1	涼	1	聞	1
常	2	祈	1	出	1	若	1	宜	1
間	2	足	1	尊	1	當	1	回	1
度	2	在	1	者	1	薩	1	華	1
爲	2	狹	1	正	1	舍	1	閻	1
道	2	阿	1	命	1				

表11 千仏南遺跡 4号土坑出土経石一覽

文字	個数	文字	個数	文字	個数	文字	個数	文字	個数
羅	3	師	1	野	1	道	1	地	1
諸	3	供	1	那	1	渡	1	未	1
薩	2	祝	1	寶	1	比	1	臂	1
畝	2	三	1	瑟	1	疇	1	智	1
上	2	計	1	酒	1	梨	1	宜	1
人	2	因	1	待	1	竟	1	於	1
法	2	死	1	淨	1	没	1	怛	1
囉	2	是	1	盡	1	鉢	1	深	1
作	1	以	1	勝	1	迦	1		

表12 千仏南遺跡出土経石一覽 (1)

文字	個数	文字	個数	文字	個数	文字	個数	文字	個数	文字	個数
佛	58	爲	26	三	23	其	15	阿	12	上	11
不	35	善	25	於	20	若	14	天	12	當	10
有	33	得	25	者	20	我	13	寶	11	住	10
人	32	無	24	十	19	作	13	之	11	言	10
是	31	衆	24	法	18	二	13	利	11	量	10
諸	28	大	24	行	18	王	12	光	11	來	10
一	27	生	23	中	16	聞	12	經	11	羅	9

表13 千仏南遺跡出土經石一覽 (2)

文字	個數	文字	個數	文字	個數	文字	個數	文字	個數	文字	個數
而	9	樂	4	神	2	亦	1	絡	1	要	1
華	9	欲	4	塔	2	七	1	結	1	唯	1
時	9	受	4	多	2	設	1	繩	1	呼	1
道	9	八	4	高	2	讚	1	稱	1	尋	1
見	9	慧	4	語	2	證	1	稀	1	跋	1
比	8	善	4	調	2	護	1	以	1	車	1
所	8	如	4	國	2	床	1	昔	1	盼	1
知	8	各	4	舍	2	塵	1	隨	1	庄	1
百	8	久	3	衆	2	微	1	辱	1	處	1
薩	8	和	3	具	2	？	1	背	1	勝	1
方	8	未	3	外	2	衡	1	吹	1	互	1
至	7	問	3	衣	2	像	1	弥	1	親	1
宜	7	成	3	慈	2	倒	1	立	1	色	1
卅	7	音	3	教	2	偈	1	了	1	歲	1
聲	7	海	3	眞	2	偏	1	靈	1	際	1
足	6	身	3	罪	2	？	1	歷	1	女	1
復	6	廣	3	手	2	前	1	志	1	照	1
此	6	六	3	珠	2	發	1	閉	1	号	1
共	6	惡	3	掌	2	毒	1	憤	1	昇	1
同	6	緣	3	日	2	施	1	僧	1	辰	1
在	6	蓮	3	盡	2	金	1	柱	1	先	1
德	6	殊	3	解	2	那	1	悅	1	周	1
從	6	出	3	顏	2	南	1	闍	1	舌	1
下	6	起	3	家	2	槃	1	情	1	敬	1
事	6	信	3	夫	2	跌	1	想	1	失	1
化	6	自	3	五	2	分	1	性	1	司	1
供	6	子	3	數	2	野	1	慢	1	支	1
皆	6	藏	3	奉	2	普	1	働	1	承	1
應	6	但	3	鉢	2	平	1	惜	1	書	1
師	6	宮	3	須	2	極	1	九	1	將	1
念	6	眞	3	立	2	樹	1	云	1	斬	1
却	6	因	3	文	2	植	1	河	1	義	1
尔	6	示	3	父	2	壇	1	洗	1	緊	1
丘	6	令	3	曾	2	林	1	婆	1	斤	1
相	6	求	3	切	2	廻	1	清	1	嚴	1
千	6	香	3	四	2	髮	1	滅	1	業	1
土	5	民	3	難	2	捕	1	演	1	堅	1
正	5	已	3	世	2	遇	1	汗	1	喜	1
又	5	能	3	耶	2	進	1	淨	1	觀	1
尊	5	億	3	目	2	迦	1	梵	1	棄	1
甚	5	右	3	退	2	樓	1	品	1	禺	1
意	5	提	3	重	2	根	1	貧	1	剛	1
智	5	明	3	汝	2	被	1	母	1	切	1
可	5	龍	3	深	2	禪	1	阜	1	功	1
何	5	白	3	彼	2	礼	1	本	1	果	1
己	5	間	3	況	2	規	1	田	1	鹿	1
願	5	声	3	恒	2	禮	1	賜	1	額	1
坐	5	充	3	怖	2	祖	1	丁	1	疑	1
乘	5	水	3	思	2	祈	1	塗	1	黃	1
万	4	讀	3	沙	2	垓	1	頂	1	獄	1
漢	4	木	2	門	2	持	1	姚	1	印	1
地	4	命	2	心	2	捨	1	焚	1	夷	1
記	4	異	2	漠	2	授	1	斷	1	雲	1
定	4	篤	2	波	2	韋	1	馱	1	益	1
說	4	即	2	棘	2	窮	1	轉	1	學	1
及	4	懷	2	便	2	寂	1	火	1	肩	1
現	4	或	2	惜	2	空	1	灯	1	賢	1
乃	4	合	2	属	2	密	1	到	1	形	1
神	4	莫	2	西	2	宋	1	惑	1	俱	1
說	4	動	2	聚	2	宿	1	養	1	但	1
度	4	後	2	今	2	害	1	面	1	并	1
名	4	往	2	訶	2	敦	1	磨	1	邊	1
座	4	地	2	故	2	藝	1	名	1	幢	1
月	4	長	2	與	2	哀	1	味	1	兜	1
等	4	鳥	2	石	1	精	1	魔	1	須	1
尼	4	當	2	詞	1	勢	1	滅	1	于	1
去	4	侍	2	會	1	丈	1	妄	1	別	1
第	4	種	2	葉	1	終	1	由	1	勒	1
常	4	僧	2	待	1					節	1

第6章 田原園遺跡の調査

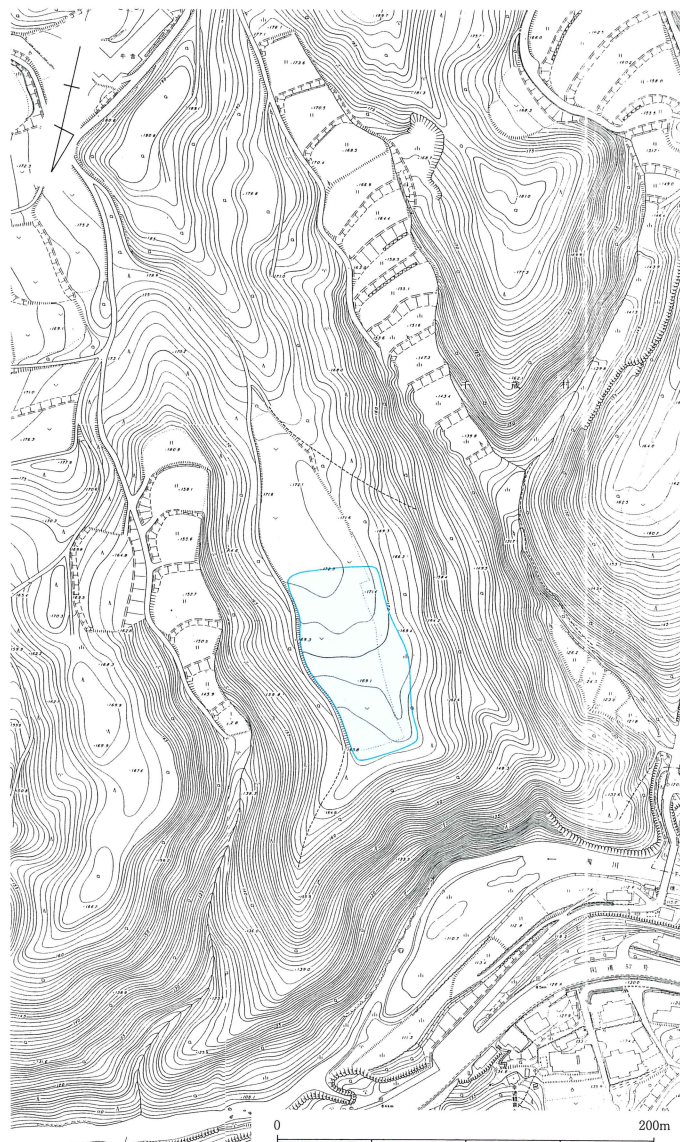
第1節 調査の概要

田原園遺跡は大分県豊後大野市千歳町前田字石取（旧 大野郡千歳村大字前田字石取）に所在し、大野川の支流である茜川流域の田原園集落が所在する台地の北端にあたり、舌状に延びる台地状であった。現在は緩斜面の畑地が広がっていた。遺跡の内容として、弥生時代後期～古墳時代前期が主体の集落跡と考えられていたが、昭和期の開墾により、ほとんどが攪乱を受けており、遺構は全く残っていなかった。攪乱土中より、若干の土器が出土し、破壊された遺跡の時期が出土遺物からうかがえる。

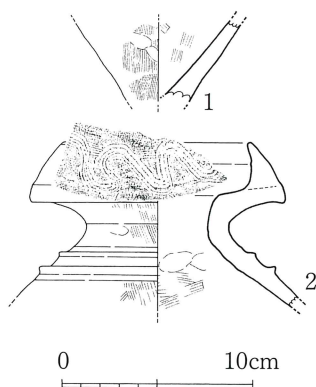
確認調査は、平成15年12月に3日間、実施した。

第2節 遺構と遺物

出土遺物は第87図に示した。1は壺甕類の底部付近であり、内外面に縦方向のハケが認められる。2は壺であり、内傾して立ち上がる口縁をもつ。口縁外面には櫛描による波状文が認められ、肩部には断面三角形の突帯が2条巡っている。弥生時代後期中葉～後葉のものであろうか。



第86図 田原園遺跡調査区位置図 (1/4,000)



第87図 田原園遺跡出土遺物実測図 (1/4)